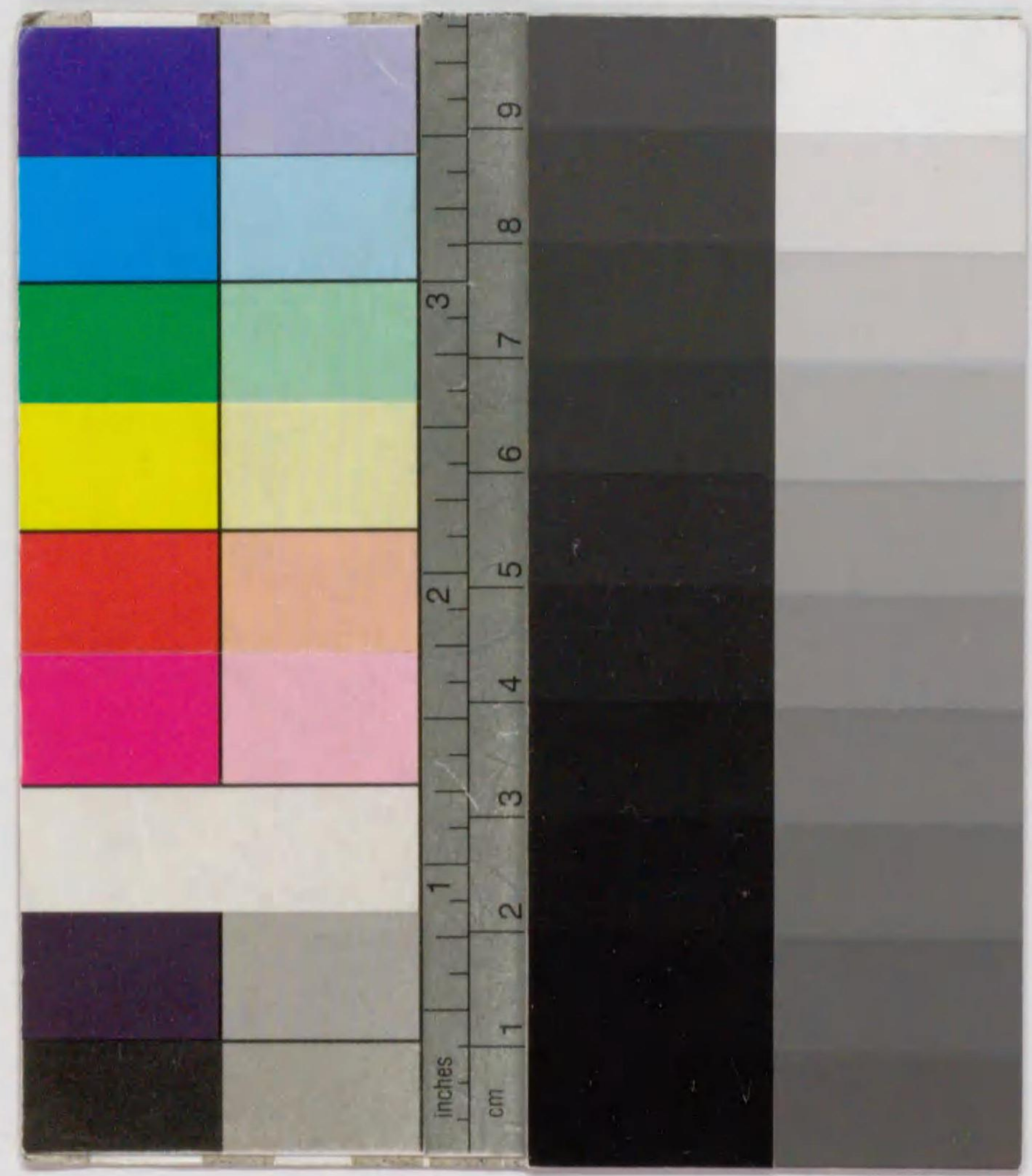


527-16



27
16



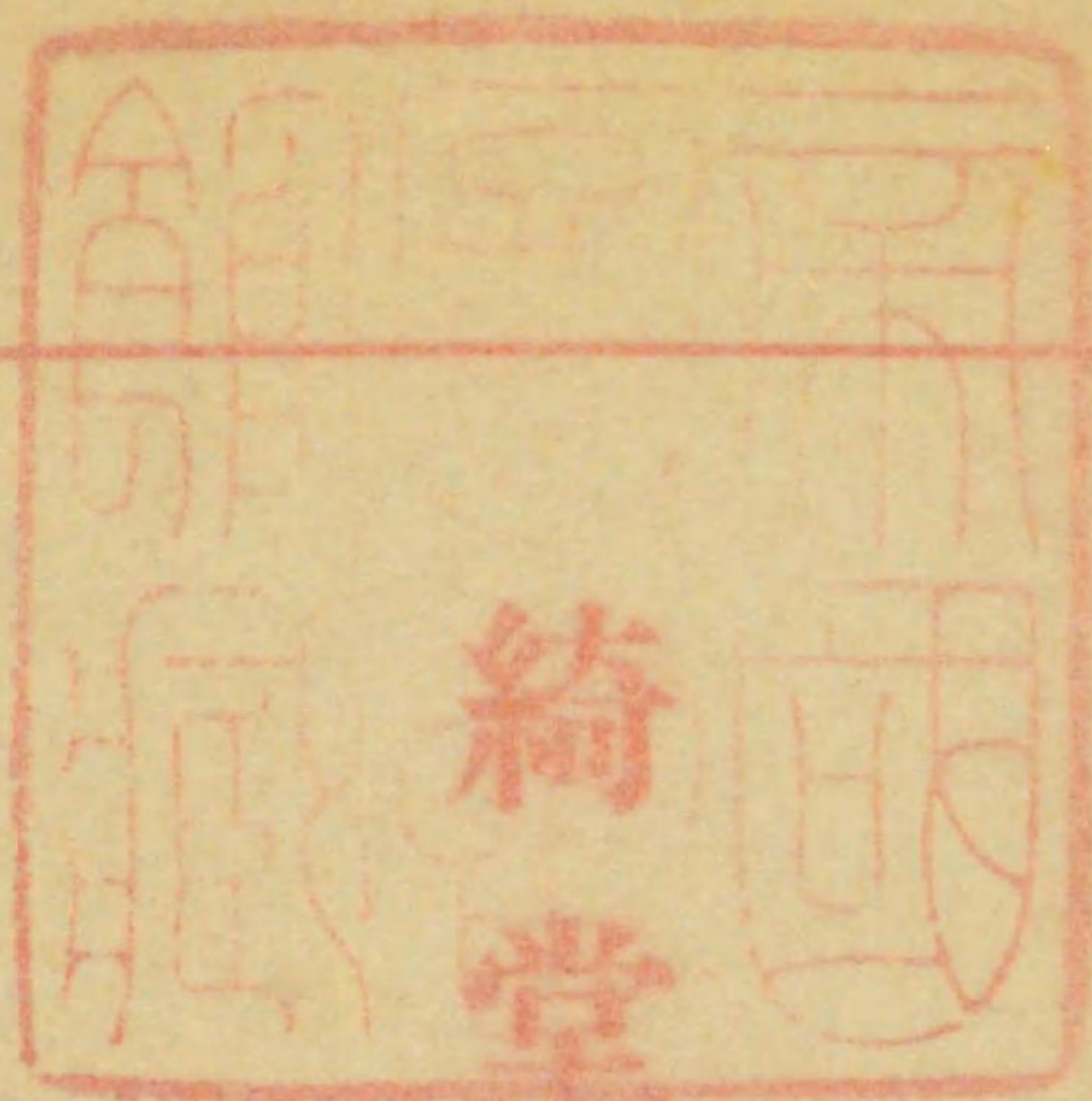
3 165

岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第十四卷

東京春陽堂版

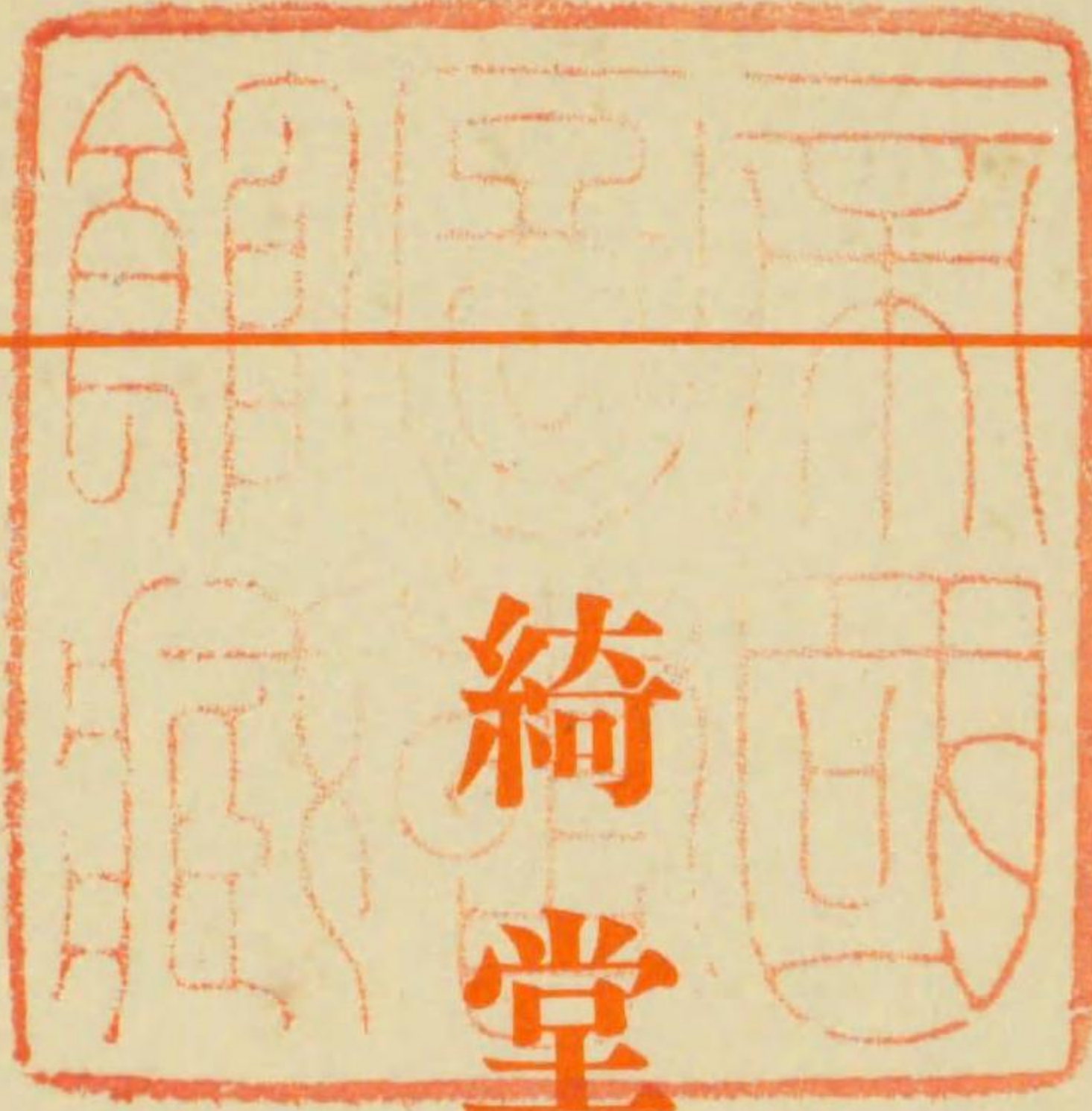


岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第十四卷

東京 春陽堂版



527-16

第十四卷 目次

天保演劇史	一
篠原合戦	八
朝鮮屏風	一九
維新小話	一七五
直助權兵衛	二〇三
長崎の兄弟	二九五
湯屋の二階	三四五
蛇を賣る女	四三二

天保演劇史

31/10

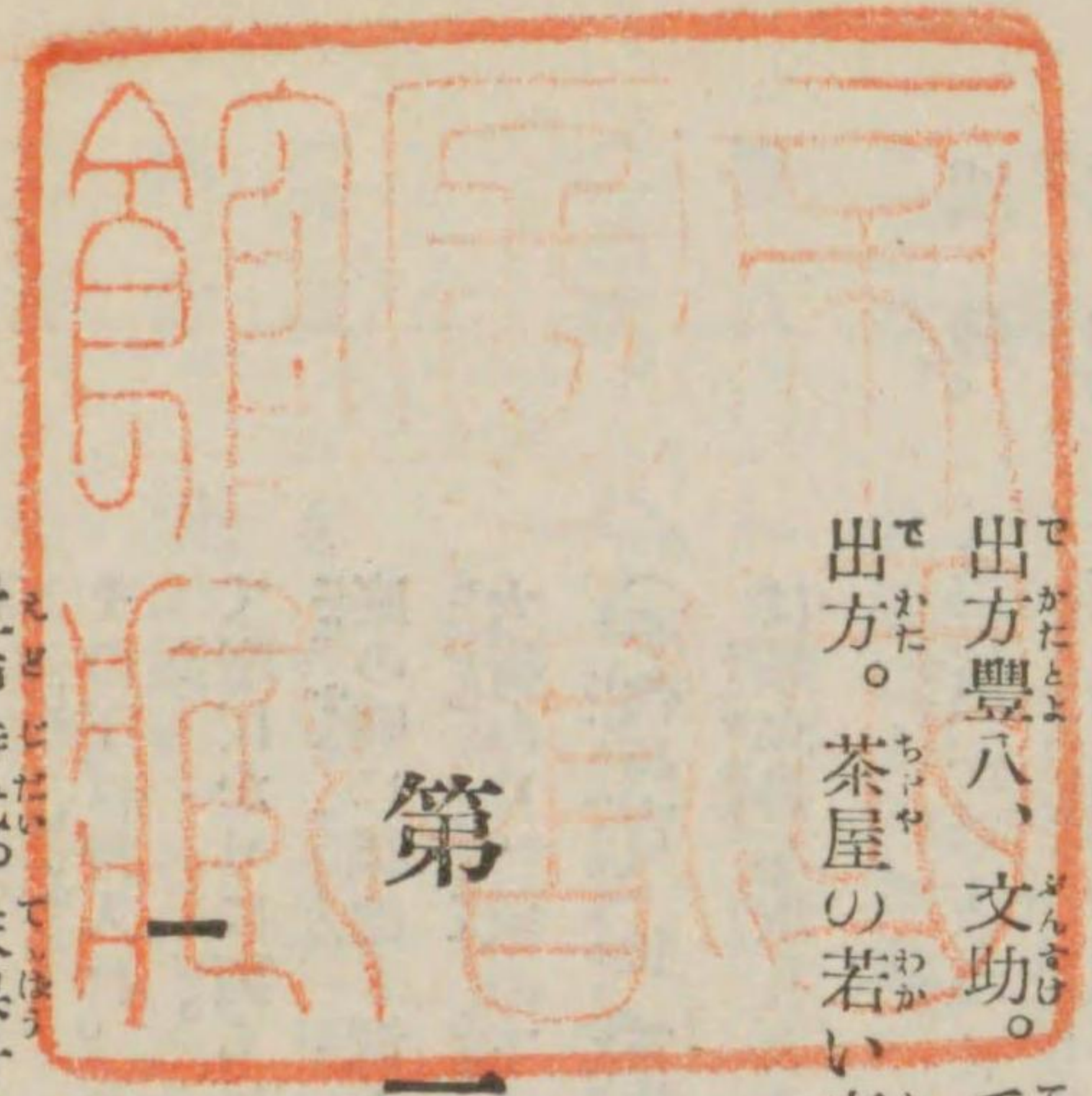
天保演劇史

昭和四年十二月作。

昭和五年一月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——遠山左衛門尉（市川左團次） 鳥居甲斐守（松本幸四郎） 水野越前守（市川中車） 中村勘三郎（澤村宗十郎） 三升屋二三次（市川左升） 坂東彦三郎（市村羽左衛門） 尾上榮三郎（市川松蔦） 中村鴻藏（市川荒次郎） 樂屋番利兵衛（市川猿之助） 利兵衛娘お竹（市川松蔦） 道具方伊之助（市川崑升） など。

登場人物——遠山左衛門尉。鳥居甲斐守。水野越前守。澁川六藏。中村勘三郎。三升屋二三次。龜山爲助。坂東彦三郎。屋上榮三郎。中村鴻藏。中村鷺助。中村鶴五郎。市川みすじ。岩井辰丸。尾上梅千代。尾上菊八。樂屋番利兵衛。利兵衛の娘お竹。道具方伊之助。出方豊八。文助。手代萬吉。門番八介。ほかに中間。茶坊主。侍。小姓。狂言作者。俳優。出方。茶屋の若い者など。



第一幕

江戸時代。天保十二年十一月下旬の午後。

日本橋、堺町の新道、中村座の座元中村勘三郎の家。先月七日の火災に焼かれて、そのあとに建て

たる急ごしらへの假普請と知るべく、下のかたに小さき玄關、正面は寄附。上のかたは座敷とも居間とも付かぬ一間のこゝろにて、好きところ長火鉢を据ゑてあり。その正面の上のかたに神棚、その下は押入れ。つゞいて奥へ出入りの襖。左右は竹の脇かけ窓。庭の下のかたは粗き四つ目垣にて型ばかりに劃られ、火災當時に持ち出した古長持、銀杏鶴の紋をつけたる葛籠の焦げたるなどが、庭の隅に雑然と置かれてあり。上のかたには半ば焼け頽れたる土蔵あり。唯一本焼け残りたる梅の大樹あり。家の下のかたにも假普請の家々みゆ。風の音。

(手代萬吉、狂言作者龜山爲助、俳優中村鴻藏、中村鷺助、中村鶴五郎、女形市川みすじ、岩井辰丸は箱火鉢を取りまきながら押合つて居らび、玄關の式臺には出方豊八と文助が腰をかけてゐる。)

鴻藏。

まだ風がやまねえな。

鷺助。

江戸の名物で毎年今ごろは空つ風が吹くのだが、この冬は取分けて身にしてみるやうだ。

鶴五郎。

なにしろ何處も假普請で、戸障子も満足でねえところへ、毎日びゅう／＼吹かれちやあ遣切れねえ。

鴻藏。

まつたく人泣かせとは此事だ。それにしても萬さん、一體どうなるのだらうな。

萬吉。

(ため息をつく。)それが判るくらゐならこんな苦勞はしねえが、此頃の世の中だから、何

爲助。

がどうなるか、一寸先は暗やみで見當が付かねえ。

陣屋の義経ぢやあないが、有爲轉變の世の中には實に閉口だ。

二三次。

(風の音。下のかたより狂言作者三升屋二三次、五十七八歳、立作者のこしらへにて出づ。)

豊八。

寒い、寒い。(出方に聲をかける。)どうだい、この寒さは……。

文助。

(立つて會釋する。)どうもお寒いことでございます。

二三次。

今朝は下町にも厚い氷が張りました。

豊八。

旦那はお内かね。

二三次。

へえ、内においででございます。

二三次。

(下駄をみて。)やあ、なか／＼大入りだね。

萬吉。

雨か風か、ちつとも判らないので困つてゐるのです。

二三次。

それは困るね。

みすじ。

(涙ぐんで。)ねえ、お師匠さん。まつたく何うなるんでせうねえ。

天保演劇史

辰丸。

毎日悪い噂ばかり聞くので、みんな途方に暮れてゐるんです。

二三次。

(落付いて。)いや、かういふ時には疑心暗鬼を生ずで、兎かくに悪い噂ばかり立てたがるものだが、まあ、まあ、心配することはないよ。

鴻藏。

師匠はいつも落付いてゐるが、ほんたうに大丈夫ですかえ。

鷺助。

どうも世間の評判ぢやあ、三芝居もいよくお取潰しに決まつたやうに云ひますがね。

二三次。

今もいふ通り、世間の噂や評判を聞いて一夕心配してゐては際限がない。現に文化三年に木挽町の芝居が焼けたときにもお取潰しになるとか、遠いところへ移されるとかいふ噂があつたが、それも立消えになつてしまつた。それから三年後に、この堺町と葺屋町が焼

鶴五郎。

けた時にも、本所深川の方へ移されるといふことであつたが、それも先づ無事に済んだ。

爲助。

だが、その時と今とは時世が違つてゐますからね。

二三次。

殊に今度の水野越前さまは、ひどく厳しい人だと云ひますから、どうも安心がなりませ

んよ。

いくら水野越前様だつて、二百年もつゞいてゐる江戸の歌舞伎を、むやみに亡ぼしてしま

ふことは出来まい。子供がおもちや箱をぶち毀すのとは些つと譯が違ふからな。まあ、ま

鴻藏。

あ、あんまり苦勞しない方が好いよ。

二三次。

さうは云つても、なんだか不安心だな。

それにもう一つ都合の好いことは、今度の一件は北の奉行所へまはされて、遠山左衛門尉殿のお係りだといふではないか。おまへ達も知つてゐる通り、あのお人も今こそ立派なお奉行様だが、若い時はなか／＼の道樂者で、木挽町の芝居のお囃子部屋にも暫らく遊んでゐたことがあるのだ。

鴻藏。

そりやあ私も知つてゐるが、むかしは昔、今は今だ。なまじひこつちの樂屋を知つてゐるだけに、却つて始末が悪かあねえかね。

二三次。

それも人による。あのお人は酸いも甘いも知り抜いてゐる苦勞人だから、決して野暮なことをしやあしないよ。屹とこつちの味方になつて下さる。そりやあ大丈夫、受合ひだ。

(二三次は煙草をのんでゐる。一同はやはり不安らしく無言。風の音。下のかたより樂屋番利兵衛、四十歳前後、ひどく亢奮したる體にて出づ。あとよりその娘お竹、十七八歳、追つて出づ。)

お竹。

(父の袖をつかむ。)お父さん……お父さん……。後生だから歸つて下さいよ。
(それを見て、豊八と文助は出る。)

豊八。 あゝ、利兵衛さん、又来たのか。

文助。 どうもいけねえな。旦那はお留守だよ。

豊八。 さあ、さあ、歸んねえ。

利兵衛。 旦那様がお留守ならば、若太夫さまに逢はせて下さい。

豊八。 若太夫さんもお留守だよ。(お竹に) さうでなくつてもごたくしてゐる最中へ、こんな

半氣ちけえを毎日出して遣しちやあ困るぢやあねえか。

文助。 早く連れて歸つてくれ。

お竹。 お父さん、みんなが困るから歸つて下さいよ。

利兵衛。 いやだ、いやだ。けふはどうしても大旦那様か若太夫さまのお目にかゝつて、云ふだけの

ことを云はなければならぬのだ。

豊八。 それがいけねえと云ふのに……。

(利兵衛は無理に内へ遣入らうとするを、豊八、文助、お竹も止める。)

二三次。 なんだか表がさうくしいやうだな。

鴻藏。 むゝ。何か始まつたのか。

(鴻藏と驚助、鶴五郎は入口へ出る。)

鴻藏。 あゝ、利兵衛か。旦那はお留守だよ。

利兵衛。 まあ、なんでも好いから通して下さい。

驚助。 いけねえ、いけねえ。

(驚助と鶴五郎も手傳ひて、利兵衛を突き出さうとする。萬吉も爲助も出て見る。みすじも辰丸も窓

から覗く。このとき奥より十二代目中村勘三郎、三十七八歳、出て來りて表を見る。)

勘三郎。 誰だな。門口で喧嘩をしてゐるのは……。

萬吉。 (ふり向いて。)へえ、樂屋番の利兵衛でございませう。

(このうちに利兵衛は表へ一旦突き出され、更に四つ目垣を破りて庭さきへ轉げ込む。豊八、文助、

お竹もつゞいて庭へ追つて入る。)

お竹。 (泣聲になつて。)お父さん、どうするんですよ。

文助。 半氣ちけえだから仕様がねえ。

(豊八と文助は無理に利兵衛をひき摺り出さうとする。)

勘三郎。 まあ、手暴いことをするな。樂屋番の利兵衛が何しに來たのだ。

萬吉

(萬吉と鴻藏等はみな引返して来る。)
實はこの利兵衛が旦那さまにお目にかゝりたいと云つて、毎日のやうに押掛けて來まして、みんなを困らせるのでございます。

勸三郎

それは些つとも知らなかつた。毎日わたしに來るのか。(長火鉢の前に坐る。)

利兵衛

(土に手をつく。)旦那様。申譯がございません、申譯がございません。

勸三郎

申譯がないと云ふのは……。今度の火事のことか。

利兵衛

(泣く。)申譯のないことを致しました。樂屋番は火の元の用心が大切といふことはかねて

承知して居りながら、わたくしの不用心から飛んでも無いことになりました、堺町葺屋町をみんな灰にして仕舞ひまして……。

勸三郎

なるほど先月七日の火事は、樂屋の三階から出たには相違ないが、火元は多見藏さんの部屋で、附いてゐる男が火の用心を怠つたからのことだ。樂屋番のおまへが悪いといふわけでも無い。

利兵衛

たとひ誰の粗相でも、それを見まはるのが樂屋番の役目でございます。あの晩わたくしは泊り番をいたして居りましたが、夜が長いのでツイとろくろと眠つてしまひまして、七つ

半頃にふと眼をさましますと、三階の方で何かぱちぱちいふ音がきこえますので、どうしたのかと思つて上つてみますと、三階は一面の黒煙で……。これは大變だと驚いて騒ぎましたが、火の手がすつかり廻つて仕舞つたので、今更どうすることも出来ません。町内の人達も駆け付けて唯あれくと云つてゐるうちに、それからそれへと燃え擴がつて、あの大きい小屋が忽ちに焼け落ちる……。 (狂ふやうに泣く。) 申譯がございません、申譯がございません。

勸三郎

(なだめるやうに。) もう云ふな、云ふな。自分の小屋を焼いたばかりでなく、隣町の市村座を焼く。あやつり芝居の結城座を焼く、薩摩座を焼く。堺町葺屋町ばかりでなく、元大坂町、新和泉町、そのほかの四ヶ町までを焼いたのは、火元の私等としては世間へ對して何とも申譯のないことだが、その不取締も所詮はわたしの罪で、誰を恨むこともないのだ。いゝえ、旦那様はなんにも御存じないことで、そんな大事を仕出來したのは、みんな樂屋番の罪でございます、この利兵衛の落度でございます。まだ其上に、今度にかぎつて再築のお許しの出ないのは、もうこれぎりです。芝居をお取潰しに相成るのだと、世間では専ら噂をいたして居ります。(また亢奮して。) 旦那様。萬一さう云ふことになりましたと、わたくし

利兵衛

は中村座といふ芝居小屋を焼いたばかりでなく、お江戸の芝居といふものをみんな滅亡させて仕舞つて、何千人に難儀をかける大罪人でございます。まつたく怖ろしい大悪人でございます。火あぶりにされても未だく足りなほどの大罪人の大悪人でございます。

お前はひどく取逆上せてるやうだな。おまへばかりでなく、誰でも斯ういふ時には取逆上せるものだが、まあ、まあ落付いてくれないでは困る。(豊八等に) さあ、なんとか宥めて連れて行つてくれ。

豊八。

はい、はい。

(豊八と文助は利兵衛を引立てようとするれば、利兵衛は振拂つて又叫ぶ。)

利兵衛。

まあ、待つて下さい。待つて下さい。もし、旦那様。その申譯にわたくしはお芝居の焼跡で首でも縊らうかと思ひましたが……。

勘三郎。

(おどろいて。) 飛んでもないことを云ふな。

利兵衛。

そんな事ではなかくわたくしの罪は消えさうもございません。いつそ旦那さまのお手にかつて、この利兵衛めをすたくくに斬るとも突くとも御存分に遊ばして頂きたいと存じまして、かうしてお願いに出たのでございます。もし、旦那様。お願いでございます。ど

うぞわたくしを御勝手に御成敗なすつて下さいまし。

(利兵衛は縁先へ近寄らうとするを、豊八等は又支へる。)

(見かれて。) どうも困るな。ふだんから正直な男だけに、一圖に思ひ詰めてしまつたと見える。だしぬけの事で書き抜きの用意もないが、なんとか一と臺詞云はなければならまい。

(立ちかゝる。)

勘三郎。

いや、わたしが云つて聞かせます。(立つて庭に降りる。) これ、利兵衛。

利兵衛。

はい、はい。

勘三郎。

おまへの心持はわたしにもよく判つてゐるが、こゝでお前を成敗したところで、焼けた芝居が本に返るわけでも無し、たとひ主人と奉公人であらうとも、わたし達の身分でむやみに人間の成敗などの出来る筈もない。そんなことを私にせがむのはお前が無理だ。かうなつたのは皆んなの不運で、お前ひとりの罪ではない。おまへは焼跡で首をくゝると云つたが、首を縊つて済むことなら、わたしもいつか然うしたいが……。

利兵衛。

旦那様、途方もない……。

勘三郎。

それ、おまへも途方もないと云ふではないか。その途方もないことをお前はなぜ爲ようと

いふのだ。お前もわたしも同じ人間ではないか。わたしに悪いことならば、おまへにも悪い筈だ。その道理がわからないか。

利兵衛。

(すこし詰まつて。) はい。

勘三郎。

わたしばかりでは無い、堺町葺屋町の人間はこゝで芝居が潰れるか潰れないか、一生に一度の大事と夜の目も寝ずに苦勞してゐる最中だ。わたしが頼むから、おとなしくしてゐてくれ。こゝで何事か起されると、それから枝に枝がさいて、又どんな面倒なことにならうも知れない。今はみんなが謹慎を專一にしてゐる時節だ。

利兵衛。

(涙を拭いて。) はい。

お竹。

もし、お父さん。旦那様があゝして事をわけて仰しやつて下さるのが、お前には判らないのかえ。御苦勞の多い最中、皆さんもお取込みの最中に、いつまでもお邪魔をしてゐては濟みますまい。さあ、早く素直に歸つて下さい。

(萬吉も庭に降りる。)

萬吉。

さあ、判つたら早く歸るが好い。旦那もおつしやる通り、おまへの心持は皆んなにもよく判つてゐるのだ。誰もおまへを恨んでゐる者はないから、安心して落付いてゐてくれ。

(豊八等に眼で知らせる。) いつまでも旦那に御迷惑をかけてはいけないぜ。

(豊八と文助はこゝろ得て、お竹にも眼で知らせる。)

豊八。

(利兵衛に。) さあ、おれ達も送つてやるから一緒に行きねえ。

文助。

決して人騒がせの無分別をしちやあいけねえぜ。

お竹。

さあ、行きませう。

二人。

さあ、さあ、行きねえ、行きねえ。

お竹。

(勘三郎に。) 色々御心配をかけまして、まことに相濟みません。

勘三郎。

お父さんによく氣を注げて遣りなさいよ。

お竹。

はい、はい。皆さん、御免下さいまし。

(利兵衛は無言にて立ちあがるを、豊八等は捨臺詞にて押しながら、早々に下のかたへ連れて去る。)

お竹も去る。勘三郎は縁に腰をかける。)

萬吉。

やれ、やれ、垣根をこんなに壊されてしまつた。此頃は物騒だから、早く繕はして置かなければならない。

勘三郎。

(さびしく笑ふ。) なに、取られる物もないから案じることもあるまいよ。

天保演劇史

一三次。 それでも體裁が好くない。(鶴五郎に)鶴さん。おまへは器用だ。職人の來るまでにちよいと繕つて置いて貰ひたいな。

鶴五郎。 はい、はい。

鶯助。 わたしも手傳はう。

(鶯助と鶴五郎は表から庭口へまはりて、四つ日垣の竹を繕ふ)

爲助。 あの利兵衛ばかりでなく、今度の一件を苦に病んで、首をくゝるの、川へ飛び込むのと、氣ちがひのやうに騒いでゐる者が幾人もあるさうです。

一三次。 あんまり苦勞しないが好いと、わたしは皆んなに云ひ聞かせてゐるのだが、なにしろ斯うなると、誰でも一圖に思ひ詰めて、血迷つてしまふからな。

みすじ。 それでもお師匠さん。今までとは違つて、今度の御趣意は大變に嚴しいんですよ。江戸中の寄席も唯つた十五軒を残したぎり、あとは皆んな御取潰しになつて仕舞つたちやあり

ませんか。

辰丸。 娘淨瑠璃も御禁制になつて、その三味線までも取上げて、焼いて仕舞はれたといふことで

すよ。

鴻藏。

切見世や隠し賣女が御差止めになつたのは仕方が無いとしても、女髪結まで御法度はあんまり酷いね。

萬吉。

役者の似顔繪は勿論、藝者や花魁をかけた錦繪までがいけないと云ふことになつては、繪草紙屋は商賣にならないわけだ。

爲助。

まだそればかりぢやありませんぜ。

一三次。

いや、いや、それもこれも私は皆んな知つてゐるが、歌舞伎芝居はまた格別で、こればかりは滅多に潰すことは出来ない。芝居町と吉原とを潰してしまつたら、花のお江戸も闇になるではないか。(勘三郎に)ねえ、旦那。おたがひに江戸つ子だ、氣を大きく持つて納まり返つてゐようぢやありませんか。詰まらない苦勞をすると、あの利兵衛の二代目になります。まあ、まあ、落付いてゐることですよ。

勘三郎。

(無理に笑ひながら。)師匠に云はれるまでもなく、私もせいぐ氣を大きく持つてゐる積りだが、今度ばかりは胸に餘つた。たとひ十萬兩廿萬兩の借金でも、金ならば返す時節もあるが、一旦取潰された芝居は容易に再興の時節はあるまい。先祖の勘三郎から十二代つゝいた猿若の家も、わたしの代でほろびるかと思ふと、いくら江戸つ子でも愚痴が出る。(嘆

息して。今朝も神棚を拜んでゐるうちに、思はず涙かほろりと出ました。

(人々も黙つて聽いてゐる。このあひだに驚助と鶴五郎は垣を繕ひ終りて、元の坐に戻る。風の音。)

神棚の灯消える。)

萬吉。あ、神棚のおあかりが消えました。

爲助。お、神棚の灯が消えた。

二三次。(紛らすやうに。)けふは北風が強いからな。おまけに建付けが悪いのだから、どこからでも

遠慮なしに吹き込んで来るよ。

(人々は又もや不安らしく顔を見あはせる。勘三郎は無言にて内に入り、燈を持つて来いと願で知ら

ずれば、萬吉は奥に入る。半鐘の音きこゆ。)

鴻藏。おや。火事だぞ。

鶴五郎。火事だ、火事だ。

驚助。この風にまた始められちやあ大變だ。

辰丸。(泣き聲になつて。)どうしたら好いだらうねえ。

鶴五郎。何しろ行つてみて来ようか。

爲助。む、どうも不安心だ。わたしも行かう。

驚助。行かう、行かう。

(爲助と驚助、鶴五郎の三人はあわて、下のかたへ駆けてゆく。奥より萬吉は燈の道具を持ち出て出づ

れば、勘三郎は手づから火を打ちて、神棚に灯をあげる。半鐘の音。)

(表をみる。)どこだか知らないが、何だつて此の風に火事なんぞ出すのだな。火事にはもう

懲りくんだ。

ぢやんくといふ音を聞くと、まつたくぞつとするね。

鴻藏。わたしも泣きたくなりますよ。

(勘三郎は神棚を拜んでゐる。向うより尾上榮三郎(後の梅幸)三十二三の女形。弟子の梅千代に

編笠を持たせて出づ。)

梅千代。御めん下さい。

萬吉。(出る。)お、音羽屋の太夫さん。さあ、どうぞ。

榮三郎。(内に入る。)みなさん。今日は……。

(勘三郎は拜み終りて、長火鉢のまへに来る。)

天保演劇史

榮三郎

お寒うございます。

勘三郎

毎日お寒いことです。

榮三郎

半鐘の音がきこえて、なんだか又さうくしいやうですね。

鴻藏

火事はどつちの方角ですね。

梅千代

なんでも藏前の方だといふことです。

二三次

なに、藏前だ……。それは少し方角がよくないな。

萬吉

お前さんはあつちの方角には、親類や知り人が澤山あるでせう。

勘三郎

なるほど師匠は藏前の土地つ子だ。早く行つて來なさるが好い。萬吉。おまへも一緒に
つてあけなよ。

萬吉

はい、はい。さあ、師匠、行きませう。

二三次

まあ、さう騒いでも仕方がない。野次馬と一緒になつて、尻ッぱしよりで駈け出すなどは、

榮三郎

あまり好い圖ではないからな。

萬吉

相變らず師匠は落付いてゐますね。
さう落付いてゐちやあいけない。さあ行きませう、行きませう。(二三次の手を取る。)韋駄天

だ。韋駄天だ。

二三次

では、バタ／＼で駈付けけるかな。

(二三次は煙草入れをしまひ、萬吉に急ぎ立てられて下のかたへ立去る。)

勘三郎

まつたく火事には懲り／＼だ。どうか大事になつて呉れなければ好いが……。

榮三郎

そこで、旦那。こつちの火事の成行はまだ確には判りませんかえ。

勘三郎

色々手をまはして探つてゐるが、どうも確なことはまだ判らない。毎日毎日おなじ愚痴

話をしてゐるやうだが、焼跡へは直ぐに板圍ひをして、座元と芝居茶屋一統から再築の願
書を差出すと、すこしく詮議の筋があるに因つて當分は普請差止めといふ御沙汰。それか
らもう二月にもなるが、いまだにお許しが出ないので、たゞ心配してゐるばかりです。

榮三郎

實はそのことで出たのですが……。 (云ひながら鴻藏等に。) おまへさん達、お氣の毒だが些

つとのあひだ遠慮してくれないかね。

鴻藏

ぢやあ、他聞を憚る一大事といふわけですかえ。隠されるほど聞きたくもなるが……。

榮三郎

まあ好いから、野暮を云はないで早くあつちへ行つてお呉んなさいよ。

鴻藏

はい、はい。

榮三郎。

(鴻藏はみすじ、辰丸、梅千代等を眼で招きて、四人はみた奥に入る。)
(進み出る。わたし)が不斷から懇意にしてゐる柳橋の船宿へ、奥御祐筆の成瀬様といふ方が
ちよい／＼遊びにお出でになるのですが、その成瀬様がおかみさんにお話しなすつたとこ
ろでは、今度の御老中様は歌舞伎が大層お嫌ひで、あんなものは風俗を紊すとか、奢りの
沙汰だとか云ふことで、今度この堺町と葺屋町の焼けたのを幸ひに、そのまゝ再築をお
許しなく、永代お取潰しになる思召しなさうです。

勘三郎。

御祐筆がそんな話をなすつたのですか。

榮三郎。

その成瀬様は御役人衆のおそばに勤めてゐるので、大抵の機密は自然に早く判るのださう
で、これまでその方の云はれたことは十が十まで中つてゐたから、今度のことも多分本當
だらうと云ふことです。

勘三郎。

むゝ。(腕を組む。)さうすると、藏前の師匠のいふやうに、遠山様ばかりを杖柱と頼んでも
ゐられないかな。

榮三郎。

もう斯うなつたら遠山様でも誰でも頼みにはなりません。お緋り申すのは神様か佛様ばか
りですから、日ごろ信心してゐる湯島の天神様と淺草の観音様へ日参して、一生懸命にお

勘三郎。

ねがひ申してゐるのですが、それでもいよ／＼いけないとなれば、わたしは生きてゐる甲
斐がありませんから、もう覺悟をきめてゐるのです。

榮三郎。

覺悟をきめてゐる……。

勘三郎。

團之助さんの二代目で……。 (腹を切る真似をする。)これですよ。

榮三郎。

(小聲で。)腹を切るかえ。

わたしは生まれ落ちるからの役者です。その役者に芝居を差止められるのは、命を取られ
るのも同じことぢやありませんか。どうで無い命なら、思ひ切つて自滅した方が優し
と思つてゐます。

勘三郎。

さう云はれると、わたしも何とも云ひやうがない。どういふ因果か、江戸の芝居といふも
のは代々のお役人に睨まれて、何かにつけて窘められながら、かうしてだん／＼に伸びて
來たのだが、いよ／＼今度といふ今度は、最後の十々滅を刺されるのか。

榮三郎。

(勘三郎はため息をつきながら、やがてふら／＼と立つて縁さきに出る。)
(不安らしく。)もし、旦那……。

勘三郎。

音羽屋さん、これを見て下さい。(庭の梅を指さす。)知つての通り、わたしもお前さんと同

天保演劇史

じやうに、天神さまが信仰だ。今度の火事には柱一本残さず焼けてしまつて、庭の植木もみんな枯らされたが、そのなかで此の梅の木だけが不思議に残つた。ほんたうに不思議でしたねえ。おまけに蕾を澤山持つて、早い花は暮のうちに咲くかも知れませんが。

勘三郎。この梅の木一本が焼け残つたのは、天神さまの有難いお告げで、わたしの家もまだ亡びないしるしだと、實は内心よろこんでゐたのだが……。それも今は空頼めで、この木も根から枯らされては、再び花の咲く時節はあるまい。

榮三郎。どう考へても、口惜いほどに情ないことですねえ。

(榮三郎は涙をふく。勘三郎は力なげに縁に腰をおろす。下のかたよりお竹は息を切つて走り出で、玄關より呼ぶ。)

お竹。御めんなさい、御免ください。

勘三郎。(氣がついて表をみる。) お、お竹……。お父さんが又どうかしたか。

お竹。(垣の外から。) あい、お父さんはこちらへ参りませんでしたらうか。

勘三郎。さつき歸つたぎり、もう來ないが……。では、又どつかへ飛び出したのか。

お竹。歸る途中も何かしきりに考へてゐるやうでしたが、家へ歸ると又すぐに断け出してしまひました。

勘三郎。豊八や文吉はどうした。

お竹。みんな火事を見に行きました。

勘三郎。仕様のない奴等だな。

榮三郎。利兵衛がどうかしたのですか。

勘三郎。さつきこゝへ來たのだが、又どこへか飛び出したさうだ。少し取逆上せてゐるやうだから心配でならない。

榮三郎。自分の油断から芝居を焼いて、濟まない濟まないと云ひ暮らしてゐたさうですから、若しや思ひつめて大川へでも飛び込みはしまいか。

(お竹はわつと泣き出す。下のかたより道具方伊之助、廿二三歳、走り出づ。)

伊之助。(お竹に。) おい、お父さんはこゝへも來てゐねえのか。

勘三郎。おまへは大道具の伊之助ではないか。

伊之助。はい。

勘三郎

利兵衛のゆく先はわからないのか。

伊之助

わたしも心配して探してゐるのですが、どこにも姿がみえないのです。

勘三郎

困つたものだな。(奥にむかつて呼ぶ。)おい、おい、誰かゐるのか。

榮三郎

鴻さん。鴻さん。早く来ておくれよ。

鴻藏

はい、はい。(奥より出づ。)

勘三郎

あひにくに皆んな出拂つてゐるから、おまへも伊之助と一緒に、そこらの河岸をさがしてくれ。利兵衛が又飛び出したさうだ。

鴻藏

やれ、やれ。(舌打ちして。)どうも人騒がせをする男だな。好うございます。すぐに参ります。

伊之助

(玄關口より表へ出る。) さあ、伊之公。早く出かけようぜ。お竹坊も泣いちやあいけねえ。

伊之助

さあ、行かう、行かう。

榮三郎

(鴻藏と伊之助はお竹をなだめながら、下のかたへ急ぎゆく。)

勘三郎

利兵衛も正直者ですから、飛んだ無分別をして呉れなければ好うござんすがねえ。さつきの様子ぢやあ何をするか判らない。(嘆息して。) 弱り目に祟り目で、なぜ斯う忌なとばかり續くかなあ。

榮三郎

(奥より女中が行燈をとぼして出で、無言にて置いてゆく。)

爲助

いつの間にか薄暗くなつた。此頃は日がめつきりと詰まりましたねえ。

(勘三郎は無言。風の音。下のかたより爲助出づ。)

二

芝、日蔭町。北の町奉行、遠山左衛門尉の屋敷の門前。すこしく上のかたへ寄せて、旗本屋敷の門

あり。左右は長屋窓にて、下には小さき溝、駒よせの石などあり。風の音。暮六つの鐘きこゆ。

(上のかたより豆腐屋が荷をかついで出で、呼びながら下のかたへ去る。門のくゞり戸をあけて、門番八介出づ。)

八介

おい、豆腐屋さん。豆腐屋さん。あゝもう行つてしまつたか。けふは皆んな意地悪く素通

天保演劇史

りをして行くな。又この風も意地悪く吹くことだ。寒い、寒い。

(八介は肩をすくめて門内に入る。下のかたより樂屋番利兵衛は手拭にて頬かむりをして出て、上のかたへ行き過ぎようとして立ちどまり、門前へ引返して来る。)

利兵衛。

あの豆腐屋の教へてくれたのはこゝだ、こゝだ。確にこゝだ。

(利兵衛はどうして這入らうかと躊躇してゐるうちに、門の貫の木をあける音がするので、利兵衛はおどろいて飛び退き、下のかたの窓の下に忍んでゐる。やがて八介が正面の門を左右に開き、遠山左衛門尉、三十七八歳、羽織着流しの忍び姿にて頭巾をかぶり、中間ひとりに無紋の提灯を持たせて出づ。)

八介。

行つていらつしやいませ。

遠山。

今夜はべらぼうに寒いな。空つ風が斯う吹いちやあ遣切れねえ。こんな晩にやあ火の用心が大切だ。寝ほけて安火なんぞを引つくり返すな。

八介。

はい、はい。

(遠山は出る。八介はあとから門をしめる。風の音。)

中間。

今晚はどちらの方角へお忍びでございます。

遠山。

ゆうべは下町の方を見廻つたから、今夜は山の手だ。赤坂の方へ行け。

中間。

はい、はい。

遠山。

(遠山は上のかたへ行きかゝりしが、不圖みかへる。)

遠山。

誰だ、そこにあるのは……。可怪な奴だな。面をみせろ。

(遠山は中間に指圖すれば、中間は立ちかゝつて利兵衛の襟髪をつかんで引き出し、その手拭を取つて提灯をさし付ける。)

遠山。

む、見たやうな面だな。何でこんなところに小さくなつてゐるのだ。

利兵衛。

(遠山は利兵衛の顔を透し視れば、利兵衛も相手の顔をちつと見あげる。)

利兵衛。

(叫ぶ。)お、さうだ。お前さんだ。あなただ。

遠山。

あなたとは誰のことだ。

利兵衛。

あなただ、貴方だ、遠山の金さんだ。

中間。

え、失禮なことをいふな。

遠山。

まあ、待て、待て。成程おれは金さんだが、今頃そんなところで俺を金さんと呼ぶ奴は……。(透し視る。)む、判つた、判つた。おまへは中村座の樂屋番だな。

利兵衛。はい。御存じの利兵衛でございます。

遠山。(笑ふ。) さうか、さうか。道理で見たやうな面だと思つた。おれが遠山の金さんで木挽町の芝居のお囃子部屋に轉がつてゐる時分に、堺町の樂屋へもたび／＼遊びに行つて、おまへの厄介になつたこともあつたな。

利兵衛。はい。一文無しで湯銭と髮結銭に困るから、四十八文貸せと仰しやつたこともございまして。

遠山。そんなこともあつたかな。湯銭と髮結銭を樂屋番に借りるやうぢやあ、おれもあんまり幅が利かねえな。さうして、その銭にやあ利足でも附けて返したらうな。

利兵衛。どうして、どうして、利足どころか、元金の四十八文もお流れでございませう。

遠山。元金もそのまゝか。そりやあ金さんもひどく義理が悪いな。まあ、堪忍してくれ。今すぐに拂ふよ。(紙入れより銀を出す。) さあ、二分が二つある。利息ぐるめに納めてくれ。

利兵衛。四十八文に利息が附いても、一兩ではあんまり多過ぎます。

遠山。まあ、好いから取つて置いてくれ。そこで、お前は今頃その借金を催促に來たわけでもあるめえが、一體こゝらへ何しに來たのだ。やつぱり金さんの屋敷をたづねて來たのか。

利兵衛。はい。

遠山。して、それはどんな用だ。

利兵衛。御承知の通り、十月の七日に堺町の芝居の樂屋から火事が出まして、葺屋町の芝居までも焼けてしまひました。それから再築のお許しの出ませんのは、このまゝ芝居をお取潰しになるのだと、世間では専ら噂をいたして居りますが、それは本當のことでございませうか。嘘か本當か、お上のことが往來のまん中でべら／＼饒舌られるものか。そんな野暮なことを云ふな。

利兵衛。(思ひ切つて進みよる。) でも、殿様。あなたも唯のお役人様ではなく、以前は芝居のお囃子

部屋にもおいでなされて、樂屋の内外のこともよく御存じの筈でございませう。(だん／＼に充奮して來る。) いかにお上のお威光でも、今こゝでお江戸の三芝居をお取潰しになりましたら、どれほどの人間が路頭に迷ふか、又その妻子眷族までがどれほどに難澁するか、大抵はお察しであらうと存じますが……。

遠山。(少しく言葉をあらためる。) これ、利兵衛。お前はそんなことを自分の一料簡で云ひに來たのか。それとも誰かの指尺か。

利兵衛。

誰の指圖でもございませぬ。わたくしの一料簡でございます。

遠山。

飛んだ佐倉宗吾だな。今夜のおれはこの通りの忍びだから好いが、肩衣をつけて乗物に乗つてゐるところへ来て、途中でそんなことを無暗に云ひ出すと、駕訴の罪に問はれるぞ。

利兵衛。

それはよく存じて居ります。(はいよく亢奮して。) 駕訴はおろか、たとひどんな重い罪に問はれまして、どんな重いお仕置を受けましても、わたくしはもう覺悟して居ります。はい、決して恐れは致しません。

遠山。

なに、お仕置を恐れねえ。不届きなことを云ふな。(吐り付けて、又聲を和らげる。) 併し考へてみれば、可哀さうなところもある。おまへは些つと取逆上せてゐるやうだが、よく考へてみる。今度の御改革は世間一統のことで、芝居ばかりを眼のかたきにするといふわけぢやあねえ。たとひどんなに理窟を列べたところで、お上で斯うしろと云はれれば、鶴のひと聲でどうにもならねえ世の中だ。無暗にじたばたして、餘計な罪を作るなど、芝居の者にもよく云つて聞かせろ。

利兵衛。

それでもあなたは御奉行様ではございせんか。何とかあなたの思召しで、お慈悲の御取計らひが叶ひさうに存じますが……。

遠山。

なにが御奉行様だ。おまへ達の眼には町奉行がどれほど偉い者のやうに見えるか知らねえが、上には上が段々あつて、右の物を左へ遣るのさへも自分ひとりの自由によあ行かねえ。今度のこと老中の御指圖次第で、おれたちは唯だまつて其の通りに働くより外はねえ。早く云へば、大小をさした木偶の坊も同然だから、決しておれを當てにしてくれるな。おれは世の中のことが自由になるやうな、そんな偉い人間ぢやあねえから、買ひ被つちやあいけねえぞ。勘三郎も内々おれを當にしてゐるかも知れねえが、當てにもならねえものを當てにされちやあ俺が迷惑だ。それも次手によく云つてくれ。どうだ、判つたか。

利兵衛。

(思案して) はい、判りましてございます。

遠山。

それぢやあ夜の更けねえうちに早く歸つて、今の一兩で寢酒を飲んで、好い夢でもみる。

利兵衛。

では、御免下さいまし。

遠山。

(利兵衛は挨拶して下のかたへ行きかゝる。遠山も中間をみかへりて行きかけしが、又立停まる。)

利兵衛。

はい、はい。(戻つて来る。)

遠山。

この上に心得違ひをしちやあならねえぞ。

利兵衛。(きくりとして) はい。

遠山。町奉行の手に負へねえと思つて、今度は老中へ駕訴なぞをすると、飛んでもねえ目に逢ふぞ。誰に煽てられても、決してそんな無鐵砲なことをするなよ。

利兵衛。はい。

遠山。(中間に)遅くなつた。さあ、行け。

(遠山は東の花道をゆく。利兵衛は思案しながら下のかたへゆく。火の廻りの柵の音。犬の聲。)

幕

第二幕

一

芝、三田。水野越前守の屋敷。書院のこゝろにて、正面に床の間、ちがひ柵などあり。左右は永樂通寶の紋を附けたる出入りの襖。

(第一幕より五六日の後、十二月初旬の午後。下のかたの襖をあけて、侍一人は社衾姿の遠山左衛門尉を案内して出づ。)

侍。しばらくこれにお控へください。

遠山。はあ。

(侍は引返して去る。入れちがひに、茶坊主は茶を持って出て遠山のまへに置き、一禮して去る。やがて上のかたの襖をあけて水野越前守、四十七八歳、羽織、袴にて小姓に刀を持たせ、若侍に御用箱を持たせて出づ。)

水野。よほど待たせたらうな。けふは逢ひの日で、朝から入れ代り立ち代りに逢ひに来るので、息をつく暇もない。察してくれ。

遠山。とりわけて此頃は御用御繁多のこと、お察し申して居ります。

(水野は小姓等をみかへれば、小姓は刀掛けに刀をかけ、若侍と共に立去る。)

水野。おたがひに忙がしい身の上だ。すぐに用談に取りかゝらう。近く進め。

遠山。はあ。

水野。どうだ、市中の様子は……。改革の御趣意がよく行き渡つてゐるかな。

遠山。

改革の御趣意よく行きとゞいて居るやうに見受けられます。この分なれば遠からずして、世は寛政のむかしに立復ることゝ存じて居ります。

水野。

武家は兎もあれ、町人共のあひだには、此度の御趣意をよくも辨へず、彼れ是れと恨みがましく申立てゝゐる者はないか。

遠山。

左様な心得ちがひの者のないやうに、手前共もせいゝく理解を加へて居りまするが……。

水野。

このたびの改革について、多くの者のうちには土地の繁昌を奪はれ、あるひは傳來の職業をうしなつて、難澁する者もあらう、迷惑する者もあらう。それを不憫と思はぬでもないが、そんなことに一々囚はれてゐては、所詮思ひ切つた改革は出来まい。改革の事業に涙は禁物だ。悪いと思ふことは容赦無しに差止めてしまはねばならぬ。それについて恨まば恨め、水野忠邦は天下のために、甘じて萬人の恨みの的に立つ覺悟だ。お手前たちもその覺悟を察して、このたびの御趣意の隅々までよく行き渡るやうに心掛けてくれねばならぬぞ。

遠山。

委細かしくまりました。南の鳥居もなか／＼よく働いてくれるので、わしも満足に思つてゐる。しかし鳥居は儒者の家の出であるから、學問はあるが、世情に疎い傾きがある。お手前は若いときから相當

水野。

の苦勞もして、下々のことも詳しく心得てゐるといふ噂であれば、この際猶さら氣をつけて、力かぎりの御奉公を勵んで貰ひたいな。仰せまでもござりませぬ。不束ながら三奉行の一人として、お江戸町々の取締り役を相勤めて居ります以上、取りわけて唯今の御時節には、せいゝくの御奉公を仕つる覺悟でござります。

遠山。

そこで、今日呼び出したのは外でもない。(御用箱より書類をとり出す)彼の歌舞伎芝居三座の一件であるが……。三座とも皆それ／＼に由緒書を詳しく認めて差出してゐるが、お手

水野。

その儀に就きましたは、町奉行所の記録等をこと／＼取調べましたが、右由緒書に毛頭の相違も無之、堺町の中村勘三郎芝居即ち中村座は創立以來二百十八年、葺屋町の市村

遠山。

羽左衛門芝居すなはち市村座は百七十八年、木挽町の權之助芝居すなはち河原崎座は百八十二年、いづれも上のお許しを受けて、今日まで代々相續いたして居ります。

水野。

その昔の執政の人々が何故に歌舞伎狂言座の創立を許されたかは好くも判らぬが、おそらく江戸御開府の初めにあたつて、諸國の者の寄りあつまる時代であれば、御府内繁昌のた



遠山。

めに差許されたものであらうと察せらるゝが、どうだな。
いかにも仰せの通りかと存じられます。

しかし昔と今は時世が違ふことを考へなければならぬ。昔は好いとされたものでも、今の世に害あるものならば廢さねばなるまい。くどくも云ふ通り、それが即ち改革である。就いては彼の三座は、いかに由緒あるものとは申しながら、今の世には有つて益なきものである。いや益の無いばかりでなく、一方には風俗を紊し、また一方には奢侈を教ゆる媒介ともなるので、このたびの御趣意より見るときは、當然差止めねばならぬものだ。この十月に中村座市村座の焼亡したを幸ひに、永代取潰しの評議中であるが、お手前の意見はどうであるな。

遠山。

(考へて。) 手前の存じ寄りを申上げます前に、先づ御評議の模様を洩れ承まはりたいと存じまするが……。

水野。

諸役人のうちには取潰し同意の向きもあり、又は彼等を江戸のまん中に差置けばこそ、兎かくに風俗をみだす根源とも相成り、且は度々の出火に人家焼亡の憂ひもあれば、一先づ場所換へといふことにして、場末の邊鄙の地へ立退かせてはどうだと云ふ意見もある。し

遠山。

かし大體の議論は取潰しといふことに傾いてゐる。
して、閣老の思召しは……。

水野。

わしは勿論取潰しの意見だ。そこでけふは町奉行のお手前の意見を聴いて、いよく最後の決定をする積りであるから、好いか悪いか腹藏のない意見を申立て、くれ。

遠山。

好いにも悪いにも、手前にはなんの存じ寄りもござりませぬ。

水野。

(やゝ意外らしく。) なに、お手前になんの意見もないと……。

遠山。

芝居町は繁昌の場所でございますれば、これまでも度々の出火、それがために場所換へといふ御評議のござりましたる事は、手前も先役共より承知いたして居りますが、永代お取潰しといふやうな御評議は曾て聞き及んだことがござりませぬ。寛政度の白河侯御改革の砌りにも、芝居町御取潰しなどの御評議は一度もなかつたやうに心得て居ります。近くは文化三年の河原崎座焼失、ついで文化六年の中村座市村座焼失の節にも、本所深川邊へ場所換へといふ御評議はござりましたが、それも御沙汰止みに相成りましたやうな次第でございます。したがつて芝居町の場所換へは格別、お取潰しの儀につきましては、手前唯今までなんにも考へたことがござりませぬ。甚だ恐れ入つたる儀ではござりまする

水野。遠山。

が、この御返事を即座に申上げますことは御免を蒙りたく存じます。芝居町取潰しに就いて、今までなんにも考へたことは無いといふのか。

水野。遠山。

はあ。お江戸は末代、芝居町も末代まで續くものとのみ心得て居りまして、お取潰しの御評議などが起らうとは、今の今まで夢にも存じませぬので……。

水野。遠山。

むむ。(考へてゐる。)但し近年は歌舞伎狂言の取仕組み方よろしからず。自然風俗にもかゝりはりまするやうなことは、手前も承知いたして居ります。又、棧敷代料理代等も次第に高値に相成りまして、

惹いては諸人の奢りを増長するやうな傾きあることも、取調べに因つてよく承知して居ります。就いてはそれらの事は先頃より嚴重に申渡しまして、屹と取締るやうに致して居ります。その取締りが行き届くかな。

水野。遠山。

それが行き届きませぬやうでは、手前も町奉行のお役を勤めては居られませぬ。憚りながら御安心をねがひます。このたび芝居町お取潰しの御評議が起りましたも、所詮は歌舞伎芝居が悪いのではなく、その狂言の取仕組み方の宜しからぬことや、衣裳道具の贅澤に流

るゝことや、見物料の高値なることや、それらの事が御趣意に背くものと認められました次第で、それさへ屹と取締りますれば、有つて益なきものとは存じられませぬが……。いや、これはたゞ當坐の存じ寄りを申上げたるまでのことで、手前も篤と勘考の上、委細はあらためて書面を以て御覽に入ることゝ致しますれば、なにとぞ暫らく御猶豫をねがひます。

水野。

猶豫と申しても長いことはならぬ。一三日中に詳しく認めて差出してくれ。

遠山。

はあ。では、年内に御決着でござりますか。

水野。

むむ。片端からばたくと片附けてしまはねばならぬ。ほかにも大事の御用が澤山に疊まつてゐるのだ。よいか、早く致せ。

遠山。

かしこまりました。では、これで御免を……。

水野。

市中の取締りは一層嚴重に頼むぞ。

遠山。

はあ。

水野。

きのふの駕訴は何者だな。

遠山。

あれは……。亂心者でござります。

水野。わしが登城の途中を待ち受けて、何か訴へ出た者がある。別に願書のやうなものも携へず、唯お願ひお願ひと叫んでゐるが、見るところ四十前後の町人體の者であつた。

遠山。御家來衆が取押へて、奉行所へ御引渡しに相成りましたので、早速嚴重に吟味いたしましたる處、堺町邊に住む利兵衛と申す町人で、近ごろ亂心して居る者とわかりましたので、町役人家主どもを呼び出しまして、厳しく以後を戒めて預け遣はしました。何分にも亂心者のことをござりますれば、格別の御沙汰を以てお仕置御免のほどを偏に願ひあけます。

水野。亂心者とあれば是非もないが、この時節であれば何かにつけて駕訴など企つる者がないとも限らぬ。それらもよく取締つてくれ。

遠山。はあ。

(遠山は會釋して去る。水野は書類を御用箱に收める。下のかたより若侍出づ。)

侍。鳥居甲斐守殿、お目通りを願ひたいと申します。

水野。鳥居が来たか。(少し考へて)まだ調べかけてゐる書類がある。その濟むまでは暫時控へさせて置け。

侍。はあ。

水野。澁川はまだ参らぬか。

侍。まだでござります。

(侍は引返して去る。)

水野。(上のかたに向つて呼ぶ。)誰か居らぬか。

(上のかたの襖より若侍と小姓出づ。水野は立つて上のかたへゆく。若侍は御用箱を持ち、小姓は刀を持ちて附添ひゆく。)

二

おなじく水野の屋敷、表書院。

正面は壁にて、その前に屏風を立てまはし、好きところに書院火鉢あり。刀掛けあり。左右は襖。(南の町奉行、鳥居甲斐守、三十七八歳。社村にて火鉢の前に控へてゐる。上のかたの襖をあけて、遠山左衛門尉出づ。)

遠山。

お、貴公も御用かな。

鳥居。

拙者は殆ど毎日お呼び出した。

鳥居。

(二人は會釋して、遠山も火鉢の前に坐る。)
貴公の御用はなんであつた。

鳥居。

(遠山は黙つてゐる。)

芝居町。

一件ではないかな。

遠山。

む。

鳥居。

いよくお取潰しと決着したか。

遠山。

いや、まだそこまでは行かぬ。閣老からも色々のお話があつたが、篤と勤考の上で御返事をすることにして退出して来た。

鳥居。

(笑ふ。) 今さら勤考するまでもあるまいではないか。芝居町などはこの際思ひ切つて取潰すに限る。拙者も内々でさう申上げて置いたが……。

遠山。

(や、驚いたやうに。) 貴公からも内々でそんなことを申上げたか。

鳥居。

この一件は北の奉行所の係りで、南の拙者には係り合ひのないことではあるが、同じく町

奉行職を勤めてゐる以上は、自分の存じ寄りだけは申立て、置かねばならぬ。そこで一應は閣老のお耳に入れて置いたのだが、まったく歌舞伎などは有つて益なきもので、宥赦なく叩き潰して仕舞ふのが世の爲だぞ。

(遠山はだまつてゐる。下のかたの襖をあげて澁川六藏、三十餘歳、蘭學者にて御書物奉行、頗る才氣ある人物。若侍に案内されて出づ。)

澁川。

お、兩奉行もおいでであつたか。

澁川。

(澁川は二人に會釋して坐る。若侍は引返して去る。)

鳥居。

どなたも最早御用済みでござるかな。

澁川。

遠山は已に御用済みであるが、拙者はこれからでござる。

鳥居。

では、なか／＼暇取れますな。

澁川。

今も云つてゐるところであるが、今度の改革の御趣意から見れば、芝居町などは先づ第一にお取潰しに相成つて然るべきものだと思はれるが、お手前の意見はどうでござるな。

澁川。

それは勿論のこととござらう。拙者の係りでないのでよくは存ぜぬが……。 (遠山をみかへる。彼の一件はまだ落着に相成りませぬか。)

遠山。
澁川。

けふも其事で召されましたが、まだ落着には相成りませぬ。

(笑ひながら) お手前はお若いときに屋敷を出て、芝居町に遊んでられたこともあるとか云へば、自然彼等にあはれみを加へ、彼等もまたお手前に取縋つて、何かと愁訴嘆願など致すことであらうが、天下の御政道に私情を挟むことは禁物でござる。まして今度のやうな大改革の場合には、大義親をほろほすほどの覺悟がなくてはなりませんまいぞ。

遠山。
鳥居。

(しづかに) 併し今度の御改革にも吉原を取潰すといふ御評議はないやうでござるな。

遠山。

いや、吉原は格別だ。勿論取潰すに越したことはないが、それが御政道のむづかしい所で、江戸ほどの大都會には又相當の遊山場が無くてはなるまい。

(笑ふ) 吉原は差支へないが、芝居町は破却する。その理窟がどうであらうかな。今も貴公のいふ通り、江戸ほどの大都會には相當の遊山場がなくてはならぬ。いかに御儉約の世の中でも、人間は牛馬のやうに働いてばかりはゐられまい。それ相當の休息もせねばならぬ、それ相當の物見遊山もせねばならぬ。吉原通ひをするよりは、まだしも芝居見物の方が優してはあるまいかな。いかなる御政道も所詮は人間を相手のことだ。人間が楽しく働いて、楽しく暮らされるやうでなければ、まことの御政道とは申されまい。芝居町を取潰

鳥居。

されて、芝居者が難儀すると云ふことを考へるよりも、自分達の手から芝居といふものを奪ひ取られる江戸の人間の便利と不便利とを先づ考へなければなるまいと思はれるが…。

遠山。

物見遊山は芝居見物に限ることではあるまい。手づくりの辨當持參で、上野向島へ花見に行つても済むことではないか。

澁川。
鳥居。

花見もよい。月見もよい。又そのほかに芝居も寄席もあつても好いではないか。あまり物事を窮屈にかんがへてはならぬ。大體に於いて儉約の御趣意が下々へまで行き渡ればそれで好し、その上の無理を強いぬのが御政道の極意ではあるまいかな。

遠山。

御政道の極意…。(嘲るやうに) 大分むづかしい議論になりましたな。

貴公は兎角にさやうな生鈍いことを云はれるが、諸事嚴重を旨として、一寸の隙間もない

ほどに致さねば、上の御趣意がなかく、隅々まで行き渡るものでない。拙者などは支配下の

の輿力同心小者にまで屹と申渡して、今度の御趣意にそむく者は片端から容赦なしに仕置

を加へてゐる。先刻も輿力共の話によると、奉行所に備へ付けの手錠はみな出拂つて仕舞

つたと云ふことだ。

(顔をしかめる) 手錠がみな出拂ふやうでは、おびたしい科人とみえるな。

天保演劇史

澁川。

下々には無智の徒が多い。そのくらゐに嚴重に取締らねば、まづたく御趣意が行き渡りま
すまい。

侍。

(上のかたより若侍出づ。)

鳥居。

鳥居どの、澁川どの、お逢ひでござります。

澁川。

ほう、一緒か。(澁川に)では……。

はあ。

(鳥居につゞいて澁川も立上り、若侍に案内されて上のかたへ去る。遠山もしづかに立上らうとす
る時、下のかたより茶坊主二人出づ。)

坊主一。

(小聲で)遠山様。芝居町はいよ〜お取潰しでござりますか。

遠山。

それはまだ判らぬ。

坊主二。

では、まだお取潰しと決つたわけでは無いのでござりますか。

遠山。

(笑ひながら)さう決つたら、先づ第一におまへ達が困るだらうな。

(遠山は刀掛けの刀を取りて下のかたへ行く。坊主は附いてゆく。)

幕

第三幕

十二月十八日のゆふ暮。

堺町、中村座の焼跡。すべて板圍ひをしてある心にて、正面の下のかたに出入りの木戸口あり。上
のかたに稍や大きな番小屋ありて、内には疊をしき、疎末なる臺所もあり。こゝに樂屋番の利兵
衛親子が住んでゐると知るべく、内よりは薄暗い行燈の灯が洩れてゐる。ゆうべより降り出したる
雪は已に止みたれど、あたりは一面に白し。その雪のなかに大なる焼木杭や新しき材木なども横
へてあり。

(出方の豊八と文助は酒に酔ひたる體、古い長床几二脚を持ち出して向ひ合ひに腰をかけ、焚火を
してゐる。その傍には中村座の紋を附けたる長提灯が置いてある。道具方伊之助は高箒で出入口の
雪をばいてゐる。時の鐘きこゆ。)

豊八。

どうも寒いな。悪いときに降りやあがるぜ。

文助。

ことしは何といふ冬だらう。毎日空つ風が吹き通した擧句がこの雪だ。まづたく遣瀬が

豊八。

(伊之助に。)おい、おい、伊之公。雪なんぞ掃くにやあ及ばねえ。まあ、こつちへ来て火にあたれよ。

伊之助。

それでも止んでゐるうちに、出這入りの口だけは掃いて置かなけりやあならねえ。誰が来るか判らねえからな。

文助。

誰が来たつて構ふものか。かうなりやあ自棄のやん八だ。どうで來年になりやあべんく草の生える土地ぢやあねえか。冷てえ思ひをして雪掻きなんぞをするのは無駄なことだ。それでも旦那がたが歸つて來るぢやあねえか。

豊八。

好いから打つちやつて置けといふことよ。相變らず馬鹿正直な男だ。(肩をすくめる。)ああ、寒い、寒い。こりやあ焚火ぐらゐるぢやあ凌げさうもねえ。

文助。

さつきの酒もすつかり醒めてしまつた。そこらへ行つて、もう一度飲み直して來ようぢやあねえか。

豊八。

さうだ、さうだ。(立上る。)また飲みに行くのかえ。

伊之助。

豊八。

あしたになりやあ首をくゝるか夜逃げをするか判らねえ體だ。二百や三百の錢を吝んだつて何うなるものか。もう自棄だといふのに……。

文助。

さあ、行かう、行かう。
(豊八と文助は提灯を持ちて、よろけながら木戸口より表へ出てゆく。伊之助は雪を掃いてゐる。番小屋のうちよりお竹は臺所働きをしてゐたる體にて、手拭をかぶり、紅い襷をかけ、襦袢から出て出づ。)

お竹。

伊之さん。みんなは何處へか行つてしまつたの。

伊之助。

随分酔つてゐるやうだが、まだ飲み足らないとみえて、又出て行つたよ。あの人たちは自棄だ自棄だと云つて、毎日お酒ばかり飲んでゐて、どうするんだらう。(進みよる。)

伊之助。

あたしも雪かきを手傳はうか。
なに、もうこのくらゐで好いだらう。(空をみる。)好い鹽梅にすつかり止んだやうだ。
(伊之助は箒を持ちながら焚火のそばへ來る。お竹も手拭を取りて床几に腰をかける。)

伊之助。

お父さんはどうしてゐる。
すこし風を引いたと云つて、安火にあたつてゐるのよ。それでも今日のことを心配して、

お竹。

天保演劇史

伊之助。頻りに表へ出たがるのをあたしが無理に止めてゐるのさ。そりやあうつかり出さねえ方が好い。このあひだのやうな事を二度と遣られた日にやあ大變だ。

お竹。ほんたうにあの時にはあたしもびつくりしてしまつたの。何ほ何だつて、御老中さまへ駕訴をするとは……。

伊之助。まつたく思ひ切つたことをしたものだ。おまへのお父さんが駕訴をしたと聞いた時には、おれ達ばかりぢやあねえ、誰でもみんな驚いたよ。

お竹。初めは遠山さまへ願ひに出たが、それがいけないので今度は御老中様の御登城を待つてゐて、途中で願ひ申したのださうだが、別に願書を持つてゐるわけでもなく、たゞ口の先

で申立てたので、お取上げもなしに召捕られて、すぐに手錠をかけられて仕舞つたのよ。御老中さまへ駕訴なぞをすれば、牢へ入れられても仕方がねえのだが、手錠ばかりで町内

あづけになつたのは、まだしも運が好いといふものだ。それにしても、旦那がたはまだ歸らねえのかな。

伊之助。伊之助は表のかたを見かへる。お竹は焚火に焼木杭をくべる。このあひだに小屋の内より利兵衛、

お竹。手錠をかけられたる體にて出で、無言にて二人の姿をながめてゐる。

伊之助。焚物は雪で濕つてゐるので、よく燃え付くまい。おれが巧く積んで遣るよ。

お竹。あたしにだつて此のくらのことは出来ませよ。

伊之助。なに、出来るものか。それ、手拭をかぶりなよ。頭が灰だらけになるぢやあねえか。だらしがねえ。來年は幾つになるのだ。

お竹。(手拭ひをかぶりながら。) お前さんはあたしの年を知らないのかえ。

伊之助。知つてゐるから云ふのぢやあねえか。

お竹。(利兵衛はそれを聞き済まして、さびしく笑ひながら小屋の内に入る。それには氣もつかずに、伊之助とお竹は焚物をくべる。)

お竹。そんな冗談を云つてゐるけれども、お父さんがあんなことになつて、おまけに芝居が潰れるか、場所換へにでもなつたら、あたし達はどうなるんだらうねえ。

伊之助。潰れることは無さうだといふが、場所換へになつてもやつぱり困るな。旦那がたの歸るのを、今か今かと待つてゐるのだが、どうしてこんなに遅いのだらう。唯つた今、石町の暮れ六つが鳴つたぜ。

みすじ。

(木戸口より市川みすじ、岩井辰丸の二人は頭巾をかぶりて傘を持ち、酒に酔ひて入り来る。)
今晚は……。

伊之助。

お、みすじさんに辰丸さんか。まあ、こつちへ来ておあたりなせえ。

辰丸。

そこへ行つても好いんですか。

みすじ。

お邪魔になりやあしませんかえ。

お竹。

(顔を赤くして立上る。) あら、あんなことを……。

伊之助。

(これも極まり悪さうに。) ちつともお邪魔にやあなりませんよ。

伊之助。

(みすじと辰丸は笑ひながら頭巾を取りて、床几に腰をかける。)

伊之助。

おや、二人とも酔つてゐるんですね。

みすじ。

女形が酔つちやあ色消しだと、今もそこらで冷かされて来たんですけれど、かうなると色

辰丸。

氣のことなんぞ云つちやあゐられませんかよ。

辰丸。

ほんたうにこれから何うなるかと思ふと、七段目の平右衛門ぢやあないが、酒でも無理に

辰丸。

まゐらずば、とても命が續かないぢやあありませんか。少しは察して下さいな。

辰丸。

(女形二人はぐたくしてゐる。木戸口より中村鴻藏は下駄ばきにて尻を端折り、貧乏徳利をぶら

下げて、豊八、文助と話しながら入来る。)

鴻藏。

丁度好いところで逢つたね。(云ひながら女形をみて。) やあ、こゝにも中二階の姐さん達が

豊八。

お揃ひだ。お酌をたのむにはお誂へ向きだぞ。

伊之助。

かまはねえから火燭にしろ。(鴻藏の徳利を把つて焚火に入れる。)

鴻藏。

どの人も自棄酒だね。

伊之助。

む、自棄だ、自棄だ。城を枕に最期の酒宴を催さうといふのだから、みんなも附合つて

鴻藏。

くれ。(お竹に。) おい、お竹坊。唯見てゐることがあるものか。早く茶碗を三つ四つ持つて

お竹。

来てくれねえか。

伊之助。

はい、はい。(小屋に入る。)

鴻藏。

鴻さん。一體どうなるのでせうね。

鴻藏。

今も聞きに行つたのだが、旦那がたは晝間からお奉行所へお呼び出しになつて、いまだに

みすじ。

退つて来ねえのだから、どうで碌なことぢやああるめえ。みんなも心配して方々の茶屋に

みすじ。

あつまつて、色々の噂をしてゐるが、所詮は四段目と覺悟をしてゐれば好いのだ。

みすじ。

どうしても城渡しですかえ。

鴻藏。

む。取潰しだけは何うにか助かつて場所換へになるらしいといふことだが、それぢやあ何んにもならねえ。場所換へならば取潰しも同じことだ。御先祖も代々、われくも代々、晝夜住み馴れたお江戸のまん中から、狐や狸が巢をくつてゐるやうな場末の薄つ暗いところへ追ひ込まれちやあ、體の好い島流しだ。

文助。

場末の藪のやうな所ぢやあ江戸の見物は來やあしねえぜ。

鴻藏。

誰が來るものか。明けても暮れても狸ばやしの鳴物で芝居をしてゐる日にやあ、見物も役者も化かされてゐるやうなものだ。へん、ばかくしい。誰がそんな芝居を見に來るものか。江戸の芝居は江戸のまん中にするに決まつたものだ。

伊之助。

取潰されるよりは優しのやうだが、考へてみると、場所換へもまつたく難儀だな。

豊八。

難儀も難儀、大難儀だ。取潰しは助けるが場所換へをしろぢやあ、首を斬るのを助ける代りに喉を絞めるぞといふやうなものだ。

文助。

どう考へても、おれたちを助けて置かねえ積りとみえるな。え、もうどうとも勝手にしやあがれ。

豊八。

ちけえねえ、殺さば殺せと度胸を据ゑるのだ。

(木戸口より中村驚助、中村鶴五郎が入り來る。)

驚助。

旦那がたはまだ歸らねえさうだね。

鴻藏。

歸つたところで碌なことぢやああるめえ。おれたちはもう覺悟してゐるのだ。

鶴五郎。

その覺悟がなかく、むづかしい。本當にどうなるのかなあ。

鴻藏。

(徳利を指さす。)これから元氣を附けようといふところだ。度胸を据ゑて一杯遣りねえ。

驚助。

いや、流石のおれも今日ばかりは何だか胸が支へてゐて、酒も喉へは通りさうもねえ。

鴻藏。

意氣地がねえな。

鶴五郎。

いくぢがねえと云はれても仕方がねえ。おれのお袋は今日も雪のふるなかを觀音様へ跣足參りをして來たのだ。

驚助。

鶴公のおふくろばかりぢやあねえ。跣足まゐりする者もある。水垢離を取るものもある。それを思ふと、自棄酒を飲んでもゐられねえ。(鶴五郎に)兎もかくも葺屋町へも行つて、様子を聞いて來ようぢやあねえか。

鶴五郎。

まあ、念のために行つてみよう。あつちで聞いたならば、何か様子が判るかも知れねえ。

(驚助と鶴五郎は表へ出てゆく。)

天保演劇史

天保演劇史

豊八。いつもと違つて、二人ともひどく弱つてゐるね。そりやあ弱る方が本當ですよ。

鴻藏。おまへ達は弱ることはねえ。さあとなりやあ引取つてくれるお寺さまは澤山あるだらう。そんな冗談どころぢやありませんよ。

辰丸。お竹よりお竹は盆の上に茶碗四つをのせて出づ。
お茶碗を綺麗に洗つてゐたので遅くなりました。

お竹。あたりめえよ。穢く洗ふ奴があるものか。
（茶碗を取る。）さあ、さあ、別れのさかづきだ。
（豊八と文助も茶碗を取る。）

鴻藏。まだ一つ残つてゐる。伊之公も飲みねえ。まあ、わたしは止さう。

伊之助。おまへも鷺や鶴の二代目か。まあ、一杯附合つても好いちやあねえか。

豊八。お竹は飲むなと眼で知らせる。伊之助はうなづく。
（お竹を見とがめる。）え、よせ、よせ。又始めやあがつた。この騒動の最中に、男に色目なんぞ使つてゐるやあがると、承知しねえぞ。

（お竹はあわて、小屋へ逃げ込む。）

文助。さあ、伊之公、飲めよ。飲まねえと喧嘩だぞ。

辰丸。わたしのお酌ちやあ氣に入るまいけれど……。ねえ、伊之さん、不肖してくださいよ。
（辰丸は手拭にて徳利を持ちて酌をするを、伊之助は斷る。）

伊之助。折角だが、どうも酒なんぞを飲む氣にやあなれねえ。まあ、御免だ。

豊八。え、いぢのねえ奴等には構ふな、構ふな。

鴻藏。無理に頼んで、飲んで貰ふこともねえ。さあ、討死と覺悟した連中だけで始めろ、始めろ。

（女形に酌をさせて、鴻藏等は自棄になつて飲む。伊之助はだまつて眺めてゐる。木戸口より三升屋二三次は襟巻、足駄ばきにて傘を持ち、龜山爲助は提灯を持ちて入り来る。）

二三次。あひにくの時に悪いものが降つたな。

豊八。悪い物をおれたちが降らしたわけぢやあねえ。

文助。冬になれば雪が降るぐらゐるのことは、子供でも知つてゐるぢやあねえか。

二三次。なんだかひどく暴つほいな。
（笑ふ。）は、あ、おまへ達は飲んでゐるのか。

鴻藏。立上る。おい、師匠。お前さんは此のあひだから口癖のやうに、大丈夫だ、大丈夫だ、安

心しろと、むやみに落付き拂つてゐるが、屹と大丈夫ですかえ。もし間違つたら、おまへさんの首を貰ふから覺悟しなせえ。

みすじ。 鴻さん。およしよ。

鴻藏。

え、よせるものか。安受合ひの氣休めばかり云つてゐるやあがつて、あんまり人を馬鹿にしてゐるやあがる。ざまあ見やがれ。

二三次。

爲助。

いや、どうも大變な權幕だ。そんなに私を敵役にすることもあるまいぢやあないか。酔つてゐるとは云ひながら、不斷から世話になつてゐる師匠に向つて、喧嘩を賣るとはおだやかで無いぜ。

豊八。

拍子木叩きなんぞが出る幕ぢやあねえ。もう芝居ぢやあ飯が喰へなくなつたから、手前たちは番太郎の手傳ひでもして、火の番の拍子木でもかちく叩いてゐる。

爲助。

(むつとして。)こいつ等、いよく徒黨して喧嘩を賣るのか。貴様こそかつばのくせに、岡へあがつて人間なみの口を利くな。寒中に大川へでも飛び込んで涼んでゐる。

文助。

この野郎。なにがかつばだ。なにが番太郎だ。師匠、これを持つてください。(二三次に提灯を渡す。)

爲助。

二三次。

鴻藏。

爲助。

まあ、まあ、よせよ。野暮なことをするな。さあ、喧嘩ならいつでも來い。師匠の身代りに、手前を袋叩きにしてやるぞ。なにを云やあがる。

二三次。

(爲助は素早くそこにある雪かきの高箒を把りて、鴻藏をなぐり付ける。鴻藏はその箒をつかまうとするを、爲助は又なぐる。豊八と文助も立ちかゝりて爲助をなぐらうとすれば、爲助は箒をふりまはして無暗に叩き立てる。こちらの三人は酔つてゐるので、よろけながら立廻る。)

たうとう大立廻りになつてしまつたか。おい、おい。みんなも留めてくれろよ。(二三次は提灯をかざして指圖すれば、伊之助、みすじ、辰丸は捨臺詞にて留めに這入り、女形はよろけながら入りみだれて立騒ぐ。小屋のうちより利兵衛とお竹がうかゞひ出で、利兵衛は手の利かぬ思入にて、お竹に留めると眼で知らすれば、お竹も駈け寄つて留めに這入る。この捫着のうち尾上榮三郎。弟子の梅千代と菊八に提灯を持たせて入り來る。)

梅千代。

菊八。

(提灯をかざして。)あら、どうしたの。太夫さんが見えたのだ。静にしないか。

(梅千代と菊八が制してゐるうちに、鴻藏は爲助の箒をうばひ取りて振りまはし、榮三郎の眼さき

榮三郎。

（突き出せば、榮三郎はその箒をおさへる。）
鴻さんちやあないか。當ても無しに立廻りの稽古をしてどうするの。春のお芝居はどこで始まることになつたのですえ。

鴻藏。

（氣がついて。）やあ、音羽屋さん……。こりやあ恐れ入りました。済みません、済みません。（無暗にあやまる。）どうも少し眼が眩んでるので、飛んだ失禮をいたしました。

菊八。

鴻藏。

こんな時にいぢめちやあいけねえ。

（一同は鎮まりて榮三郎に一禮し、豊八と文助は床几を直せば、榮三郎は床几にかける。二三回は提灯を爲助にわたして、これも床几にかける。）

榮三郎。

お、師匠も来ておいでなすつたのですか。わたしも眼が眩んでるとみえて、失禮をしました。

二三次。

いや、どの人も眼が眩んでるので、無我夢中で困りますよ。

榮三郎。

此頃は芝居の連中がみんな氣が昂つてるので、自棄酒を飲む、喧嘩をする。こゝばかりでなく、葺屋町の方でも毎日二組や三組の喧嘩が絶えないさうです。人間も捨鉢になると、

始末におへないものですな。

（お竹は引下りて、父と共に小屋の前に立つ。他の人々は思ひ／＼に或ひは立ち、あるひは材木などの雪を拂ひて腰をかける。）

二三次。

どうです。やつぱり場所換へですかえ。

榮三郎。

それがまだはつきりとは判らないのですが、お取潰しだけは先づ助かつて、場所換へになりさうだといふ噂ですよ。

利兵衛。

（進み出る。）もし、太夫さん。みんなは色々な噂をしてるますが、お取潰しだけは確に助かつたのでございますか。

榮三郎。

今もいふ通り、わたしにも確なことは判らないが、どうも場所換へになるだらうといふ噂だよ。

利兵衛。

（念を押すやうに。）噂だけでございますか。

榮三郎。

それだから、噂だと云つてゐるぢやあないか。さあがさあと云ふまでは、誰にも確かなことは判らう筈がない。又その引越し先にしても、本所だといふ者もあれば深川だといふ者もあり、龜戸の奥だといふ者もあれば青山の果だといふ者もあり、何から何までが噂ばかり

りで、些つとも取留めたことはないのだから、まだ本當のことは判らないのさ。
どつちにしても、お取潰しのない事だけは大丈夫なのでございますか。
くだい人だね。それが判らないと云ふのに……。 (鴻藏に) 鴻さん。お前たちは確に場所換へに決つたといふことを突きとめたのですかえ。

鴻藏。

なに、それもやつぱり噂ばかりさ。

利兵衛。

(失望して) なんだ。どの人の云ふことも皆んな噂か。

お竹。

お父さん。まあ、そんなに心配しない方が好うござんすよ。旦那がたがお歸りになれば、何も彼もみんな判るんですから。

利兵衛。

さあ、それがどう判るか。おれは心配でならない。いや、怖ろしくてならないのだ。取留めのない噂を當てにして、その日その日を送つてゐて、けふがいよいよ最後といふ日に、やつぱりお取潰しだなどと云ふことになつたら……。おれはどうする。あゝ、どうしたら好からう。(又もや亢奮して、身を藻掻く) おれには手錠がかゝつてゐるのだから、自分で自分を何うすることも出来ない。首をくゝることも出来ない、喉を突くことも出来ない。町内預けになつてゐては、外へ出ることも出来ない。あゝ、もう、いつそ舌でも咬み切つて死

ぬより外はないのだ。

お竹。

もうそんなことを云ふのは止してくださいよ。

伊之助。

(進みよる) お前は時々にはのほせ上つて、半氣ちがひになるので困る。旦那方ももう歸るだらうから、まあそれまでは内に引込んでゐなせえ。(利兵衛の袖をひく)

利兵衛。

(振拂ふ) えゝ、おまへ達にはおれの此の苦みが判らないのだ。毎日毎晩おれの眼のさきへ、青鬼や赤鬼が火の車をひいて来て、貴様が芝居を焼いたのだ。貴様が芝居を潰すのだと、怖ろしい顔をして責めるのだ。地獄の呵責とはこのことだ。おれのからだには火が附いてゐるのだ。

伊之助。

又そんなことを云ひ出すのか。仕様がねえな。

お竹。

(泣きながら縋る) お父さん、お父さん。落付いてくださいよ。

利兵衛。

(焚火に眼をつける) おい、おい。そんなところで火を焚いては不用心だ、不用心だ。又どんな火事が始まるかも知れない。早く消してくれ。消してしまへ。

伊之助。

消すよ、消すよ。消すから、お前はまあそつちへ行つてゐてくれ。

豊八。

相變らず世話を焼かせる奴だな。

天保演劇

(豊八と文助も立寄り、伊之助と三人がかりにて利兵衛を宙に引つかへ、お竹も附添ひて、無理無禮に小屋のうちに連れ込む。榮三郎は始終眼も放さずに、利兵衛の一舉一動をちつと眺めてゐたが、俄に立つて二三次の袖をとらへる。)

榮三郎。

師匠。あれを書いて下さいよ。

二三次。

え、なにを書くのです。

榮三郎。

あの利兵衛を女の役にして、なにか二番目物をかいて下さいよ。わたしは先刻からすつかり見て置きましたから、屹と巧く遣つてみせます。

二三次。

成程あれを女に書いたら、お前さんには好いかも知れない。(考へる。)あの親父と娘とをいれかへて、おまへさんが娘役であゝいふ段取りにするのだな。

榮三郎。

ねえ、是非書いてくださいよ。やつぱり舞臺は雪が好うござんすね。

二三次。

美しい娘が雪のなかで……。む、何か考へてみませう。

榮三郎。

(熱心に。)きつと約束しましたよ。

二三次。

受合ひました、受合ひました。

爲助。

(口を出す。)いくら音羽屋さんが約束して、師匠が受合つても、その芝居をする舞臺があり

ますかえ。

榮三郎。

さあ。

鴻藏。

肝腎の芝居がどうなるか判らねえといふ時節に、狂言の相談をしても始まりませんぜ。

榮三郎。

まあ、その時は其時の事として、師匠、考へるだけは考へて置いてくださいよ。

鴻藏。

音羽屋さんは藝好きだな。

榮三郎。

わたしは芝居をしなければ生きてゐられない人間なんですからね。(云ひかけて表を見かへる。)おや、表がさうくしいやうだ。旦那がたが歸つたのぢやあないか。(弟子達をみかへる。)早く見ておいでよ。

二三次。

(爲助に。)おまへも見て来い。

(梅千代、菊八、爲助は早々に表へ出てゆく。他の人々も顔を見あはせて立ちかゝる時、木戸口より驚助と鶴五郎が駆け込んで来る。)

驚助。

おい、おい。旦那が歸つた、歸つた。

鶴五郎。

みんなと一緒に今こゝへ來なさるのだ。

鴻藏。

さうか、さうか。

天保演劇史

(榮三郎と二三次を跡に残して、鴻藏、みすじ、辰丸は表へ出てゆく。小屋の内より利兵衛はお竹の留めるのを振切つて跳り出づ。)

利兵衛。

旦那が歸つたか。旦那様がお歸りになつたのか。さあ、早く逢はせてくれ。

(驚助と鶴五郎は支へる。)

驚助。

騒がねえでも、旦那はこゝへ来るよ、来るよ。

鶴五郎。

まあ、おとなしくしてゐろ。

(小屋より伊之助、豊八、文助も出づ。)

伊之助。

旦那はほんたうに歸つたのか。

豊八。

早くお迎ひに行かなけりやあならねえ。

文助。

氣ちげえに係り合つてゐて、ちつとも知らなかつた。

(伊之助、豊八、文助は表へかけ出してゆく。)

二三次。

なるほど表が賑かになつて来た。いよくお歸りになつたらしいぞ。

榮三郎。

ぢやあ、わたしもお迎ひに出ませう。

(榮三郎と二三次は身繕ひして出ようとする時、表にはわやくと人聲して、「お歸りだ、お歸りだ」)

と云ひ、木戸口より手代萬吉は中村座の紋をつけたる提灯を持ちて先に立ち、中村勘三郎を始めとして、堺町の地主總代治兵衛、芝居茶屋總代半助出づ。榮三郎と二三次は出迎へて一禮する。つづいてあとより立役、女形、子役の俳優大勢出で、そのなかには鴻藏、みすじ、辰丸、梅千代、菊八もまじつてゐる。次に狂言作者四五人、これに爲助もまじる。次に芝居茶屋の亭主と若い者大勢が、中村座の提灯を持ち、次に出方大勢、そのなかに豊八と文助もまじりて、手に手に提灯を振り照らし、舞臺一ばいに立ち列ぶ。ほかに伊之助等の道具方も出づ。提灯の火は雪に映じて晝のことし。)

一同。

(勘三郎に會釋する。) お歸りなさい。

勘三郎。

みなさんも定めて案じてゐたらうが、色々と事細かのお申渡しがあつたので、思ひのほかには暇取れて、葺屋町の座元と一緒に今やうく退つて來ました。(治兵衛と半助に。) 地主様もお茶屋さんも今日はお疲れでござりましたらう。まことに御苦勞様でござりました。

(町嚀に會釋する。)

治兵衛。

いや、わたし達はほんの附添ひ役のやうなものでしたが、お前さんは何かとお氣疲れの事であつたらうとお察し申しました。

天保演劇史

半助。

兎もかくも無事にお退りで結構でござりました。(人々をみまはして。)大抵はお揃ひのやうですな。

萬吉。

(おなじく見まはす。)座頭さんだけがまだ見えないやうです。

勘三郎。

彦三郎さんには途中で別れたが、一旦は家へ歸つて、又すぐに出直して來るといふことであつたから、やがて見えるに相違ない。そこで、皆さんもさぞお待ち兼ねであらうから、取りあへずこゝで今日のお申渡しを逐一お話し申すことにしませう。よく聽いてください。

(治兵衛、半助、萬吉は已に承知の上なれど、他はみな待ち兼ねたることゝて、俄に緊張の色をみせる。利兵衛とお竹も耳をすましてゐる。)

勘三郎。

けふはお午過ぎから北のお奉行所へお呼び出しになつて、こゝにゐる堺町地主總代の治兵衛さん、芝居茶屋總代の半助さん、芝居座頭の彦三郎さん、ほかに手代の萬吉、以上五人が出頭しました。葺屋町からも座元の羽左衛門さんを始めとして、係りの者一同が打揃つて出頭すると、年末は御用繁多と申すことで、暫く待たされた上でお白洲へ呼び出されまして、お係りのお奉行遠山左衛門尉さまからお申渡しがありました。(聲を一段張りあげて。)幸ひにお取潰しの御沙汰はありませんでしたが、元地に再築はお許しなく、堺町葺

勘三郎。

屋町の狂言座とあやつり座は、すべて當所を引拂へとの御指圖で、その替地としては淺草聖天町、小出信濃守様のお屋敷地一萬八千坪を下し置かれると申すことでした。

(人々は俄に動搖めきて、淺草だ淺草だと囁き合ふ。)
就いては今までの小出様は來年の一月中に本所へお引移りに相成つて、二月朔日より右替地をこちらへお引渡しになると申すことでありましたから、皆さんもさう思つてください。

一三次。

(云ひ終つて、勘三郎は一息つけば、人々もしばらく沈黙。)
(ひとり言のやうに。)やつぱり私の云つた通りだ。しかし淺草の替地も聖天町では少し困るな。

榮三郎。

(進み出づ。)旦那。お申渡しのこととはよく判りました。お取潰しの御沙汰がなかつたのは有難いことで、わたくし共も先づ安心しましたが、一つ逃れて又一つとは此のことで、江戸のまん中を追ひ拂はれて、遠い淺草の奥の方へ押籠められて、お芝居が立ち行く見込みがありませんか。

勘三郎。

さあ。(云つたばかりで、愁ふるごとくに無言。)

半助。

(嘆息する。)それは音羽屋さんの仰しやる通りで、その御沙汰を聞いたときに、私もはつと

胸に堪へました。潰されるよりは優しに相違ないが、あんな場末へ追ひ込まれてしまつては、山の手のお客には道が遠く、下町のお客とてもどうでせうか。まあ今までの半分も客は付かないものと覺悟しなければなりませんまい。

萬吉。

小出様のお屋敷といふのは、むかしの姥が池の一つ家があつた跡ださうで、今でも大きい池もあれば、竹藪もある、杉林もある。まるで化物屋敷のやうな所だと云ふことです。そこを切り拓いて芝居町にするといふのは、並大抵のことぢやありませんまい。

治兵衛。

大勢の力で、どうにか町をこしらへるにしても、半助さんのいふ通り、肝腎のお客が呼べるものか呼べないものか、それが第一の苦勞ですね。

勘三郎。

こゝへ歸つて来る途中も、わたしはそればかりを苦に病んでゐました。折角お取潰しを助かつて、あんな草深いところへ追ひ籠められては、芝居もこの末どう成行くことか。まつたく心細くなりました。

一三次。

遠山さまも随分骨を折つて下すつたらしいが、どうも思ふやうには行かなかつたと見える。おなじ浅草にしても、せめて雷門よりも手前にしてくれれば、よほど足場が好いのだが……。聖天町はあんまり奥深いな。

榮三郎。

かうなると、死ぬにも死なれず、生きるにも生きられず、どうして好いか途方に連れて仕舞ひますねえ。

(利兵衛進み出づ。)

利兵衛。

旦那様、御場所換へはそんなに御難儀なのでございますか。
(力なげに。)おまへにも大抵わかる筈だ。場所換へも土地によるが、浅草の聖天町では芝居も先づ半潰れだ。おまへも命懸けで駕訴までして呉れたが……。これも時の運で仕方がないのだらう。

(利兵衛は無言で泣く。人々もみな愁はしげに頭を垂れてゐる。木戸口より遠山左衛門尉は羽織、袴、雪駄にて、與力依田六太郎をしながら、中間ひとり提灯を持たせて入り来る。)

依田。

さあ、退け、退け。

萬吉。

(おどろく。)お、お奉行様……。

(人々も意外に驚きて、あわて、左右に開く。遠山はつか／＼とまん中に進み出づ。)

遠山。

(左右をみまはす。)燈火ばかりか／＼附いてゐながら、ひどく陰氣だな。今夜は誰かのお通夜か、それとも百物語でも始めようといふのか。

天保演劇史

勘三郎。

先刻は色々ありがたうございました。

遠山。

あんまり有難くもあるめえが、おれのやうなお奉行様にやあ此上のありがたいことは出来ねえ。お前達も、まあ悪い夢をみたと諦めるのだな。

(出方のある者が床几を持ち出して、遠山と依田にすゝむれば、遠山は腰をかけ、依田は立つてゐる。)

遠山。

(再び左右をみまはす。) どう見ても皆んな陰気な面をしてゐるな。大方そんなことだらうと思つたから、おれが親切にわざ／＼出て来て遣つたのだ。おい、勘三郎。

勘三郎。

はい。

遠山。

おれが先刻白洲で云ひ渡しをした時に、おまへ達は死罪でも申附けられたやうな顔をしたが、それがおれにやあ呑み込めねえ。たとへて見れば、取潰しは死罪で、場所換へは遠島だ。死罪が助かつて遠島になれば、命拾ひをしたやうなものぢやあねえか。おまへを始め、こゝにゐる者はなぜ皆んな愁嘆場のやうな泣つ面をしてゐるのだ。揃ひも揃つて意氣地がねえ。はゝ、江戸つ子の面汚しだ。

(他の俳優等の遮るを振切つて、鴻藏は進み出で、遠山のまへに坐る。)

鴻藏。

もう斯うなりやあ首が飛んでも構はねえ。もし、殿様。わつしはお馴染の鴻藏です。中村座の大部屋の頭をしてゐる中村鴻藏でございます。

遠山。

(笑ひながら。) むゝ、鴻藏か。相變らず酒の上の悪さうな面をしてゐるな。

鴻藏。

際どいところで、ひとの面の讒訴なんぞをしてゐちやあいけねえ。今聞いてゐりやあ、死罪だとか遠島だとか云ひなさるが、遠島になつたつて泣くのが人情だ。先祖代々住み馴れた土地を追つ拂はれて、遠い藪のなかへ島流しにされりやあ、泣つ面ぐるゐるのは當りめえぢやあありませんか。それが何で江戸つ子の面汚しですね。人をさん／＼窘めて置いて、わる口に事をかいて江戸つ子の面汚しとは何のこつた。そのわけを聞かしてお呉んなせえ。

勘三郎。

これ、これ、殿様に對して何をいふのだ。黙つてゐろ。引込んでゐろ。

遠山。

いや、何を云つても構はねえ。おい、鴻藏。お前はさすがに強いな。それほど強いお前達が陰気な面をならべてゐるから、それでおれに笑はれるのだ。それが口惜けりやあ泣つ面をするな。こりやあ皆んなに云つて聞かせることだが、今度の場所換へをなぜそんなに悔むのだ。勿論、元地に居据つてゐるに越したことはあるめえが、斯うなつたら斯うなつた

やうに料簡をきめて、新規に店開きをする工夫が肝腎ぢやあねえか。浅草が遠いと云つたところで、まさかに長崎や唐天竺の果ぢやああるめえ。

鴻藏。

そりやあ浅草だつて江戸の内さ。そのくらゐのことは知つてゐらあな。

遠山。

それ見ろ。江戸のうちで芝居をして、江戸の見物が来ねえといふ理窟はあるめえぢやあねえか。面白い芝居さへして見せれば、どんな遠いところでも見物は押掛けて来る筈だ。見物を呼ぶと呼ばねえとは、めい／＼の腕次第で、足場の遠い近いばかりぢやあねえ。どんな便利の好いところにも、詰まらねえ芝居ならば人は来ねえぞ。

鴻藏。

(少し詰まつて。) まあ、さう云へばそんなものだが……。世の中のことは理窟通りにやあ行かねえからね。

遠山。

まだそんなことを云つてゐるのか。わからねえ奴だな。

半助。

いえ、もう、よく判りましてございます。

半助。

(半助と萬吉は鴻藏のそばへ進み寄る。)

鴻藏。

さあ、殿様のおつしやることがお前にやあ判らないのか。むゝ。少しは判つて来たやうだが、これで済ましちやあ俺の引込みが付かねえ。

萬吉。

なにを云つてゐるのだ。さあ、さあ、お詫びをしてこつちへ引込みなさい。

依田。

(半助と萬吉は無理に鴻藏を引込ませる。遠山は笑つてゐる。)

遠山。

(利兵衛に眼をつける。) 利兵衛はこれに居りますが……。 (見かへる。) おゝ、利兵衛はそこにあるか。このあひだの晩、あれほど云つて聞かせて置いたのに、老中に駕訴をするなどは飛んでもねえ奴だ。おれの手に渡つたから好いが、南の奉行所へでも廻されてみる。今頃はどんな痛い目に逢つてゐるか知れねえぞ。(依田に) この一件も落着いたから、もう好からう。手がねを免してやれ。

依田。

はあ。(利兵衛に) これへ出る。

依田。

(利兵衛進み出づ。)

依田。

さあ、手がねを外してやるぞ。お禮を申せ。

利兵衛。

(依田は腰につけたる鍵を取り出して、利兵衛の手錠をばづして遣る。)

お竹。

有難うございます。

依田。

重ねて心得違ひをするなよ。

天保演劇史

七五

二人。

はあ。(親子は雪に手をつく。)

勘三郎。

お慈悲の御沙汰、わたくしからもお禮を申上げます。

半助。

(木戸口より中村座の座頭坂東彦三郎、四十歳前後。弟子の薪次、薪作に提灯を持たせて出づ。)

彦三郎。

お、音羽屋の親方……。どうぞこちらへ……。

勘三郎。

まことに遅くなりました。(勘三郎に。)旦那、先刻は失禮を……。

彦三郎。

いや、御苦勞でした。

勘三郎。

お話はもう済みましたか。

勘三郎。

一通りは済みました。お奉行様がそこに……。

彦三郎。

え。(遠山を見て。)お、これは……。 (叮嚀に會釋する。) 先刻は色々のお諭しにあ

づかりまして、重々有難うござります。

遠山。

そのお諭しがよく判らねえやうだから、わざとこゝまで出向いて来て、さつきから餘計

な憎まれ口をきいてゐる所だ。

彦三郎。

大勢のうちには何かの心得ちがひを致して居る者もござりますかも知れませぬが、それは

わたくしから篤と理解を加へますれば、憚りながら御安心をねがひます。このたびの一件

遠山。

に就きましては、一方ならざる御力添へにあづかりましたるやうに、蔭ながら承はつて居

ります。座中一統に代りまして、わたくしより改め、御禮申上げます。

別に恩に被せるといふわけでもねえが、まつたく今度の一件に就いては、おれも汗をかゝさ

れたぜ。なにしろ親玉の老中が取潰しと腹をきめてゐるのだから、敵は大勢味方はひとり、

どうにか斯うにか場所換へぐらゐるの所で扼ひ止めたのよ。

彦三郎。

まつたく有難いこととござります。(人々にむかひて。) 今も聞いてゐる通り、遠山様はわた

し達の爲にこれほど御苦勞なすつて下すつたのだ。仇やおろそかに思つては濟まないぞ。

その御恩返しには、これから皆んなが一致して、今までも芝居を繁昌させなければな

らない。(更に聲を勵まして。) 場所が悪くなつたから、芝居が廢れたと云はれては、御奉行

さまに濟まない、座元にも濟まない、先祖にも濟まない。第一に役者の恥だ。こゝで皆んな

が生まれ變つた氣になつて、江戸中の見物を新しい芝居町へ吸ひ寄せてみようではないか。

奥山のいか藏の芝居でも、兩國のおでいこ芝居でも、それ相當に見物のある世の中だ。根

生ひの歌舞伎役者が腕に撚りをかけて一生懸命に働けば、見物の來ないといふ筈はない。

芝居の盛るのも廢るのも、めいゝの料簡次第、腕次第だ。さう思つて、一と軍しようで

天保演劇史

はないか。

遠山。

さすがは坂東彦三郎だ。みんなも座頭を見習つて、威勢よく戦つてみる。さつきから云つてゐることだが、こんな時に泣つ面をするやうぢやあ江戸つ子の活券にかゝはるぞ。

勘三郎。

實はわたくしも今まで兎角に屈托してゐたのでございませうが、遠山様や彦三郎さんの御意見をうかゞひまして、眼のさきが急に明るくなつたやうでございませう。

榮三郎。

何の彼のと取越し苦勞ばかりしてゐたのは、全くわたくし共の氣が弱かつたのでございませう。今のお話で俄に晴れぐししたやうな心持になりました。

一三次。

わたしが無暗に落付いてゐると云つて、兎角みんなに憎まれてゐるが、かうなつて見るとやつぱり落付いてゐる者が勝であつたな。

遠山。

おゝ、藏前の師匠は思つたほどにも年を取らねえな。こゝらで一番腕を揮つて、いつかの『落人』のやうな新淨瑠璃をこしらへてくれ。あの清元は見物を唸らせたぜ。おかる勘平の道行はよかつたな。

（笑ふ。）あれはまぐれ中りでございます。

一三次。

そんなお話を聞くと、からだは何だかぞくぞくして、すぐにもお芝居がしたくなりました。

榮三郎。

（勘三郎に。）旦那、旦那。一日も早く御普請に取りかゝつて下さいよ。わたしも急に勇氣ができましたから、來年は二月早々から地行に取りかゝつて、遅くも十月頃までに舞臺開きをしたいと思ひます。

勘三郎。

（彦三郎のそばへ寄る。）さうなつたらおまへさんと氣をそろへて、新規に働くとしませうねえ。

榮三郎。

（彦三郎のそばへ寄る。）さうなつたらおまへさんと氣をそろへて、新規に働くとしませうねえ。

彦三郎。

お前とわたしとは夫婦役者だ。（榮三郎の手を取る。）夫婦共稼ぎで新店を繁昌させようよ。さうして呉れりやあ、おれも嬉しい。先づ世話甲斐のあつたと云ふものだ。はゝはゝ。

遠山。

（俄に笑ひ出す。）はゝゝゝゝゝゝ。

利兵衛。

（その笑ひ聲の異様なるに驚かされて、人々は利兵衛に眼をつける。）はゝゝゝゝゝ。

萬吉。

利兵衛はなんだか可怪いな。（不安らしく。）お父さん。お父さん。

お竹。

（人々はいよいよ利兵衛に眼をつける。伊之助もかけ寄る。）はゝゝゝゝゝ。

利兵衛。

（人々はいよいよ利兵衛に眼をつける。伊之助もかけ寄る。）はゝゝゝゝゝ。

伊之助。おい、おい。又どうかしたのぢやあねえか。

お竹。芝居が焼けてからといふものは、けふまで一度も笑つたことが無かつたのに、急に無暗に

笑ひ出して……。

伊之助。あんまり嬉しいので、また取逆上せたのかも知れねえ。

利兵衛。御奉行様……。旦那さま……。ははははは。

遠山。まあ、笑ふものには笑はして置け。泣くよりは優しだらう。(依田をみかへる。) さあ、夜の

更けねえうちに引揚げようか。

依田。はあ。

(遠山は床几を立ちかゝる。)

彦三郎。ちよつとお待ち下さいまし。御奉行さまの御覽になる前で、祝ひのしるしに一つめませ

う。

勘三郎。成程それが好うござります。

彦三郎。(一同をみかへる。) さあ、いゝか。みんなぬめるのだぞ。

(彦三郎、勘三郎を始めとして、一同は揃つて手を打つ。)

遠山。むむ、めでたい、目出たい。正月ももう眼の前だ。みんなも景氣をつけて、好い年を取れ。

ははははは。

利兵衛。ははははは。

(利兵衛は無暗に笑ひこけるを、お竹は介抱す。遠山は床几を立つ。人々は會釋する。)

幕

篠原合戦

昭和三年四月作。

昭和五年四月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——木曾義仲（澤村訥子） 今井四郎兼平（市川猿之助）
手塚太郎光盛（市川八百藏） 根井小彌太（市川小太夫） 鞆繪（坂東秀調）
山吹（中村芝鶴）など。

登場人物

木曾義仲。今井四郎兼平。手塚太郎光盛。大夫坊覺明。根井小彌太。諏訪八郎。高瀬次郎太夫。義仲の妾鞆繪。おなじく山吹。ほかに源氏の武者。平家の武者。小姓。小者。漁師。農夫など。

一

加賀國、篠原村。所々に磯馴松の大樹。その松のあひだより夜の海が暗くみゆ。こゝは木曾義仲の陣營にて、松の木に源氏の紋を染めたる陣幕を張りまはし、二ヶ所ばかりに篝火を焚く。
（壽永二年、五月なかげの夜。義仲の妾鞆繪、廿餘歳。帷子に大口袴をつけ、貫きを穿き、長巻を松の木に立てかけ、篝火の下にて千鳥模様の鎧直垂の綻びを縫つてゐる。根井小彌太、十八歳の若武者、武装して弓をたづさへ、下のかたの幕の外に立つてゐる。浪の音きこゆ。）

小彌太。

（ひとり言のやうに。）矢合せはまだ始まらぬかな。

篠原合戦

靱繪。

(みかへる。)相手は氣の長い京勢ぢや。容易にかゝつて來ることではあるまい。

小彌太。

優長な敵に釣られて、こつちもゆるくと構へてゐたら、短い夏の夜は明けてしまふであらう。敵は大軍、味方は小勢、夜いくさの方が利があるになあ。

靱繪。

(笑ふ。)おまへも軍の斷引を少しは知つてゐるな。

小彌太。

そのくらゐの事を知らいでか。(幕の内に入り來る。)和御前はいつまでも此の小彌太を子供と思ふか。おれはもう十八だぞ。

靱繪。

木曾谷の山椒の魚をみて、怖い怖いと泣いてゐたのは昨日けふのやうに思つてゐたが、お前ももう十八か。

小彌太。

えゝ、馬鹿なことを……。何でおれが山椒の魚などを見て泣くものか。

靱繪。

(やはり笑ひながら。)論より證據で、わたしは確におまへの泣いてゐるのを見たことがあるのぢや。

小彌太。

えゝ、嘘だ、嘘だ。

靱繪。

嘘と思ふならば姉さまに聴いてお見やれ。姉さまも屹と覺えてゐる筈ぢや。

小彌太。

誰に聴くまでもない。嘘だ、嘘だ。(少し焦れる。)若い者だと思つて嘲弄すると、殿の思ひ

者でも堪忍せぬぞ。

靱繪。

ほゝ、強い、強い。その強くなつたところを山椒の魚に見せて遣りたいものぢや。

小彌太。

なんとも勝手に云へ。和御前のやうな性の悪い女とは、もう口を利かぬぞ。

靱繪。

わたしもお前にからかつてゐるは、針の運びが捗どらぬ。喧嘩は軍が濟んでからの事にしようか。

ようか。

(靱繪は笑ひながら再び縫ひはじめ。小彌太は忌々しさうに眺めてゐる。上のかたの幕の内より

義仲の妾山吹、廿五歳。鎧をきて兜を呑負ひ、長巻を持ち出て出づ。)

山吹。

小彌太。先手からはなんの注進もないか。

小彌太。

なんの注進もないので、さつきから待侘びてゐるのでござる。

山吹。

敵が猶豫してゐるなら、こちらから早く打ちかゝつたら好からうに……。なにをしてゐるのかなう。

小彌太。

わたしも何だか苛々してならぬ。どんな様子か、行つて見て來ませうか。

山吹。

おゝ、見て來やれ。

(小彌太は向うへ立去る。山吹は靱繪のそばに寄る。)

山吹。

直垂の袖はよほど綻びましたか。

鞆繪。

(笑ふ。) 右の片袖を半分ほど引き裂かれてしまひました。

山吹。

きのふの合戦でか。その相手は……。

鞆繪。

相手は伊賀三郎とか名乗りました。女と侮つて生捕りにせうと思つてか、馬をならべて組んでかゝる。その内兜をすかして見れば、三十を三つ四つも越えたかと思はるゝ、屈竟の大男、黒糸おどしの鎧を着て、あら木作の仁王を見るやうな面構へ、こいつどれほどの力か、試してくれうと寄り合つて、鎧の袖を引きちがへ、馬上ながら引組んで、暫しがほどは揉み合ひました。

山吹。

(興に入つて。) して、その敵は剛の者でござりましたか。

鞆繪。

京侍としてはなかく、に手剛い奴、たがひに捻ぢ合ひ引き合ふはずみに、いつの間にやらわたしの袖を……。 (直垂をみせる。) それは勿論いくさの習で、別に不思議もござりませぬが、敵はそれほどの大力にも似合はず、思ひのほかに卑怯の奴で、やがてわたし髪の毛を片手からめ、かた手に腰刀をぬき出して、組んだるまゝに首を搔かうとするのでござります。

山吹。

(罵るやうに。) 男が女に組みながら、その勝負も付かぬうちに刀をぬくとは、軍の故實も作法も知らぬ奴でござりますな。

鞆繪。

まつたく此節の男には油断がならぬ。故實も作法もまんざら知らぬではあるまいが、時によつては其のやうな卑怯な真似もする。憎さも憎しと其の刀をもぎ取つて、逆捻ぢに相手の兜を鞍の前輪に押付け、水を搔くよりも安々と、その鬚首をかき落しました。

山吹。

(笑ふ。) ほゝ、それはよい氣味でござりました。その首は大將の實檢に供へられましたか。

鞆繪。

伊賀三郎などとは世間にも聞えぬ奴、そのやうな首を實檢に入れてあつばれの功名顔するものも、何とやら氣恥かしいと思ひましたので、そのまゝ路ばたに打捨て、戻りました。

山吹。

(疑ふやうに。) ほんたうに捨て、仕舞はれたか。それでも殿にはお話しなされたであらうな。

鞆繪。

今もいふ通り、話したとても手柄にもならぬこと。別にお話しも致しませなんだ。

山吹。

(やゝ安心したやうに。) さうでござりましたか。わたしは兎かくに運が悪くて、きのふの軍には葉武者の首一つも手に入らず。殿の手前、おまへの手前、なにやら肩身が狭いやうでなりません。今夜こそはと先刻から身拵へして待つてゐるのぢやが……。 (起つて下の方へ)

鞆繪

（ゆく。）敵も味方も氣の長い。いつまで睨み合つてゐるのであらうか。

山吹どの。

（山吹立ち戻る。）

鞆繪

殿は奥でなにをしてゐられます。

山吹

殿もおまへと同じやうに。帷子の袖を損じたので、わたしに繕つてくれと仰せられました。

鞆繪

殿がおまへに帷子の袖を縫つてくれと……。軽い嫉妬を感じて。それでは今まで殿のおそば

を離れずに……。

山吹

あい。

鞆繪

（やゝ皮肉らしく。）それならば急いで軍に出たがることもない。いつまでも殿のおそばに附いてゐたら好からうに……。笑ひながら直垂をかゝへて起つ。陣中で此のやうなしどけない姿をしてゐてはならぬ。殿に叱られ、おまへに笑はれぬうちに、わたしも早く仕度をしませう。

（鞆繪は長巻を持ちて、上のかたの幕の内に入る。山吹はぬき足して同じく上のかたへ行き、幕のあひだより内を窺つてゐると、向うより小彌太が引返して出づ。）

小彌太

姉上……。

山吹

（あわてゝ見かへる。）おゝ。敵の様子はどうぢやな。

小彌太

敵があまりに猶豫してゐるので、味方も最早堪へかねたと見えて、第一陣の樋口どの、第二陣の望月殿は濱邊つたひに押出しました。やがて貝鐘がきこえるでござらう。

山吹

では、わたしも行かう。（下のかたへ行きかゝる。）

小彌太

お前はすぐに打つて出るか。

山吹

きのふから一度も花々しい働きもせず、唯おめくくと引き下つてゐては、鞆繪殿に侮らるるも口惜しい。

小彌太

むゝ。あの鞆繪めを出し抜いて、一と働きて見せるも面白いかも知れぬ。

山吹

鞆繪殿ばかりでない、うかくしてゐたら山吹は寡い奴ぢや、腑甲斐ない奴ぢやと、殿にも愛想を踏かされうも知れぬ。どうでも今夜は眞先に進んで、名ある敵の首の一つ二つは引つさけて戻らねばなるまい。

小彌太

では、わたしも一緒に……。

山吹

いや、おまへはこゝに警固の役ぢや。氣をつけて張番しやれ。併しわたしが出て行つたこ

篠原合戦

とは、必ず誰にも沙汰無しぢやぞ。

(小彌太うなづく。)

山吹。

取分けて鞆繪どのに知らせてはならぬぞ。よいか。

小彌太。

勿論承知だ。あいつの鼻を明かすやうな、あつばれの功名手柄をしてお出でなされ。

(山吹は笑ひながら首肯して向うへ立去る。浪の音。小彌太はあとを見送る。)

小彌太。

(ひとり言。) まつたく今夜は姉さまに手柄をさせたいものだ。鞆繪め。出しぬかれて驚く

だらう。はムムムム。

(上のかたの幕の内より手塚太郎光盛、武装して出づ。)

光盛。

小彌太。なにが面白い。

小彌太。

おゝ、手塚どののか。

光盛。

しきりに獨りで笑つてゐるではないか。面白いことがあるなら話して聞かせろ。

小彌太。

いや、何……。別に面白いことがあると云ふわけでも無いが、今に軍がはじまると思ふと、

唯なんとなく嬉しいのだ。

光盛。

さう云へばおれも何だか嬉しいやうな氣がする。今夜は大きい獲物がありさうだぞ。

小彌太。

大きい獲物がある……。

光盛。

むゝ、いはゆる虫が知らせるとでも云ふのかも知れないが、大きい手柄をするときには、

戦はない前から自然に知れるな。今夜はいつもよりもおれの氣が勇んでゐる。この腕がむ

づくしてならない。おい、小彌太。おれが組討の仕方を教へて遣らうか。

小彌太。

教へて貰はずとも知つてゐるのだ。

光盛。

(笑ふ。) なに、本當に知るものか。さあ手塚太郎金刺光盛が手を取つて教へてやるのだ。

禮を云つて蒐つて來い。

(小彌太は不意に光盛に組み付く。)

光盛。

いや、こいつ不意撃を食はせるな。どうも狡い奴だ。

(光盛は笑ひながらあしらひて、遂に小彌太を組み伏せる。)

光盛。

さあ、どうだ。降参するか。

小彌太。

なに……。 (刎れかへさうと身を藻掻く。)

光盛。

はゝ、いくら藻掻いても無駄なことだ。降参しないと首を取るぞ。

小彌太。

えゝ、畜生……。

篠原合戦

(小彌太は一生懸命に藻掻くを、光盛は笑ひながら押へてゐる。幕の内より木曾義仲、直垂に腹巻をつけて出づ。小姓は陣床几を持ちて従ふ。)

義仲。

なんだ、何だ。おゝ、手塚と小彌太か。(笑ふ。)この組討はすこし段違ひだぞ。もう止せ、よせ。

光盛。

はゝゝゝゝゝ。

(光盛は手を放せば、小彌太は眼をこすりながら跣まつてゐる。)

義仲。

泣いてゐるのか。(又笑ふ。)おまへが手塚と引組んで、負けたと云つても恥ではない。泣くな、泣くな。十八にもなつた若い者が負腹を立てゝ泣く奴があるものか。幾つになつても子供のやうな奴だ。それほど口惜しければ、おれと組んでみる。はゝゝゝゝゝ。泣いてゐるひまに一走りして、先手の様子をみて来い。

小彌太。

見てまゐりました。第一陣も第二陣も押出しました。

義仲。

敵はどうした。

小彌太。

さあ。

義仲。

それ見ろ。味方のことばかり知つてゐても、敵の様子を見とゞけなければ何にもならぬで

はないか。味方よりも敵を知るのが軍の大事だ。

光盛。

おれには組み伏せられ、大將には叱られ、いや散々だぞ。その埋め合せに一働きして来い。

小彌太。

さうだ。御免。(起ちかゝる。)

義仲。

これ、姉はどうした。

小彌太。

姉は……。どうしたか知りませぬ。

(云ひすてゝ小彌太は一散に向うへ駈けてゆく。)

光盛。

喉けると直ぐに駈け出してゆく。はゝ、可愛い奴だ。

義仲。

世間ではおれ達のことを木曾の山猿といふさうだが、まったく彼奴は猿のやうな奴だ。

(義仲と光盛は笑つてゐる。貝の聲、陣鐘の音きこゆ。)

義仲。

味方はいよく蒐つたな。

光盛。

かうなつたら笑つてはゐられぬ。殿、行つてまゐります。

義仲。

好い首を取つて来て見せろ。

光盛。

今も小彌太に云つたことをごさるが、今夜は大きい獲物がありさうに思はれてなりませぬ。

義仲。

それを多みに待つてゐるぞ。

光盛。

はあ。

(光盛も勇んで駈けてゆく。奥より鞆繪は額に天冠をあて、彼の千鳥模様ちどりもやまの直垂ひたれを着て鎧よろひをつけ、片手に長巻ながまき、かた手に白打出しろうちでの笠かさを持ち出て出づ。)

鞆繪。

殿。いよく合戦かっせんが始まつたやうでござります。

義仲。

おれもさう思つて手塚てづかを出して遣つたが、貝鐘かひかねの音が又消えてしまつたやうだ。やつぱり手詰てづめの勝負しょうぶは夜が明けてからかも知れぬな。(庄凡しやうばんに腰こしをかける。)敵てきは十萬騎じゅうまんぎと觸ふれてゐるが、俱利伽羅くりから峠とうげ以來いらい度々たびたびの負け軍いけぐんに、あるひは討うたれ、或は逃にげ散ちつて、残のこつてゐるのは大かた四萬よんまんか五萬ごまん、それも浮足うきあしになつてゐるのだから、夜が明けてからでも遅おそくはない。あいつ等を蹴散けちらすのは朝飯前あさめしの仕事しごとだ。

鞆繪。

平家へいけは思おもひのほかほかに弱い敵よわいでござりましたな。

義仲。

もう少し手塚てづかへがあるかと思つたら、まつたく案外あんがいに弱よわかつた。この分ぶんで平押ひらおししに進すすんで行つたら、都みやこへ乗込のりこむのもう一月つきとはかゝるまい。はゝ、だんくんに面白おもしろくなつて來くるぞ。

鞆繪。

都みやこへ乗込のりこんでから、どうなされます。

義仲。

兎も角ともかくも平家へいけを追おひ落おして、おれが都みやこへ乗込のりこめば、先まづ第一だいいちの望のぞみは遂とげたとはいふものだ。それから先さきのことは其時次第そのときしだいで、どうなるか判わからぬ。今のところでは遮しや二無に二平家へいけの奴等やつらを追おひまくつて、直幕ちやく地に進すすんで行いけばいゝのだ。

鞆繪。

わたくしも殿とののお供ともをして、木曾きそを打うつて出でました時には、たゞ一圖いつづに都みやこへ都みやこへとあこがれて居ゐりましたが、此頃このころになつてだんく考かんがへますと、思おもひ通りに都みやこへ上のぼつて、扱さてそれからどうなる事ことか、自分じぶんにも判わからなくなりました。

義仲。

今いまもいふ通り、それはおれにも判わからぬのだ。いや、判わからなくても構かまはぬ。平家へいけはおれのかたきだから、片端かたじしから踏ふみにじつて、蹴散けちらして、あいつ等の本城ほんじやうを乗のつ取とつてしまへばいゝのだ。

鞆繪。

(ため息ためいきをつく。)殿とのにもわからず、わたくしにも判わからず、たゞ敵てきに勝かつのが面白おもしろさに、毎日まいにち戦たたかつて毎日まいにち進すすんでゆく。その行末ゆくすゑをかんがへますと、何なにやら頼たよりないやうに思おもはれてなりませぬ。

義仲。

今いまにも軍いくさが始はまるといふ矢先やさきに、溜息ためいきをついて何なにを屈托くつたしてゐる。はゝあ、扱さては兄あにの兼平かねひらに何かなに云いはれたな。

頼繪。

兄が申すのは今に始まつたことではござりませぬ。今度の合戦は殿と平家との對陣のほか

義仲。

に、鎌倉には頼朝といふお方がござります。その頼朝には人質までも遣はして、たがひに和睦したではないか。したがつて今度の戦は

頼繪。

源氏と平家の戦ひで、平家と頼朝と義仲と三方睨み合ひの戦ひではないのだ。それが何分にも心元ないと、兄は常々申して居ります。頼朝といふお方はなかく、油断の

義仲。

ならぬ人ぢや。世にすぐれた器量人ではあるが、妬み心の強い人ぢや。たとひ一旦は無事に和睦なされても、その和睦が所詮長くは續くまい。われ／＼が一生懸命に働いて、折角

義仲。

平家を追ひ落したところで、又その後ろから頼朝に附狙はれては、世のことわざに云ふ犬骨折つて鷹の餌食とやら……。

義仲。

は、いよく、兄きの口眞似をするな。それは兼平からも幾たびか聞かされてゐるのだ。兼平も自分ひとりの諫言では通らぬと見て、妹のお前をそゝのかして、女の口からおれを

義仲。

口説き落させようとするのか。(笑ふ)今井四郎兼平はあつぱれの軍師だな。いえ、兄に勧められたのもござりませぬ、兄から頼まれたのもござりませぬ。兄の入れ智慧にしても、お前ひとりの料簡でも、どつちでも構はぬ。今のおれは頼朝のこ

となどを考へてゐる暇はない。くどくも云ふ通り、平家の一門を都から追ひ拂つて、源氏が多年の鬱憤を晴らせばいゝのだ。おれの胸のうちには復讐の一念が火のやうに燃えてゐるのだ。

義仲。

(貝鐘の音きこゆ。) (愉快らしく起ちあがる。) それ、見ろ。軍が始まつたぞ。今夜も平家の奴ばらに一泡吹かせて遣るのだ。

義仲。

(義仲は貝鐘に耳をかたむけながら、下のかたへ行く。頼繪も附いてゆく。) 殿……もう少しわたくしの云ふことをお聴きくだりませ。

義仲。

(やゝ煩さうに。) お前もくだいな。それでおれに何うしろと云ふのだ。これまで度々の合戦に、いつも目ざましい御勝利で、木曾殿の武名は天下にひゞき渡りま

義仲。

した。今夜のいくさも屹と御勝利でござりませう。それを汐に手勢を引きあけて……。手勢をひきあけて……。

義仲。

故郷の木曾へお戻りくださりませ。木曾谷は日本に隠れもない要害でござりますれば、そこに楯籠つて嚴重に守つて居りましたら、平家が逆寄せに寄せて來ようとも、鎌倉から討

義仲。

手が下らうとも、三年や五年では容易に攻め落されますまい。

(舌打ちして。)お前もやつぱり女だな。今更そんな引込み思案をするほどなら、最初から旗揚げなどをしない方が優しいものだ。(屹となつて。)もう斯うなつたら、誰がなんと云つても、平家の奴ばらを追ひ巻り、追ひつめて、おれひとりでも都まで上つてゆくのだ。ほかに考へることがあるものか。軍の最中に餘計な口をきくな。(鞆繪を突き放す。)

(陣鐘の音はげしく聞ゆ。)

義仲。

(跳り上るやうに勇み立つ。)さあ、いよく手づめの勝負だ。おれも鎧を着なければならぬ。

(小姓に。)来い。

(義仲は急いで幕のうちに入る。小姓も附いて入る。)

鞆繪。

今の殿が口ぶりでは、たとひ何と御意見申上げてもお肯き入れはあるまい。何事も運次第とあきらめて、つまづくまでも、倒れるまでも、都までお供するの外はないのか。

(向うより諏訪八郎、武装して松明を持ちて走り出づ。)

八郎。

(幕の外にて。)御注進つかまつる。

鞆繪。

おゝ、八郎か。

八郎。

敵も今度は必死とみえまして、先を争つて討つて出で、灌邊より十町あまりのあひだを追ツつ返しつ、合戦最中にござります。

鞆繪。

敵もさすがに恥を知つて、今夜は必死に戦ふのか。さう聞いては油断がならぬ。わたしもすぐに討つて出ませうぞ。

八郎。

山吹どのは樋口殿の先手に附いて、先刻から働いて居られます。

鞆繪。

(おどろく。)え、山吹どのが……。いつの間にかわたしを出しぬいて、もう戦場で働いてるのか。さうと知つたらうか、と、こゝで諫言などを申上げてゐるのでは無かつたものを……。えゝ、残念な。おくれたか。(急いで。)八郎、わたしの馬を呼んでくりやれ。早く……早く……。

(八郎は下のかたに向つて呼ぶ。)

八郎。

鞆繪御前の馬ひけ。

(浪の音、陣鐘の音。下のかたより馬飼の小者が馬をひいて出づ。鞆繪は笠をかぶりて馬に乗る。)

鞆繪。

(八郎に。)おまへは奥へまるつて、殿に御注進申せ。

八郎。

はあ。

篠原合戦

鞆繪。鞆繪ももう討つて出ましたと申上げい。

八郎。はあ。

八郎。(鞆繪は馬を早めて向うへ走り去る。小者もつゞいて去る。)

(見送りにて笑ふ。)

又、功名争ひか。

(八郎は上のかたの幕のうちに入る。)

二

おなじく濱邊。上のかたに唯一本の松の大樹あるのみにて、その根もとに撫子などの花咲く。正面は海にて、うす月のひかりは砂地を照す。

(山吹は大童となり、長巻を揮つて平家の武者二三人と戦つてゐる。平家方はかなはずして下のかたへ逃げ去る。山吹は手負の體にて長巻を杖にして息をついてゐるところへ、下の方より高瀬次郎太夫は長巻を持ち出て出づ。)

次郎。(すかし見る。)そこにいるは敵か味方か。女か童か。

山吹。木曾殿の御内の山吹といふものぢや。

次郎。む。聞き及んだ鞆繪と山吹……。その一人とあるからは、女ながらも相手にして不足は

あるまい。一騎討の勝負するぞ。

山吹。女と侮つて油断するな。

(二人は長巻にて渡り合ひ、相撃ちになつて倒れる。下のかたより根井小彌太、弓を持ちて走り出で、この體をみて山吹のそばへ立寄る。)

姉上……。姉上……。しつかりなされ。

(小彌太は姉を介抱してゐる。上のかたより鞆繪は馬に乗り出て出づ。)

鞆繪。小彌太ではないか。

小彌太。お、鞆繪どの……。姉がこゝに倒れてゐる。

姉が……。山吹どのが……。こゝで討たれて……。

(鞆繪は小彌太に馬の口を取らせて鞍より降り立てば、小彌太は馬を松の木に繋ぐ。鞆繪の聲を聞いて、山吹は顔をあげる。)

山吹。鞆繪どのか。

篠原合戦

鞆繪。

山吹どの。さしたる深手でもあるまいに、氣をたしかにお持ちなされ。

山吹。

いや、いや、數ヶ所の深手で所詮生きようとは思はれませぬ。わたしの亡いあとは殿が朝夕の御介抱、何分ともに頼みます。

鞆繪。

それは云ふまでも無いことぢやが、戦場の習といひながら、日頃姉妹のやうに仲好くしてゐたお前に、今夜こゝで別れようとは……。

山吹。

おまへは本當に……。わたしを姉妹のやうに思つてゐて下されたか。

鞆繪。

え。

山吹。

わたしは今こそ正直に懺悔する。思へば女は淺ましい。うはべは姉妹のやうに睦まじく暮してゐながら、お前が病み煩ひでもしてくれるか、どこぞで討死でもしてくれるやうにと、わたしは心で祈つてゐました。

(云ひかけて弱るを、鞆繪は介抱する。小彌太は腰につけたる吸筒を把つてみて、水が無いといふ思入れ。)

鞆繪。

そこらに清水はあるまいか。早く探して來たがよい。

(小彌太は吸筒を持ちて、下のかたへ走り去る。)

鞆繪。

山吹どの……。 (涙をぬぐふ。) おまへの懺悔を聞く上は、死んでゆく人に嘘は云はれぬ。まことを云へば、わたしも……。わたしも……。やつぱりお前と同じ心であつた。(山吹の手を把る。) ゆるして下され、堪忍してください。

山吹。

その詫言はわたしも云はねばならぬ。今夜もおまへを出しぬいて、わたしが眞先に打つて出て、あつぱれ功名手柄をして、殿のお褒めに預からうと……。

鞆繪。

お前がいつの間にか打つて出たと聞かされて、扱は先を越されたかと心もそゞろに駈けて來たが、まつたくお前のいふ通り、思へば女は淺ましい。その醜い心を淨めるには、おまへの最期を見とゞけて、わたしも今夜のうちに花々しく討死するより外はあるまい。

山吹。

(鞆繪の草摺に取りつく。) わたしにばかり義理を立て、殿のおん身を忘れてくださるな。おまへば死ねば、わたしが残る。わたしが死ねば、お前が残る。どちらか一人はあとに残つて……。殿のおそばに附添うて……。もう斯うなれば恨みも妬みもない。もし、鞆繪殿……。たのみます……。頼みます。

鞆繪。

(よんどころなく。) あい。

山吹。

かならず死急ぎをして下さるな。

鞆繪。

あい。それにしても息のあるうちに、殿にも一目……。小彌太は何をしてゐるか。これ、山吹どの。しつかりなされ。

鞆繪。

(鞆繪は山吹を抱き起さうとすれば、山吹はその膝に倒れかゝりて息絶ゆ。)

(死骸をながめる。)あとに残つた者が仕合せと、たゞ一筋に思ひつめてゐるが、味方五萬騎の陣中に女の友達は何つた一人……。それに別れた寂しさが……。今さら胸に泌みるやうな。(鞆繪は笠をぬいで死骸に合掌する。浪の音さびしく聞ゆ。下のかたより小彌太は吸筒を持ちて走り出づ。)

小彌太。

や、姉上は……。

鞆繪。

遅かつた。もうこの通りぢや。

小彌太。

え、かうと知つたら行くのではなかつた。(吸筒を投げ捨て、山吹の死骸を抱く。)姉上、さぞ残念であらうな。

鞆繪。

(しづかに。)なにが残念……。討死がそれほど残念か。

小彌太。

(反抗的に。)討死は軍の習だ。それを今更悔むものか。

鞆繪。

では、鞆繪を残して死んだが残念といふのか。

鞆繪。

(小彌太はだまつてゐる。)

お前としては無理もないことぢや。わたしもいつそ死にたいが、おまへの姉さまに止められて、死ぬにも死なねことになつた。兎もかくも死骸をこのまゝにしては置かれぬ。わたしがこゝに番をしてゐるほどに、楯を昇く者を早く呼んで来やれ。

(小彌太は無言にて上のかたへ立去る。鞆繪はあたりを見まはし、松の下に咲ける草花を折りて山吹の前に供へてゐると、下のかたより平家の武者一人うかゞひ出で、太刀にて斬つてかゝる。鞆繪は長巻を把つて戦ひ、二三合にして敵を薙ぎ倒す。)

三

第一場の陣中。

(義仲は鎧をきて床几にかゝり、大夫坊覺明は法師武者にて功名帳を記してゐる。ほかにも武裝の家來十餘人控へてゐる。手塚太郎光盛は女童にて、赤地錦の直垂の袖につゝみたる首を前に置き、義仲と語つてゐる。)

義仲。その不思議の敵とは何者だ。

光盛。何者かわかりませぬ。名乗れと申しても名乗りませぬ。唯わが首を取らば木曾殿の見參に

入れよと申したのみでござります。

義仲。して、その扮装は……。

光盛。それが又不思議でござります。侍かと思れば、このやうな錦の直垂を着て居ります。大

將かと思へば、あとに續く者もござりませぬ。上方西國の者かと思へば、坂東聲でござり

ます。

義仲。なるほど不思議な奴だ。

光盛。いや、まだ其上に不思議なことは、若い者かと思へば、顔には一面の皺を刻んで居ります。

老武者かと思へば、鬚鬚は黒々として居ります。

義仲。なんだか謎のやうな話だ。(覺明をみかへる。)どうだ、大夫坊。お前にその敵の正體が判

るか。

覺明。(首をかしげる。)わたくしにも判斷が付きませぬ。(光盛に。)して、貴公はその不思議の敵と

引組んだのだな。

光盛。引組んで馬より落ち、鎧の草摺をひきあけて、二太刀刺し透して首を取りました。

覺明。わが首を取らば木曾殿の見參に入れよと申したとあれば、殿が御存じの者かも知れませ

ぬ。兎も角も御實檢なされては如何でござります。

義仲。む。その首を見せろ。

(光盛は直垂につゝみたる首を取出して見せる。上方の幕の内より今井四郎兼平出づ。)

義仲。(首を見る。)なるほど見覚えがあるやうだ。幼い折に別れたので、その面さしを確には覚え

ぬが……。考へて。もしや齋藤別當實盛ではないかな。(又考へる。)併しその實盛ならば、

もはや七十に近い老武者で、鬚鬚の黒い筈がない。いや、やつぱり實盛のやうにも思はる

るが……。不審さうに眺めてゐる。)

(進み出づ。殿。その首をそれがしにお見せくだされ。)

兼平。(兼平は光盛の手より首をうけ取りて見る。)

兼平。お、これは確に實盛でござる。

義仲。實盛に相違ないか。

兼平。唯今その證據をお見せ申す。手塚も一緒に來やれ。

(兼平は先に立ち、光盛を連れて幕の内に入る。)

覺明。

兼平があのおのやうに申す以上は、やはり實盛であつたと見えます。

義仲。

それがおれにはまだ本當に呑み込めぬ。まつたく不思議のことがあるものだ。

(下のかたより鞆繪は先に立ち、山吹の死骸を楯にのせて家來二人に昇かせ、あとより小彌太も附き添ひて出づ。)

鞆繪。

殿。山吹殿がこの通りでござります。

(人々はおどろいて伸びあがる。)

義仲。

おゝ、山吹が討たれたか。

覺明。

これまで度々の合戦に、うす手一つ負はぬ山吹殿が、どうして最期を遂げられたか。

義仲。

して、その相手は……。

小彌太。

敵と相討になつて倒れて居りましたので、相手は何者が判りませぬ。

義仲。

なんにしても残念であつたな。

覺明。

惜いことを致しました。

(義仲と覺明は立寄つて死骸を見る。)

覺明。

疵は數ヶ所ぢや。よほど手痛く働いたとみえる。鞆繪どのは一緒では無かつたのか。

鞆繪。

山吹どのが倒れたところへ、おくれて駆け着けたのでござります。

義鞆。

木曾の陣には鞆繪山吹といふ二人の女武者がある。それが義仲の誇りであつたに、今夜その一人を失つてしまつたか。大夫坊よろしく回向をたのむぞ。

覺明。

こゝろ得ました。その死骸を奥へ……。

(覺明は指圖して、山吹の死骸を奥へ運ばせ、自分も附添ひて去る。小彌太も附いてゆく。)

鞆繪。

あらためて殿にお願ひがござります。何とぞあの小彌太に暫しのお暇をつかはして下さりませ。

義仲。

小彌太に暇を遣はせと……。むゝ、姉の形見を故郷へ送り歸さうといふのか。

鞆繪。

左様でござります。山吹殿の黒髪と形見の品々を弟に持たせて、故郷のお寺へ納めさせた

いと存じますが、お許しが願はれませうか。

義仲。

しかし小彌太も若い者だ。軍の途中から素直に引返すかな。

鞆繪。

殿からの御指圖とあれば、よもや忌とは申しますまい。

義仲。

むゝ、小彌太に異存がなくなれば歸してやらうよ。

篠原合戦

鞆繪。 ありがたうござります。

(幕の内より兼平出づ。つゞいて光盛は彼の直垂の袖に白髪首を乗せて出づ。)

光盛。(義仲に)御覽なされ。この首を水に洗ひましたら、かやうな白髪と相成りました。

義仲。では、鬢髪を染めてゐたのか。

兼平。それがしは其昔、實盛自身の口から聞いたことがござります。六十に餘つて軍に向ふ時、たとひ武勇は衰へずとも、老人が眞先に立つて若殿原と功名を争ふも大人氣なく、また敵の眼に老武者と侮らるゝも口惜しければ、鬢髪を黒く染め、あつぱれ若武者のやうに扮装つて、戰場へ駆け向ふ覺悟であると申して居りましたが、彼はその詞に詐りなく、若やいで討死いたしましたものと見えます。

鞆繪。實盛とは……あの齋藤實盛殿ではござりませぬか。

義仲。むゝ。その實盛だ。(手塚に)おまへは今夜大きい獲物がありさうだと云つたが、その獲物はこれであつたか。

(光盛は面目なげに頭を垂れてゐる。)

義仲。もう一度よく見せてくれ。

(光盛は首をさぐぐれば、義仲は手に取りてちつと見る。)

義仲。おゝ、實盛だ。たしかにさうだ、おれは幼少の時、この實盛に養育を受けた恩があるのは、

お前たちも知つてゐる筈だ。

光盛。それはわたくし共もかねて存じて居りますれば、實盛殿と知るならば、勿論討つのではござりませなんだが、まことに申譯のないことを致しました。眞平御免くださりませ。

義仲。おまへは知らずに討つたのだ。今さら叱つても詮ない。實盛もそれを察してゐるので、わざと名乗りを揚げなかつたのであらう。實盛が生きてこゝへ來たならば、第二の親とも思

つて孝養を盡さうものを、飽までも武士の意地を立て通し、首になつて義仲に對面するとは……いや、なまじひに女々しい涙などこぼしては、却つて實盛に笑はるゝかも知れぬ。鞆繪。小彌太が歸るとあれば丁度幸ひだ。實盛の鬢髪に形見の袖を添へて、一緒に持つて歸れと云へ。

鞆繪。かしこまりました。

(光盛は再び首を直垂の袖につゝむ。向うより諏訪八郎走り出づ。)

八郎。(勇んで)敵はおひくゝに崩れかゝつて浦つたひ山傳ひに引いてゆくやうに相見えませぬ。

篠原合戦

兼平。

思ひのほか早く埒が明きさうだな。その圖を外さずに追ひ崩せ。

八郎。

はあ。(引返して去る。)

兼平。

こゝで敵に足を溜めさせてはならぬ。一氣に追ひまくるが軍の秘訣だ。さあ、おれも行くぞ。

義仲。

さうだ、さうだ。息もつかせず追ひつめて、一人も残さず踏み殺してしまへ。(家來をかへる。)

一同。

はあ。

兼平。

さあ、來い、來い。

(兼平は先に立ち、家來一同はつゞいて向うへ走り去る。義仲と頼繪と光盛はあとに残る。遠く陣鐘の音。)

頼繪。

わたくしはこれから奥へまるつて、山吹どの、御回向、それがせめてもの心安めでござります。

光盛。

わたくしも實盛殿のに向、それがせめてもの申譯でござる。

義仲。

(左右をみかへる。)

ひ、味方には山吹を失ひ、今夜はなにやら寂しいな。

(三人は暗い顔をみあはせる。篝火は消えかゝりて、浪の音さびしく聞ゆ。)

四

第二場の濱邊。夜の明ける頃。

(漁師二人と農夫一人は落ちたる矢を拾つてゐる。漁師の一人は鎧を背負ひ、一人は長巻を二本ほど抱へてゐる。浪の音。鶏の聲遠くきこゆ。)

漁師甲。

平家は相變らず弱いことだな。

漁師乙。

ゆく先々の負け軍、まるで源氏とは比べ物にならないやうだ。

農夫。

宵のあひだはこゝらに平家が陣取つてゐるのだが、夜の明けないうちに二里も三里も引いてしまふとは、あんまり意氣地が無いではないか。

漁師甲。

意氣地が無くて丁度幸ひだ。こゝらでいつまでも戦つてゐられては土地の者が迷惑だ。

漁師乙。

負けるものは早く負けて、おれ達に拾ひ物でもさせて呉れる方が優しだよ。

篠原合戦

農夫。

拾ひものと云へば、おまへ達は鎧やら長巻やら、大分金目の物を拾つたな。

漁師甲。

その拾ひ物を目あてに、軍がまだ本當に濟まないうちから、おれ達は命がけでこゝらをうろくしてゐたのだ。

漁師乙。

もう大丈夫と見きはめを付けてから出て来たのでは、碌な拾ひ物もないのが當り前だ。

農夫。

さう云はれ、ばそんな物だが、あつちへ行つてみたら、まだ何か拾ひ當てるかも知れないぞ。

漁師甲。

さうだ、さうだ。こんな事ではおれもまだ氣が濟まない。

農夫。

いや、どうも慾が深いな。

漁師乙。

まあ、お前とおなじ事だ。

(三人は笑ひながら矢をかゝへて下のかたへ立去る。薄く雨の音。上のかたより小彌太は旅姿にて笠を持ち、小者に馬を牽かせて出づ。馬の上には山吹の鎧、小袖、その他の形見の品々が積んである。)

小者。

(空をみる。)あひにくに降つてまゐりました。

小彌太。

む。降つて来たやうだな。

小者。

夜なかには薄月が出てゐましたが、明け方から又陰つてまゐりました。

小彌太。

濡れるのも仕方がない。どうで面白い旅ではないのだ。

小彌太どの。

(二人は力なげに行きかゝる。上のかたより鞆繪は鎧をぬいで蓑をかゝへ、笠をかざして出づ。)

小彌太。

(みかへる。)お、鞆繪……。(不愛想に。)なにか用があるのか。

鞆繪。

別に用があると云ふでもないが、途中までお見送りに来ました。忘れ物はござるまいな。

小彌太。

實盛殿の鬘髪と姉の黒髪は肌に着けてゐる。形見の品々は鞍に積んである。ほかに忘れ物はない筈だ。(行きかゝる。)

鞆繪。

皐月の習で又ふり出して来た。形見の品々を濡らさぬやうに……。

鞆繪。

(鞆繪は鞍の上に自分の蓑を着せる。小彌太は無言で見つめてゐるが、俄に鞆繪を斬らうとして刀に手をかける。鞆繪はそれと覺りて、わざと小彌太に身を摺り寄せる。)

鞆繪。

木曾へ歸つて姉さまの御供養を濟ませたら、再び引返して来るのであらうな。

小彌太。

勿論のことだ。殿のお指圖で一旦は歸るものゝ、すぐに又引返して来るのだ。

鞆繪。

おまへが引返して来る頃には、わたし達はもう都へ上り着いてゐるであらう。先へ行つて

篠原合戦

篠原合戦

篠原合戦

篠原合戦

篠原合戦

篠原合戦

篠原合戦

篠原合戦

待つてゐますぞ。

小彌太。おれも早く都へ行きたいのだが……。なに、夜も晝もあるき詰めで、やがて後から追ひ付くわ。

小彌太。さみだれの時節で雨が多い。道中は氣をつけてお出でなされ。

(小彌太は刀をぬき兼れて躊躇してゐる。)

小彌太。わたしに代つて姉さまの御回向を頼みますぞ。

小彌太。そんな事をおれが知るものか。

(小彌太は情なく云ひ放して、足早に向うへ立去る。小者も馬を牽いて附いてゆく。薄く雨の音。雞の聲。鞆繪は笠をかざして見送る。下のかたより今井兼平出づ。)

兼平。(向うを見る。)あれへ行くのは小彌太だな。

兼平。姉のかたみを馬につけて、故郷へ歸るうしろ姿は、寂しさうに見えるではござりませぬか。

兼平。故郷へ歸る者が不合せか。都へのく者が合せか、どちらが何うとも云へまいよ。

兼平。小彌太は姉に別れましたが、わたし達兄妹も何時別れるか知れませぬな。

(急に笑ひ出す。)今朝にかぎつて、お前はひどく弱いことをいふな。一寸先は闇の世の中に、

鞆繪。

なにを考へても無駄なことだ。おれたちは殿に引摺られて、行き詰る所まで行くより外はあるまい。それから先のこと誰にわかるものか。

(思ひ直して。)ほんにさうでござります。行き詰まるどころまで行き着いて、生きるも死ぬも殿と一緒に、覺悟をしつかり決めてるれば、別に考へることも迷ふこともござりませぬ。では、兄上。

兼平。

氣ぜはしない殿のことだ。今朝もすぐに出發などと觸れ出されうも知れまい。さあ、行かう。(笑ふ。)山吹どのが缺けたので、殿も寂しがつてゐられるであらう。

殿よりもわたしが寂しい。おゝ、雨がだん／＼に強くなつて來た。

(鞆繪は一足二足立ち戻りて、小彌太のゆく手を見送る。雨の音。時鳥の聲。)

幕

朝鮮屏風

昭和四年十月作。

昭和四年十一月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——狩野寛信（市川左團次） 寛信の妻お直（市川松蔦）
狩野勝信（市川壽美藏） 狩野菊信（市川猿之助） 菊信の妹お雪（市川松蔦）
阿部豊後守（市川中車） 城坊主徳阿彌（市川左升） など。

登場人物——狩野寛信。寛信の妻お直。寛信の長男太郎。同次男次郎。狩野勝信。狩野菊信。菊信の妹お雪。阿部豊後守。お城坊主徳阿彌。適齋。裕賀。柳甫。寛信門人。兼松、峰次郎。ほかに寛信の門人。繪掛りの役人。御小納戸の役人。お城坊主。中間。茶店の娘。托鉢の僧。長屋の男。女房。娘。子供など。

第一幕

徳川時代。文化十二年、春三月の午前。

深川六間堀の裏家。但しあまりに見苦しからぬ家の作りにて、上のかたの佛壇には灯が點つてゐる。その下は押入れ。つゞいて奥へ出入りの襖。下のかたは竹格子の眩かけ窓。前は縁側にて、庭には

花のなき木が一本立つてゐる。庭の下のかたは低き四つ目垣にて、小さき木戸あり。外には井戸ありて、そのうしろは長屋の下身。表には飴屋の鳴物など聞ゆ。

(幕あくと、下のかたの露地口より托鉢の僧一人出で、木戸の前に立つて經をよむ。家の奥より狩野菊信、廿三歳の繪師、すこしく寔れたる體にて出で、無言に會釋して錢をあたふれば、僧は讀經を終りて立ち去る。)

菊信。このごろは世のなか切辛くなつて、裏店へまで托鉢僧が來るやうになつたか。併しけふは阿母さんの命日に、坊さんが來たのは丁度よかつた。

(菊信は佛壇にむかつて線香をそなへてゐる。下のかたより長屋の女房と娘ふたり、男の子ひとり、いづれも花見にゆく姿にて出づ。)

女房。これから皆んな出かけますから、留守をおねがひ申しますよ。
菊信。お、お出かけですか。(空をみる。)けふはお天氣は大丈夫でせう。まあ、ゆつくり遊んで

おいでなさい。

(下の方より長屋の男、やはり花見のすがたにて酒樽をさげて出づ。)

男。おい、おい。何をぐづぐづしてゐるんだ。女たちの支度が遅いので、出おくれて仕舞つた

ぢやあねえか。

向島が唐天竺へでも引越しやあしまいし、そんなに急ぐことがあるものかね。

それにしても皆んなが表に待つてゐるから、早く行きませうよ。

(菊信に。)お雪さんは……。

妹はちよいと近所まで使に出ました。

一緒においでなさると好いんだけどね。

冗談ぢやあねえ。いつまでもおしやべりをしてゐると、置き去りにして行くぜ。

阿母さん。早く行かうよ。

さあ、大急ぎ、大急ぎ。三枚だ。

ほんたうに氣の短い人だねえ。

(女たちは菊信に會釋して、男に促されながら下のかたへ立去る。菊信は縁に立つて見送つてゐる。)

空は麗かに晴れて、小鳥の聲きこゆ。下のかたより菊信の姉お雪、十八歳、佛花を持ちて足早に出づ。)

どうも遅くなりました。

そこらで長屋の人たちに逢はなかつたか。

菊信。

朝鮮屏風

お雪。

みんなで賑かに騒ぎながら、お花見に出て行きました。
(再び空を見る。)まつたく花見にはおあつらへ向きの天氣だ。この深川からは遠いところで
も無いのだが、あしかけ三年越し向島などへは行つて見たことも無い。相變らず花見は賑
やかなことだらうな。

菊信。

(このあひだに、お雪は佛前に花をそなへ、線香を供へる。)

お雪。

(妹をみかへる。)おい、お雪。おまへは花見にでも行きたくはないか。

菊信。

自分のうちは神参りとお寺まるりの外には、どこへ行きたいとも思ひません。

お雪。

(憫むやうに。)悪い兄を持つて可哀さうだな。

菊信。

いつも同じやうなことを……。兄さんが苦勞すれば、妹も苦勞する。それは當りまへの
事ではありませんか。

お雪。

世間並にいへば當り前のことかも知れないが、たゞ當りまへの事だと云つて、どうも濟ま
してはゐられないやうな氣がする。どう考へてもお前が可哀さうでならない。おまへが向
島へ行つたのは一昨年（と、し）の春だつたな。
はい。奥様のお供をして参りました。

菊信。

その明る月には……。 (妹と顔をみあはせる。) 兄妹揃つて濱町の御屋敷を出て仕舞ふやうに
なるとは……。 (嘆息する。) あゝ、やつぱり私が悪いのだ。堪忍してくれ。兄が悪いからと
云つて、なんの罪もない妹までが連坐へを受けて、一緒に難儀するといふのは間違つてゐ
る。けふは阿母さんの命日だから、これからお寺参りに行つて、お父さんや阿母さんのお
墓の前で、あらためてお詫をした上で、わたしもいよく覺悟をきめる積りだ。

お雪。

(ぎよつとして。) もし、兄さん。その覺悟といふのは……。

お雪。

(菊信はだまつてゐる。)

お雪。

(すり寄る。) お屋敷を出てから足かけ三年、いまだに御勘氣がゆりないので、お前ももう辛
抱がつゝなくなつて、もしや此世を果敢なんで……。

菊信。

なに、この世を果敢なんで……。

お雪。

(泣聲になる。) さうです、さうです。屹とそれに相違ありません。そんな覺悟は止めてくだ
さい。後生ですから止めて下さい。

(お雪はあわて、立つて、佛壇の下の押入れより刀を把り出し、兄に渡すまいとするやうに、後ろに
隠す。)

菊信。

いや、騒ぐな。騒ぐな。おまへは飛んでもない感じがひをしてゐるのだ。わたしが何で……。(手で腹を切る真似をする)そんな無分別なことをするものか。(笑ふ)は、大丈夫だ。大丈夫だ。わたしが覺悟を決めたといふのは……。これ、聞け。(少しく聲を低める)濱町へ歸參のことはもう思ひ切つて、町繪師になつて世を渡らうといふのだ。

お雪。

(又おどろく)兄さん。それは本當ですか。

菊信。

本當だ。本當だ。わたしも狩野家の苗字をすて、町繪師になつてしまふ氣になれば、繪筆を持つて人なみに世間を渡つて行かれる積りだ。あの北齋をみる。一旦は濱町様に破門されても、今では立派に賣り出して、葛飾北齋といへば江戸中で誰知らぬ者もないほどの繪かきになつて仕舞つたではないか。わたしも町繪師か浮世繪師になつて腕を磨いて……。

お雪。

(遮るやうに)それもいけません、それもいけません。それもやつぱり無分別です。あなたは濱町様の御門人で、狩野の御苗字をゆるされ、信といふ字までも名乗つてゐる身分ではありませんか。それを今さら身をおとして、町繪師の仲間入りをしようなどとは……。

菊信。

なるほど奥繪師は身分が高い、町繪師は身分が低い。わたしも以前は一圖にさう思ひつめてゐるたが、此頃では少し考へ方が變つて來た。身分の高い低いなどはどうでも好い。格式

お雪。

なぞはかまはない。いつそ町繪師になつて、自分のかきたい繪を自由にかいた方がましだと思ふのだ。さうすれば自分の身も立ち、おまへも今の難儀から救はれる。云はゞ一舉兩得で、兄妹が浮み上れるといふものだ。

菊信。

わたしはどんなに難儀をしても厭ひません、苦勞をしても構ひません。兄さんが元の通りに、濱町のお屋敷へ御歸參がかなへば宜しいのですから、明けても暮れてもそれを祈つてゐるばかりで、ほかに何んにも望みはないのです。

お雪。

その歸參をもう諦めようといふのだ。

菊信。

もし、兄さん……。いや、今が今どうすると云ふわけでも無いから、こゝでお前と云ひ合つても仕様がなない。(氣をかへて)お寺參りにこんな頭でも行かれまいから、ちよいと髮月代をして來ようか。

第 信。

(菊信は縁を降りかゝる。時の鐘きこゆ。)八幡さまの四つか。春の日は長くなつたな。

(菊信は下のかたへ去る。時の鐘つゞけてきこゆ。お雪は思案に沈みながら刀を押し入れに片附け、再

勝信。御めんなさい。
び佛壇に線香をそなへる。下のかたより狩野勝信出づ。勝信は廿七八歳ぐらゐの繪師。

お雪。(みかへる。)お、勝信さん。まあ、どうぞこちらへ……。

勝信。いつも綺麗に片附いてるますな。

お雪。一向に掃除も行きとまきませんで、お恥かしうございます。
(勝信は内に入りて坐に着く。)

お雪。蔭ながらお噂をいたしてゐるばかりでございますが、お屋敷ではどなたもお變りはござい

ませんか。

勝信。殿様をはじめ、どなたもお達者だ。さうして、兄さんは……。

お雪。兄は近所の髪結床へまゐりました。鳥渡呼んでまゐりませう。(立ちかゝる。)

勝信。いや、髪結床なら手間の取れることもあるまい。そこで、兄さんはこの頃何をしてゐるな。

お雪。(もじくしながら。)本来ならば謹慎いたして、御歸參のかなふ時節を待つてゐる筈でござ

います、唯遊んでも居られませんか……。

勝信。(うなづく。)何か仕事でも引受けてゐるのか。それも無理のないことだ。又さうしなけれ

ば立ち行くまいが、まさかに以前のやうなことはあるまいな。

お雪。わたくしも傍から氣をつけまして、二度とそんな事のないやうに……。

勝信。それを聞いて私も安心した。今もいふ通り、たゞ遊んでもゐられないので、内々で町家の繪

をたのまれて書く。それはよんどころ無いとしても、茶屋小屋なぞの註文をひき受けてゐ

ると、殿さまの御立腹はいよく募つて、いつまで立つても御勘氣の赦りる時節はあるま

いぞ。(膝をすゝめる。)いや、實はけふもその事だつねて來たのだが……。

お雪。それはどう云ふお話でございます。(云ひかけて氣がつく。)あれ、自分の話にばかり氣を取

られて、まだお茶も差上げませんで……。(立ちかゝる。)

勝信。いや、お茶などはどうでも好い。そこで、お前がたもその噂を聞いてゐるかも知れないが、

この三月の末には朝鮮の來聘使の一行が江戸へ出府することになつてゐる。

お雪。そんなことは一向に存じませんでした、その朝鮮の來聘使とか申しますのは、どういふ

ことでございます。

勝信。つまり我國といつまでも和睦をつゞけるために使者をよこすので、向ふでもなか／＼費用

がかゝることだらうが、こちらでも莫大のお物要りだといふことだ。その朝鮮人は登城し

朝鮮屏風

て將軍家にお目見得を許され、人參や蠟や色々の國産物を献上すると、お上の方からも相當の引出物をくださった上に、本國へのお土産として金屏風一雙を持たして歸るのが昔からの例になつてゐて、それを朝鮮屏風といふのだ。

お雪。朝鮮屏風……。お屋敷に居りましたときに、誰かからそんなことを聞いたやうでございませうが……。朝鮮屏風とはさういふものでございしましたか。

勝信。その御屏風の繪をかくのが奥繪師のお家では一生に一度のお役目で、内の殿様は今度そのお役を仰せ付けられたのだ。

お雪。(よろこんで。)それはまあお目出たいこととございます。奥様をはじめ、皆様も皆喜ばせてございませう。

勝信。勿論お屋敷中は大よろこびでもあり、心配でもあり、殿さまも此のあひだから一生懸命に繪筆を握りつめておいでなされたが、やうく昨日の午頃までにすつかりお出来あがりになつたので、私たちも先づほつとした。その出来あがるまでの殿様の御苦心は、傍で見てもあると實に物凄いくらゐる……。いや、そんなことはあとで話すとしまして、そのお目出たい折柄を幸ひに、菊信が破門のお詫びをしたいと思いますと思つて、その相談に出て來たのだ。

お雪。(涙ぐんで。)ありがたうございます。有難うございます。大勢の御門人のなかでも兄の身上を心配して、いつもく御親切にお世話下さるのはあなたばかりでございます。御恩は決して忘れません。

勝信。それは兄弟子の役で、別に恩に着て貰ふほどの事でもないが……。

お雪。(せいて。)して、兄の御勘氣はゆるる事になつたのでございませうか。

勝信。(しづかに。)いや、まだなか／＼そこまでには運んでゐないのだが……。

お雪。あなたからお願い下さつたのではないのでございますか。

勝信。知つての通りの殿様の御氣質だ。迂濶なことを云ひ出すと、却つて仕損じるからな。

お雪。(いよく急いで。)では、どうして遣らうと仰しやるのでございますか。

勝信。どうすると云つて、わたしの腹もまだはつきりとは決まつてゐないから、菊信と膝組みでよく相談をする積りだ。

お雪。(下のかたより菊信出づ。それを見て、お雪はあわてゝ出る。)

菊信。兄さん。さつきから勝信さんが待つておいでよす。

菊信。なに、勝信さんが……。

お雪。

兄さんに色々御相談があるといふので……。

菊信。

わたしに相談がある……。

お雪。

まあ、早く、早く……。

(お雪は兄の手を取って、いそいで内へ引きあげる。菊信は煙にまかれながら勝信に挨拶する。)

二

日本橋濱町、幕府の奥繪師狩野寛信(融川院)の屋敷。立派なる座敷の構へにて、上のかたには大いなる床の間、これに探幽か隨川の大幅をかけ、次に違ひ棚、次に出入り襖あり。折りまはしたる縁側の上のかたには、主人の畫室のあるこゝろにて、少しくあとへ下げたる一間あり。庭には石燈籠、飛び石などありて、上のかたには木蓮、下のかたには櫻の大樹、いづれも花盛りの體。下のかたには竹垣あり。

(あるじの狩野法眼寛信、三十八歳、法眼なれば剃髮、褥の上には坐りて脇息に倚つてゐる。奥繪師は格式高く、その主人を殿様と呼ぶが習と知るべし。手あぶりの火鉢の前にはその妻お直が坐つてゐる。鶯の聲きこゆ。)

寛信。

お、うぐひすが鳴いてゐる。花もやがて散るといふに、鶯はまだ春を惜んでゐるとみえるな。

お直。

去年の暮からこの春へかけて、雪の随分多い年でございましたので、三月になつてから初めて鶯の聲を聞くやうになりました。わたくしも一々はかぞへても居りませんでした。暮から春へかけて廿八度も雪が降りましたさうで、こんなことは近年にめづらしいと申し居りました。

寛信。

ほう、そんなにも雪が降つたか。それでは定めて餘寒も強かつたであらうな。わたしは自分の仕事に夢中になつてゐたので、雪が降つたか雨が降つたか風が吹いたか、寒いか暖いか一向に氣が注かなかつたが、その御用も先づ片附いて、初めてほつとした心持になると、世間はいつの間にか春になつてゐて、早い花はもうそろそろと散りかゝる。春の短いのは年

お直。

年のことだが、今年の春は取分けて短いやうに思はれるな。殊に先頃中は大事の御用にお氣をつめておいでなされましたので、猶さら月日の立つのが早いやうに思召されたのでございませう。一生に一度のお役とは申しながら、毎日あんなに

も根氣をお詰めなされて、若しやおからだに障りはしまいかと、わたくし共も絶えずお案じ申して居りました。

寛信。

みんなも心配してくれたであらうが、わたしも實に心配した。およそ奥繪師の御用といへば本丸の御用、日光の御用、いづれもおろそかにはならぬのであるが、取分けて朝鮮屏風は異國へ渡るものだ。本丸や日光のお仕事はたとひ少々が出来があつても、寛信一人の不覺で済む。併し済まぬのは今度の朝鮮屏風で、萬一これを仕損じたら寛信ばかりの恥辱でない。日本の繪はこんなにも拙いものかと異國の人々に笑はれたら、わが日本國の恥辱になる。それを思ふと、わたしもどんなに苦勞したことか。御用をうけたまはつた其日から、きのふやうやく出來するまで、夜もおちくは眠られず、三度三度の食ふ物にも本當の味がわからず、いはゆる寢食を忘るゝとは全くこれであつたよ。

お直。

それは幾重にもお察し申して居りますので、殿様の御用の済むまでは、屋敷中の者にも云ひ渡しまして、お仕事のお邪魔にならぬやうに、大きい聲さへも出してはならぬと堅く戒めて置きました。

寛信。

(ほゝ笑む)それは皆んなも窮屈であつたらう。もう今日からは遠慮はない。御屏風の御吟

味がとゞこほりなく相濟んだらば、屋敷内で心ばかりの酒宴を催す積りだ。

お直。

わたくし共もその積りで、勝信などは今からそれを待ちかまへて居ります。

寛信。

(笑ふ) あいつめ又酔つて騒ぐのであらう。併し歌舞伎役者の物真似などをして、むやみに立騒ぐことはならぬと云つて置け。

お直。

かしこまりました。

(奥の襖をあけて、寛信のせがれ太郎(後の昭信)十五歳、次郎(後の助信)七歳、弟子の兼松に伴はれて出づ。)

寛信。

おゝ、子供たちは歸つて來たか。

太郎。

唯今戻りました。(次郎と共に手をつく。)

兼松。

お里方でも宜しくと申されました、いづれ改めてお祝ひにあがるとの事でございました。

寛信。

わたしの仕事の邪魔になるといふので、子供たちはお直の里方へあづけられてゐるか。これも定めて窮屈であつたらうな。

お直。

みんなおとなしくしてゐましたか。おちい様に叱られるやうなことはありませんでしたか。

太郎。

わたくしは勿論、次郎も吐られたことはございませんでした。

次郎。

大層お行儀が好くなつたと云つて、おぢい様に褒められました。

寛信。

それはどうも當てにならぬぞ。

兼松。

いえ、どなたも本當に褒めておいでなされました。

お直。

それではわたしも御褒美をやりませうか。さあ。

寛信。

(お直は次郎の手をひいて立ちあがる。)

お直。

久しぶりで家へ歸つたと思つて。羽目をはづして騒ぐなよ。

お直。

(笑ひながら)騒げば又追ひ出してしまひます。

(お直と次郎は先に立ち、太郎と兼松も寛信に會釋して奥に入る。うぐひすの聲。寛信は立つて縁に出で、しづかにそれを聞いてゐる。下のかたの垣のかけより狩野勝信が先に立ち、あとよりお雪が忍び出づ。お雪は衣服をあらためてゐる。勝信はお雪を櫻の木かけに忍ばせて、自分ひとり進み出づ。)

勝信。

殿様、唯今戻りました。

寛信。

深川へ行つたとか云ふことであつたな。

勝信。

はい。八幡様へお禮参りに行つてまゐりました。

寛信。

境内の櫻も盛りであらうな。

勝信。

(曖昧に)はい、はい。いやもう満開でございました。

寛信。

今度はおまへにも色々手傳つて貰つたな。繪具の解き方が悪いなぞと云つて、たび／＼やかましく叱つたが、おかけで先づ思ひ通りの繪が出来あがつたやうだ。就ては、今も話してゐたことだが、お屏風の御吟味が無事に相濟んだらば、内祝ひの酒宴を催す筈だ。その

ときには私が免すから遠慮なしに飲め。

勝信。

ありがとうございます。して、そのお祝ひのお席へはどなたをお招きになるのでござい

す。

寛信。

わたしは大勢の客を呼びあつめて、華やかな酒宴を開いたりすることは嫌ひだから、内祝

ひの席に列なるものは主立つた親類と弟子達ばかりだ。

勝信。

御門人はみなお招きにあづかるのでございますか。

寛信。

む、弟子は他人でないから、みな呼んでやる積りだ。

勝信。

左様でございますか。(考へる。)

寛信。

なにを考へてゐる。弟子達をみな呼ぶのは不承知か。

勝信。

いえ、決してそんなわけではございませんが……。そのおめでたいお祝ひのお席へ出るにも出られない不運な人間があるかと思ひますと、わたくしは可哀さうでなりません。

寛信。

(眉をよせる。) わからないことを云ふ奴だな。その不運な人間とは誰のことだ。

勝信。

はい。(躊躇してゐる。)

(お雪は櫻のかけより顔を出して窺ひ、寛信と顔を見あはせて再び木かけに隠れる。寛信は扱はと覺りて、勝信を睨む。)

寛信。

勝信。

勝信。

はい。

寛信。

おまへの云ふことは私には判らない。判つたところで何うなるものではない。この屋敷内へ滅多な者を連れ込んでならぬぞ。

(寛信は機織を損じて、縁側づたひに上のかたの晝室に入る。勝信は困つた顔をして跡を見送つてゐると、木かけよりお雪忍び出で、勝信の袖をそつと曳く。勝信は上のかたを指さして、あの通りだから申々むづかしいと眼で知らせるに、お雪は涙ぐむ。)

勝信。

(慰めるやうに。) 殿さまの氣むづかしいのは覺悟の上だから、力を落すことはない。途中でも相談して来た通り、かうなれば二番手だ。奥さまをこゝへお呼び申して来るから、少し待つてゐるが好い。

(勝信はぬき足をして縁にあがり、奥の襖をあけて入る。お雪はあたりを窺ひながら再び櫻の木かけに忍ぼうとする時、庭の上のかたより次郎出で、お雪をみて走り寄る。)

次郎。

これ、雪ではないか。

お雪。

はい、はい。(思はず駈け戻る。) 雪でございます。雪でございます。よく覺えてゐて下さいました。

次郎。

お前もわたしを覺えてゐるだらうな。

お雪。

なんで次郎さまを忘れませう。あしかけ三年お目にかゝらないうちに、すつかり御成人なさいました。(なつかしさに次郎の顔をながめる。) わたくしがお暇をいたゞきましたから、

その當分はあなたがわたくしをお探しなすつて、雪や雪やお泣きなされたと云ふことを勝信さんからも聞いて居りました。

次郎。

雪は又こゝへ戻つて来たのか。

朝鮮屏風

お雪。戻つて参りたいのは山々でございますが……。(泣く。)

次郎。雪が戻ればわたしも嬉しい。さあ、お母様のところへ一緒に行かう。(お雪の袂をひく。)

お雪。いえ、それは悪うございます。

次郎。なぜ悪い。お母様のところへ行くのが悪ければ、兄さまのところへ行かう。

(次郎はお雪の袖をひいて、上のかたへ連れて行かうとすれば、お雪は拂ひかれて困つてゐる。奥の襖をあけて、勝信はお直を案内して出づ。)

お直。お、雪か。

お雪。奥様……。お久しぶりでお目通りをいたします。

お直。おまへ達兄妹のことは勝信から大抵聞いてゐます。(云ひかけて勝信をみかへる。この子がここにゐては話の邪魔になる。)

(あちらへ連れてゆけと眼で知らすれば、勝信は呑み込んで次郎の手を取る。)

勝信。次郎様。お兄様が呼んでおいでなさいます。さあ、いらつしやい。

次郎。そんなら雪も一緒に……。

勝信。雪はあとから参ります。まあ、あなたがお先へ……。いゝえ、雪は屹と参ります。

(勝信は次郎をすかしながら、無理に上のかたへ連れて去る。)

お直。さあ、遠慮なくこゝへ掛けたがよい。

お雪。はい、はい。(縁に腰をかける。)

お直。今更云つても返らぬことだが、あの菊信はたしかに心得違ひでありました。公儀の御繪師

はお止め繪師で、大名衆やお旗本の頼みならば格別、みだりに他人の註文をひき受けて筆を執ることはなりません。まして町人の頼みなどは決して受けぬことになつてゐます。

その門人に對しては別に制限は無いとはいふものゝ、已に狩野家に師弟の證文を入れて、信といふ一字までも許されてゐるほどの者は、それ相當の遠慮が無くてはならぬ筈です。

それはもう一言の申譯もございません。兄は若氣のあやまりから、嚴しい殿様のお眼を忍んで深川の茶屋遊び、それが縁となつて料理茶屋の座敷屏風をかきましたのは、仰しやる

通り重々の心得違ひで、なんとも恐れ入つたことでございます。

お直。それが殿さまのお耳に這入つて、町人も町人、茶屋船宿の屏風をかくとは、狩野の家に瑕

をつける奴と、御立腹のあまりに破門となつたは、あながちに殿様がきびしいばかりでなく、どこの狩野家でも同じことで、中橋でも木挽町でも鍛冶橋でも、よもや其儘には捨て

置きますまい。兄の縁につながつて、お前もこの屋敷に奉公してゐたのが不仕合せで、兄が破門となれば妹も長の暇、おまへに罪のないことは萬々判つてゐながらも、何と取りなしをする事も出来ず、その後は定めて苦勞してゐることであらうと、わたしも蔭ながら案じてゐました。

お雪。(泣く)心得違ひのわたくし共を、それほどまでにお心にかけて下さいますとは、勿體ないほどに有難いことでございます。そのお慈悲に甘えまして、我儘勝手の御訴訟ながら、このたびのお祝ひに就きまして……。

お直。

菊信の破門をゆるしてくれと云ふことは、勝信からも内々でわたしに頼んでゐます。菊信は年こそ若いが行末の見込みもある奴と、殿様もかねて仰せられました。それを一旦の心得違ひからやみ／＼と朽ちさせて仕舞ふのは、本人はいふに及ばず、わたし達とても殘念に思ひますから、なんとか殿様に申上げて……。

お雪。

では、あなたからお願ひなされて下さいますか。

お直。

このお目出たい折柄であれば、わたしから改めて願つてみませう。

お雪。

ありがとうございました。(縁に手をつけて泣く。)

お直。して、けふはお前ひとりで来たのか。それとも兄も一緒ですか。

お雪。はい。あの……。

(お雪はうしろを見かへれば、櫻のかげより菊信うかゞひ出づ。)

お直。お、菊信……。

奥様……。

(菊信は進み出ようとする時、上のかたの晝室より寛信出づ。菊信はあわて、再び木かげに隠れる。)

寛信。この屋敷内へ滅多な者を連れ込んでならぬと云ひ聞かせて置くのに、勝信めは仕様のな

い奴だ。これ、雪。おまへはこゝへ何しに來た。

お直。(取りなすやうに。)今度のおめでたい折柄に、兄のお詫をねがひに出たのでございます。

寛信。めでたいか目出たくないか、まだ判らぬ。たとひ目出たにしていながら、それとこれとは

別物だ。兄は勿論、雪も出入りを差止められてゐる身の上ではないか。誰に許されてこゝ

へ來た。早く歸れ。

お雲。

はい。

お直。でも、雪があまりに可哀さうでございますから、わたくしからもお願ひ申しまして……。

朝鮮屏風

寛信。

え、お前までが餘計な口出しをするな。(木かけに菊信が忍んでゐることを意識してゐるやうに。)大勢の弟子の手前、一人の弟子に涙をかけてはゐられぬ。(お雪に。)さあ、歸れ、歸れ。(云ひ捨て、行きかゝる。)

お雪。

(一生懸命に叫ぶ。)もし、殿様……。こゝでお詫が叶ひませずば、兄は再び浮む瀬がござい
ません。おねがひでございます。お願ひでございます。

寛信。

やかましい。歸れといふのに……。

(激しく叱り付けられて、お雪も菊信も躊躇する。鶯の聲。)

幕

第一幕

一

第一幕より四五日後の午前。

江戸城内の御繪部屋(奥繪師の溜り所をいふ。)にて、正面も左右も襖。よきところに衝立、刀掛書院火鉢などあり。

(お城坊主徳阿彌、適齋、祐賀、柳甫の四人が控へてゐる。時計の音きこゆ。)

徳阿彌。

お、四つのお時計が鳴る。濱町殿がもう登城の時刻だ。

適齋。

けふは朝鮮屏風の御吟味といふ大切の日だから、いつもより早く登城の筈だに、今朝はず

こし遅いやうだな。

祐賀。

いや、四つと云つても諸役人の出座は四つ半ぐらゐるならう。

柳甫。

それでも濱町どのはあの通り嚴格な人物だから、時刻を違へずに詰めてゐる筈だが……。

徳阿彌。

それだからおれも心配してゐるのだ。早く登城してくだされば好いが……。 (立ちかゝりて

下のかたを覗く。)

適齋。

これ、徳阿彌。貴公はなぜそんなにそはくしてゐるのだ。今朝はなんだか様子が可怪い

ぞ。ゆうべの夢見でも悪かつたか。

徳阿彌。

いや、夢見どころではない。聞き捨てならぬ一大事、どうも落付いてはゐられないのだ。

祐賀。

その一大事とはなんだ、なんだ。

朝鮮屏風

柳甫。

けふの御吟味についての事か。

徳阿彌。

え、女童の知ることならず。なんでも好いから黙つてゐろ。併しどうも落付いては
られないな。濱町殿はなぜ遅いのか。おい、誰か御玄關へ行つて見て来てくれ。

(祐賀と柳甫は立つて下のかたへ去る。)

適齋。

なんだか天氣が陰つて来たやうだが、こゝで一と雨降れば、ことしの花ももうお仕舞だ。
おい、おい、なぜ黙つてゐる。貴公はまつたく可怪いぞ。一體どうしたと云ふのだ。

徳阿彌。

まあ、まあ、静にしてくれ。ふだんは暢氣な徳阿彌でも、けふと云ふ今日は千萬無量の苦
勞があるのだ。貴公達のやうな慾張り坊主の相手になつてゐられるものか。

適齋。

妙なところへ慾張りを引合ひに出すが、さういふ貴公もあんまり慾の皮の薄い方でもある
まいぞ。

徳阿彌。

まあ、なんでも好い。

(徳阿彌はそばへ立つて下のかたへ行きかゝる時、下のかたの襖をあけて、狩野寛信は白の法眼

袴、小刀をさし、祐賀が犬の刀を持ち、柳甫とほか二人の坊主に案内されて出づ。)

徳阿彌。

お、御登城でございましたか。(適齋と共に手について會釋する。)

徳阿彌。

(寛信も會釋して、しづかに座に着く。祐賀は刀掛けに刀をかける。)

(考へて。)これ、これ。おれは濱町さまに些つと内々で申上げたいことがあるから、皆んな
は暫くこゝを遠慮してくれ。

適齋。

おれも居ては悪いのか。

徳阿彌。

悪いと云ふでもないが、まあ行つてくれ。

適齋。

む。

(適齋は澁々立ちあがり、祐賀その他もみな立去る。)

徳阿彌。

(すり寄る。)もし、殿様。あなたのお耳に入れて置きたいことがございますが……。

寛信。

なんだな。

徳阿彌。

實は今度の御屏風につきまして……。

寛信。

御屏風について……。

徳阿彌。

わたくしが些つと聞き込んだことがあるのでございます。こんなことを迂濶に申上げて好
いか悪いか存じませんが、平生から色々お世話になつて居りますので……。

寛信。

それはどういふことだな。

朝鮮屏風

徳阿彌。

それは……。

(徳阿彌は寛信の顔を見て、又云ひ出しかねて躊躇してゐる。寛信もだまつて相手の顔を見てゐる。上のかたの襖をあけて、祐賀出づ。)

祐賀。

滑町様、お召しでございます。

寛信。

はあ。

(寛信はそのまゝ立ちあがる。徳阿彌はもう云ひ出す術もなく、不安ながらに附き添ひゆく。)

二

おなじく城内の書院。正面には寛信の筆にて近江八景を彩色に描きたる金屏風一雙が立てまはしてあり。

(正面には若年寄阿部豊後守、ほかに繪掛りの役人十人が列座してゐる。下のかたに御小納戸の繪掛り二人が控へてゐる。)

阿部。

狩野はもう登城いたしてゐるな。

小納戸一。

はあ。唯今呼びにまゐりました。

(下のかたの襖をあけて、狩野寛信は徳阿彌と祐賀に案内されて出づ。坊主ふたりは會釋してすぐに立去る。寛信は一同に會釋して座に着く。)

阿部。

このたびの御用、大儀でござつた。先日出來の御屏風は我々篤と拜見いたしたが、狩野家の筆意まことに見事に相見え申すぞ。

寛信。

御賞美にあづかり、恐れ入りました。御賞美にあづかり、恐れ入りました。御賞美にあづかり、恐れ入りました。

阿部。

但しこの御屏風はあらためて申すまでもなく、朝鮮國の來聘使へおみやげとして渡さるゝ品であれば、吟味の上にも吟味をせねばならぬ。

寛信。

仰せの通り、わが國より異國へ渡しまする大切の御屏風、わたくしも一生に一度のお役目と存じまして、精々入念に仕つりました。御賞美にあづかり、恐れ入りました。

阿部。

就いては拙者も役目として、十分の吟味をいたしたが、この繪について少しく落意しがたき廉があるので、今日それをお手前に問ひ糺さうと存するが……。

寛信。

なんなりとも御遠慮なく……。(白扇にて屏風をさす。)この近江八景は圖柄といひ、筆意といひ、それらには些つとも申分

阿部。

朝鮮屏風

ないが、唯不審にみゆるのは金砂の置き方である。この通り、ある所は濃く、あるところは薄く、一種の斑が出来てゐるのは如何にも見苦しいではないか。なぜ一様に金砂を置かぬのだ。

寛信。

その御不審は御もつともござりますが、砂子を平らに置きませずに、或は疎に、あるひは密に致しましたのは、その色の疎密によつて樹木や山水の遠近を別ちましたもので、即ち遠景を薄くし、近景を濃くして、自然にその景色の浮き出すやうに工夫いたしましたのでござります。

(一座の人々は顔を見あはせて、今更のやうに屏風をみかへる。)

阿部。

遠景を疎にして近景を密にする……。狩野家に左様な畫風があるのか。

寛信。

ござりませぬ。狩野家傳來の畫風では遠近の區別なく、すべて一様に砂子を置くのが習でござります。

阿部。

では、傳來の畫風を破つて、お身が勝手に工夫いたしたのか。

寛信。

未熟ながらも家傳の畫風にあきたらず、多年ひそかに工夫いたして居りましたのが、幸ひに今度のお役に相立ちましたのでござります。

阿部。

む。 (考へる。) お手前が多年の工夫とあれば、それにも相當の理窟があるのであらうが、我々には何分にも合點がまゐり兼ねるな。 (再び屏風をみかへる。) 就いては改めてお手前に申聞かせる。近ごろ氣の毒な儀ではあるが、この圖に遠近の區別を立てず、一様に金砂を置くやうに書き改めて貰ひたいと思ふが……。 どうだな。

(寛信はだまつてゐる。)

阿部。

拙者も素人ながら少しく繪を學んだことがあるので、いはゆる出来ない相談は申さぬ積りだ。この圖を全部かき改めると云ふのではなく、唯この金砂を一面に濃くすればよいのだ。

(寛信は矢張り黙つてゐるに、御納戸は見かれて注意する。)

小納戸一。

狩野どの。

小納戸二。

早く御返事を申上げられい。

(寛信は猶だまつてゐる。)

阿部。

(少しく氣色を損じて。) これ、返事のないは不承知と申すのか。

寛信。

お指圖にそむくは重々恐れ入つた儀ではござりますが……。

阿部。

なぜ不承知だ。

朝鮮屏風

寛信。

唯今も申す通り、砂子の疎密によつて遠近を別ちまするは、わたくしが多年の工夫でござりまして、恐らく異國にもその畫風はあるまじく、いさゝか異國人の眼をおどろかすかも存じられますれば、このたびの朝鮮屏風は何とぞ其儘にお渡し下さりまするやうに……。

阿部。

いや、その異國へ渡すものであればこそ、猶さら我國傳來の畫風によらねばなるまい。お手前が奥繪師としてお召抱へに相成つてゐるのは、狩野派の繪書きとしてではないか。その流派の畫風を破つて、勝手氣儘の繪をかいても好いと思ふか。

寛信。

決して悪いとは存じませぬ。たとひ流派は何であらうとも、家傳の粉本によるばかりが繪かきの道ではござりませぬ。御繪師としてお召抱へになつて居ります以上、少しでも好い繪をかいて献上いたすが、わたくし共の御奉公と存じ居ります。

阿部。

理を非にまけていつまでも強情を張るな。役目を嵩に被て申すではないが、この豊後守は若年寄のお役をつとめて、奥繪師一同の支配頭であるぞ。その支配頭がこれほどに理解を加へても、お手前は飽までも不承知か。この豊後守に楯を突くか。

阿部。

(阿部の顔色はいよゝゝ悪くなる。寛信も次第に疝癰の募るをちつと堪へて黙つてゐる。)(急いで。)さあ、どうだ。早く返事をいたせ。

小納戸一。

(御小納戸は再び注意する。)

小納戸二。

狩野どの……。

阿部。

それとも拙者の指圖にしたがつて、素直にこの繪をかき直すか。

寛信。

その儀は御辭退申上げます。

阿部。

ならぬか。

寛信。

なりませぬ。

阿部。

(怒りの聲を頓げせる。)もう好い。さがれ。

寛信。

はあ。

(とは云ひしが、今まで堪へし疝癰が最後に爆發して、寛信は屹と向き直る。)

寛信。

このお席をさがる前に、たゞ一言申上げて置くことがござる。どなたもお聞きください。おのゝ方は商賣その道によつて賢しと、下世話に申すを御存じないか。書家には書家の法があり、繪師には繪師の法があつて、餘人には容易にその善悪が判るものではござらぬ。手前が若し弓馬槍劍の道に喙を容れて、彼れ是れと批判がましいことを申したら、

それぞ盲の垣覗きとおのく方は定めてお笑ひなさるでござらう。おのく方が手前の繪を御批判なさるも、丁度それと同じことでもござるまいか。失禮御免。

(寛信は立つて下のかたへ去る。人々はやゝ呆れたるやうに跡を見送る、阿部は口唇を嚙んで、持つたる扇を膝の傍へ投げつける。)

三

もとの御繪部屋。

(上のかたの襖をあけたまゝで、徳阿彌出づ。)

徳阿彌。これは大變な事になつてしまつたぞ。こんなことになりはしまいかと實は内々案じて

ゐるのだが……。

(適齋もつゞいて出づ。)

適齋。いや、どうも驚いた。濱町の大将の強情は今に始まつたことではないが、あんまり薬が強

過ぎたではないか。

徳阿彌。おれも内々で様子をうかがつてゐるが、濱町殿の云ひ條にも確に理窟はあるな。

適齋。何の、ばか／＼しい。理窟があらうが無からうが、支配頭に楯を突いて一體どうする積り

だらう。長い物には巻かれろといふ世の中に、悪強情も好い加減にするが好いのだ。

徳阿彌。その悪強情があのお人の値打だが、なにしろこれは唯では濟むまい。どうも困つたものだ。

(云ひながら上のかたを見かへる。)

(上のかたより狩野寛信出づ。徳阿彌と適齋は無言にて迎へる。)

(しづかに座に着く。)

寛信。湯を一杯のませてくれぬか。

適齋。はい。はい。(下のかたへ去る。)

寛信。さつきお前が内々でわたしに話して聞かせると云つたのは、御屏風の吟味のことであつた

のか。

徳阿彌。はい。

寛信。おまへは不斷から好くわたしの面倒をみてくれた男だ。けふの禮にこれを遣るぞ。

(寛信は腰の印籠を取りて、徳阿彌に遣る。)

徳阿彌。これは有難うございます。

(適齋は茶碗に湯を汲んで出づ。寛信は無言にて受取りて飲む。)

適齋。

なんだかお顔の色がよろしくないやうでございますな。

寛信。

む。俄に發病、難儀いたす。お前は御小納戸衆のところへ行つて、手前はここのまゝ下城

つかまつるに因つて、なにとぞ其の向へよろしく御披露をお頼み申すと云つて來い。

適齋。

かしこまりました。(上のかたへ去る。)

徳阿彌。

御病氣とあれば、お醫者を呼んでまゐりませうか。

寛信。

いや、それには及ばぬ。わたしはすぐに下るから、供揃へを申付けてくれ。

徳阿彌。

はあ。(下のかたへ去る。)

(寛信はやがて形をあらためて、將軍の座所と思はるゝ方にむかひ、両手をつきて一禮す。時の太鼓きこゆ。下のかたより祐賀出で來り、刀掛けにかけたる刀を取る。寛信はしづかに立ち上る。)

幕

第三幕

一

鍛冶橋の見附外。堀端の體にて、正面は低き堤、堀を隔て、石垣の上に堤の松を見る。下のかたに小さき葎簀張りの茶店ありて、店の前に床几一脚を置く。堀端には柳の立木あり。

(中間二人が床几に腰をかけて茶をのんでゐる。茶屋の娘が店に立つてゐる。)

(空をみる。)こりやあいけねえ。到頭ほつ／＼落ちて來たぜ。

中間甲。

成程こりやあいけねえ。

娘。

好い鹽梅にお天氣がつよいと思ひましたら、この二三日は又悪い癖が附きました。

中間甲。

たんと降らねえうちに、行くとしようか。

中間乙。

おい、錢はこゝへ置け。

娘。

毎度ありがたうございます。

朝鮮屏風

(中間等は上のかたへ行きかけて見かへる。)

中間甲。

おい、見たか。

中間乙。

む。好い男に好い女だ。畜生め、おれ達を見て奥へかくれて仕舞やあがつたぜ。

中間甲。

あんまり癪に障るから、いつまでも邪魔をしてるで遣らうと思つたんだが、斯う降り出して來ちやあ仕様がねえ。

中間乙。

まあ、さう妬くなよ。相手は若けえ奴等だ。

中間申。

おれ達だつて若けえぢやあねえか。あいつ等はどうか考へても癪に障るな。

中間乙。

まあ、好いよ、好いよ。人の世話を焼いてるで濡れちやあ詰まらねえ。さあ、行かう、行かう。

(中間乙は甲をなだめながら上のかたへ立去る。そのあひだに娘は床几の上を片附ける。店の奥より狩野菊信出づ。)

り狩野菊信出づ。)

菊信。

中間め、飛んだ見當ちがひをしてる。それにしても、あひにくの時に降り出して來たな。

娘。

もうお出かけでございますか。

菊信。

(躊躇して。)いや、もう少しこゝへ置いて貰ひたいのだが……。

娘。

では、今のうちに水を汲んでまわりますから、些つとのあひだお願ひ申します。

菊信。

あい、あい。

(娘は手桶を持ちて下のかたへ去る。店の内よりお雪出づ。)

お雪。

兄さん。

菊信。

さつきからこゝに待つてるが、まだお下りにならないと見える。(空をみる。)好い鹽梅に

大して降りもしないやうだ。

(二人は床几に腰をかける。)

お雪。

勝信さんの話では、けふの御登城でいよく御屏風の御吟味も済むといふことでしたが、

別に障りはありますまいな。

菊信。

異國へ渡す品だから、日本國の恥辱になつてはならぬと、殿様が一心をこめてお書きにな

つたのだから、恐らく障りはあるまい。いや、屹と無事に済む筈だとは思つてるが、それ

でも何だか気がかりだ。四つの御登城といへば、もうお下りになる時刻だ……。 (床几を立

つて上のかたを見る。)わたしも一時の氣まぐれに、いつそ町繪師にならうかなぞと思ひ立つ

たが、おまへや勝信さんに意見をされてみると、やつぱり殿様へ歸參をねがつて、狩野菊

朝鮮屏風

信で身を立てなければならぬと気が注いた。

お雪。 どうぞいつまでも其の心を忘れないで下さい。(氣づかほしげに。) それにしても、殿様がこのあひだの御様子では……。

菊信。 いや、あのときは取付く島もないやうであつたが、そのあとで奥さまが色々に取りなして下すつたので、御機嫌も大分直つたといふことだから、けふの御吟味のとゞこほりなく濟んだのを幸ひに、こゝでもう一度御訴訟申上げたら、十に九つは大丈夫だらうと思ふのだ。(勇み立つて。) 今までお前にも随分苦勞をかけたが、これからは屹とお前を喜ばせるやうになれるのだ。

お雪。 わたしもお屋敷へ歸られるのでせうか。

菊信。 わたしの破門が赦りれば、おまへの歸參が叶ふのは知れたことだ。

お雪。 今度の朝鮮屏風について、殿様がどんなに御苦勞なすつたかと云ふことを、勝信さんから詳しく聞かされて、わたしは涙がこぼれました。

菊信。 おまへも泣いたが、わたしも泣いた。(感激したやうに。) 殿様はまつたく偉いお方だ。その偉い先生を見すて、町繪師の仲間入りをしようなどとは、たとひ一時の魔がさしたにして

も、わたしはどうしてそんなことを考へたのか。幾度云つても同じことだが、わたしはお前よりよつほど馬鹿だ。

お雪。 あれ、兄さん。そんなことを……。

菊信。 いや、馬鹿に相違ない。畢竟そんな馬鹿だから、料理茶屋の屏風などをかゝされて、御勘氣を受けるやうにもなつたのだ。今度こそは其の馬鹿も眼がさめたから安心してくれ。それにして殿様は遅いな。(又立ちあがる。)

お雪。 どうしてこんなに遅いのでせう。(これも不安らしく立ちあがる。) まさかに道が違つたのでもありません。

菊信。 道が違ふ筈はない。いつもこの鍛冶橋見附を出るに決まつてゐるのだが……。はて、どうしたのだらう。

お雪。 (兄の手をつかむ。) 兄さん。わたしは何だか胸騒ぎがして來ました。

菊信。 むゝ。わたしも胸がどきどきして來た。と云つて、お城のなかへ駆け込むわけにも行かず。どうも困つたな。

(二人は上のかたへ行きかけて、不安らしく眺めてゐる。薄く雨の音。向うより狩野勝信、足早に)

出て来り、上のかたへ行きかけて二人をみかへる。

菊信もお雪さんもこゝにゐるか。

殿さまはどうなすつたのでございませう。

それでお屋敷でも皆さまが心配しておいでなさる。わたしも何だか不安心になつたので、途中までお迎ひに出て来たのだ。御吟味と云つたところで、所詮は型ばかりのことで、すぐにお下りになることゝ思つてゐたのに、どうしてこんな暇取るのか。

もしや御城内で急病でも……。

さあ、そんなことが無いとも云へないが、それならばお屋敷の方へ知らせがある筈だが……それを思ふと、まつたく気がかりで……。(云ひながら胸をおさへて倒れかゝる。)

これ、どうした、どうした。

動悸がだん／＼激しくなつて……。

あんまり氣を揉むからいけないのだ。(お雪を介抱する。) 落付いてゐる。おちついてゐる。病氣の話をしていると、直ぐに急病人が出来たのか。(茶店をのぞく。) おい、誰かゐるのか。えゝ、仕様がないな。

勝信。

菊信。

お雪。

菊信。

お雪。

勝信。

菊信。

勝信。

お雪。

勝信。

勝信。 菊信。 お雪。 勝信。

(勝信は店へかけ込みて茶碗に水を汲み来り、お雪に飲ませる。菊信は妹の香をさすりなどしてゐる。雨の音。そのうちに勝信は上のかたを見て叫ぶ。)

おゝ、おゝ、殿さまのお乗物だ。

殿様だ、殿さまだ。

え。殿さまが……。(立たうとして又倒れかゝる。)

これ、騒いではならない。もつとそつちへ片寄つてゐなさい。

(菊信は妹を介抱しながら跡へ引き下る。雨の音。上のかたより狩野寛信の乗物を陸尺が擔いで出づ。あとより中間二人附添ひ出づ。)

(進み出づ。) 殿様。

(乗物の中にて。) 勝信か。なにしに來た。

お迎ひにまゐりました。早速ながら御屏風の御吟味はとゞこほりなく相濟みましたか。

相濟んだ。

(ほつとして。) 相濟みましたか。

(勝信はよろこんで菊信等をみかへり、早くこゝへ來いと差招けば、菊信はお雪のそばを離れて進

勝信。

寛信。

勝信。

寛信。

勝信。

み出づ。

寛信。乗物をやれ。

勝信。いや、暫く……。途中で甚だ恐れ入りますが、こゝにお目見得をねがひます者が……。

寛信。誰だ。(察したやうに)菊信か。

菊信。はい。(土に手をつく。)このたびはお目出たう存じます。

(お雪も進み出て、無言にて手をつく。)

寛信。途中では話がならぬ。あとから屋敷へ来い。

菊信。(よろこぶ。)はい、はい。

(菊信もお雪も再び土に頭をさげる。勝信もよろこんで頭をさげる。)

寛信。勝信。

勝信。はい、はい。

寛信。お前はわたしの乗物に附いて来るには及ばぬ。菊信を連れてあとから来い。

勝信。はい。

寛信。(重れて。)菊信を連れてあとから来い。

勝信。

かしこまりました。

(勝信は乗物をやれと指圖すれば、陸尺はまた擔ぎ出して花道へ行きかゝる時、寛信は乗物の戸を

あけて見かへる。)

寛信。

菊信。

菊信。

はい。(前へ出る。)

寛信。

勘當は免してやるが、それはお前と私だけのことだ。表向きは矢はり破門されたことにし

て、これからは町繪師になれ。

菊信。

え。

寛信。

町繪師になつて、自分のかきたい繪を勝手にかけ。それが繪かきの本望だぞ。

(菊信は返事に迷つてゐると、寛信はその顔をぢつと見て、乗物の戸をしめる。陸尺は又かつぎ出

して向うへ去る。)

お雪。

もし、兄さん。今の殿さまのお言葉はどう云ふわけでございます。

菊信。

(考へる。)どうもよく判らないな。

勝信。

わたしにも判らない。併し屋敷へ来いと仰しやつたから、いづれ又くはしいお話があるだ

らう。

(雨の音。)

勝信。なにしろ斯う降つて来ては仕様がな。そこらへ行つて傘を工面して来ようか。

菊信。いえ、わたしが参ります。

勝信。なに、買ふのではない。懇意の家へ行つて一二本借りて来るから、まあ待つてゐなさい。

(勝信は足早に下のかたへ立去る。)

菊信。まつたく悪いときに降り出して来た。そこで、おまへはもう気分は好いのか。

お雪。御勘當のゆりた嬉しさに……。 (胸をさする。) そんなことは忘れてしまひました。併しまだ

何だか氣になるのは、町繪師になれと仰しやつた殿さまの思召しが……。

菊信。その謎はわたしにも解きかねるが、なにしろ勘當をゆるすとは確に仰しやつたのだから、

町繪師になるのは忌でございませと申上げて、元の通りにお弟子にして頂けば好いのだ。

お雪。わたしもさうは思ひますが……。

菊信。(笑ふ。) おまへは兎かくに苦勞性でいけない。もう斯うなつたら何も案じることがあるも

のか。(大きい聲で。) 狩野菊信は先生の破門をゆるされて、けふからは大手を振つて世の中

を渡れるのだ。はゝゝゝゝ。

お雪。もし、往來でそんな大きい聲をしては……。 (空をみる。) まだなか／＼止みさうもない。勝

信さんの歸つて来るまで……。

(茶店へ這入らうといへば、菊信もうなづく。)

菊信。さうだ、さうだ。お前も濡れて冷えると悪い。

(菊信とお雪は茶店の奥に入る。下のかたより茶店のむすめは手拭をかぶり、手桶をさげて歸り來

る。雨の音。)

二

狩野寛信の屋敷の玄關前。正面は式臺附きの大玄關にて、左右に板戸をひらき、その上は疊、う

しろは襖。玄關の左右は板羽目にて窓あり。

(門人の兼松と峰次郎は玄關の式臺に立ち、他の門人十二三人は傘をさしたるもあり、濡れながら

立つてゐるもあり。いづれも主人の歸りを待つてゐる。薄く雨の音。)

兼松。

また小降りになつたやうだ。この間に早くお歸りになればいな。

峰次郎。

勝信さんはどうしたのだらう。途中で降籠められてでもゐるのではないか。

門人一。

どうしてこんなに遅いのだらう。

一同。

どうも可怪いな。

お直。

(奥よりお直、つゞいて太郎と次郎も出づ。)

兼松。

勝信はまだ歸りませんか。

門人一。

今もそれを云つてゐる所ですが……。こゝで氣を揉んでゐるよりも、わたくしがいつそ行つて來ませう。

門人二。

いや、わたしが參ります。

兼松。

わたしも行きます。

二人。

では、誰でも好いから早く行つて來てくれ。

峰次郎。

はい、はい。

門人一、二は急いで向うへ駆けてゆく。

わたしも御門前まで出て見張つてゐませう。(引返して奥に入る。)

兼松。

おさがりの遅いのは、何か仔細があるのではございますまいか。

次郎。

よもやそんな筈はあるまいと思ふけれど、なにしろ大切の御用のことであれば、わたしも案じられてならないのです。

兼松。

わたしも途中までお迎ひに行く。兼松負つて行つてくれ。

お直。

はい、はい。お供いたします。

兼松。

(兼松は次郎を脊負ひて奥に入る。向うより門人一が傘をさしかけて、お坊主の徳阿彌を案内して出づ。)

徳阿彌。

殿様はまだお下りになりませんか。

お直。

(式臺に降り立つ。) まだ下らないので案じて居ります。

徳阿彌。

はてな。殿様がお下りになると、直ぐにあとから早駕籠で追つて來たのだが……。では、あとの雁が先になつたかな。

お直。

して、御吟味は無事に済みましたか。

徳阿彌。

そのことでは。私もなんだが氣になるので……。いや、こゝではお話が出来ない。兎もかくも奥へまるつて申上げるとしませう。

朝鮮屏風

一六七

お直。(不安らしく。)では、もしや何事か……。

徳阿彌。(おさへるやうに。)まあ、まあ、奥へ……。

(徳阿彌はお直を押遣るやうにして奥に入る。)

太郎。坊主の様子がどうも變だな。

門人一。息を切つて來た様子がどうも唯事ではないやうです。

太郎。どうしたのかな。

(門人等もみな不安さうに顔を見あはせてゐる。向うより峰次郎走り出づ。)

峰次郎。(大きい聲で。)お歸り。

太郎。お、お歸りか。

(一同は形をあらためて待ち受けてゐると、向うより寛信の乗物に中間二人附添ひ、あとより門人二人も出づ。)

一同。お歸り遊ばせ。(一禮する。)

(陸尺は玄關先に乗物をかきおろせば、峰次郎は立寄つて戸を明けようとすれど、何か支へてゐるやうに戸が軋む。)

峰次郎。はてな。

一同。どうした、どうした。

峰次郎。戸が軋んで明かないのだ。おまへ達も手を貸してくれ。

(門人一と二が手傳ひて無理に乗物の戸をこち放せば、乗物のうちには寛信が口に懷紙をくはへ、白の袴を血に染めて切腹してゐるに、一同は餘りのおどろきに聲も出でず、暫くはたゞ無言で顔を見あはせてゐる。奥よりお直と徳阿彌出づ。下のかたより兼松は次郎を脊負ひて出づ。)

お直。お歸りになりましたか。

(太郎は無言にて母の手を取つて式臺よりひき下し、乗物を指さしてみせる。お直ははつとして、これも無言にて暫く見つめてゐる。徳阿彌も不安らしく覗きしが、同じくぎよつとしたまゝ無言にて佇む。薄く雨の音。人々は啞のごとく、暫時の沈黙。向うより勝信は傘をさして先に立ち、菊信とお雪は相傘をすぼめたる體にて出づ。それと見て、峰次郎はかけ寄つて勝信にさゝやけば、勝信は乗物ののそいで、これもはつとして立竦む。菊信とお雪は駆け寄つて、乗物の前より聲をかける。)

菊信。殿様……。

お雪。これはまあ何うなすつたのでございます。

朝鮮屏風

菊信。殿様……。
お雪。もし……。

(ふたりは泣きながら呼べば、寛信は眼をみひらく。)

寛信……。雪も来たか。

二人。はい。

寛信。仔細はあとで判る。さつき云ひ聞かせたことを忘れるなよ。

二人。はい。

寛信。お直。

お直。はい。

寛信。子供のことを頼むぞ。

お直。はい。

寛信。弟子達はみな揃つてゐるか。

勝信。はい、はい。

(勝信をはじめ、門人一同は乗物のまはりに集まりてひざまづく。寛信はそれを見まはしながら落

入る。うすく雨の音。)

これにて幕をおろし、又すぐに明ける。

三

同じ日の夜。

寛信の屋敷の横手にて、折りまはしたる板塀の内には櫻の大樹、花は夜目にも白く咲きみだれてゐる。下のかたは濱町河岸を見たる夜のけしき。近所の屋敷にて時廻りの柝の音きこゆ。

(上のかたよりお雪は提灯を持ち、菊信を送りて出づ。)

菊信。どこまでも送つて来るには及ばない。奥は御取込みの最中だから、おまへは早く歸るが好い。

お雪。御歸參の叶つたのは嬉しいものゝ、このまゝ直ぐに兄さんにお別れ申すのは……。

菊信。いや、そんな未練らしいことを云つてくれるな。殿さまは支配頭に楯をつき、繪かきの意地を張り通して切腹をなされた以上、定めてお家断絶にもなることかと頻りに心配してゐる

お雪。

た處、流石に役人たちも考へたと見えて、表向きは頓死のお届けで無事に済み、若さまが御家督相続ときまつたのは、嘆きの中のよろこびで、誰も彼も先づ安心したといふものだ。まだ其上に殿さまの御屏風も、とゞこほりなく御吟味済みといふことになりましたのは、重ぬくのお仕合せで、草葉のかけで殿さまもさぞ御満足に思召すこととございませう。しかし殿様の仰しやつたことは、わたしにも初めてはつきりと判つて来た。(力強く)わたしも跡へ行つたり先へ行つたり、色々迷つて来たが、今度こそは御遺言にしたがつて、いよく町繪師になる積りで、上方へ行つて一と修業して来るから、五年十年は逢へないものと思つてくれ。

菊信。

お雪。

どうしても上方へ行かなければならぬのでせうか。江戸で修業の出来ないことはないが、かうなつたら思ひ切つて生まれ土地を離れた方が、身にしみて修業が出来るだらう、おまへはお屋敷へ歸參が叶つたのだから、今まで通り奥様のお傍におとなしく御奉公してれば好いのだ。奥さまはお情ぶかいお方、そのお傍に御奉公してれば、わたしの身にはなんの苦勞もありませんが、たゞ兄さんが遠い上方へお出でなさるのが……。

菊信。

お雪。

菊信。

まだそれを云つてゐるのか。いや、それも無理はない。両親は無し、兄ひとり妹ひとり……(云ひかけて氣をかへる。)あゝ、わたしまでが釣り込まれて、涙脆くなつてはならない。さあ、おたがひに笑つて別れるとしよう。又逢ふときまで達者でゐてくれ。

お雪。

(涙をふいて)では、兄さん。どうぞ十分に修業をして、立派な繪かきになつて歸つて来てください。

菊信。

それは云ふまでもないことだ。(あとを見かへる。)せめて今夜はお通夜をして行きたいのだが、表向きは破門の身の上で皆さんの前へ顔出しも出来ない。さあ、おまへは早く歸つて、何かのお手傳ひをしる。(行きかゝる。)

お雪。

もし、雨あがりて路が悪うござんすから、この提灯を……。

菊信。

(提灯をみて)お屋敷の御紋の附いてゐる提灯をむやみに持つて行かれるものか。さあ、わたしには構はずに……。 (お雪を押遣る。)これからは御屋敷の御用が大切だぞ。

お雪。

(云ひすて、菊信はつか／＼と向うへゆく。)

兄さん。
(呼ばれて、菊信は一旦ふり返りしが、又そのままに向うへ急ぎ去る。お雪は提灯をかざして跡を

維新小話

綺堂戲曲集

見送る。上のかたより勝信出で來りて、おなじく菊信のあとを見送る。時の鐘。時廻りの柝の音き

幕

一七四

大正十三年三月作。

昭和四年十二月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——本多お信（喜多村綠郎）おいよ（水谷八重子）内藤彌之助（梅島昇）町田雄二郎（花柳章太郎）など。

登場人物——本多の妻お信。その娘おいよ。内藤彌之助。町田雄二郎。百姓五平。その倅五八。官軍の小隊長。兵士など。

千住の農家。茅葺の二重家體にて、正面の上のかたに佛壇、その下は押入れ。それにつゞいて奥へ出入りの破れ障子あり。下のかたは壁にて、これに古びたる江戸繪など貼つてあり。更に折りまはして下の方には竹の窓あり。よきところに爐を切りて、自在に藥罐をかける。縁側は竹縁にて、切株の杵ぬぎあり。庭の上のかたには小さき池にて、菖蒲が咲いてゐる。下のかたに低き木戸、その外には大いなる葉柳の立木、そのうしろには田畝や人家をへだて、上野の森が遠く見ゆ。（慶應四年五月十五日の午後。本多おいよ、十七八歳、三百石ぐらゐの旗本の娘。庭におりたちて池の菖蒲を折つてゐる。うすく雨の音、蛙の聲きこゆ。下の方より五平、五十餘歳の百姓のすがた、竹笠を持ち出て出づ。）

五平。

おゝ、お嬢さま。小さめが降つてをりますのに、外へお出なされては濡れます、濡れます。菖蒲ならばわたくしが折つて差上げませう。まあ、まあ、内へお這入りなされませ。

おいよ。

(花を手に持ちて見かへる。)ちいや、歸りましたか。鐵砲の音もしばらく止んだやうですね。

五平。

はい。いくさも大抵おしまひになつたと云ふ噂でございます。

おいよ。

いくさが終つた……。 (かんがへる。)さうして、どんな噂ですか。

五平。

はい。(躊躇してゐる。)

おのぶ。

(奥よりおいよの母お信、四十歳前後、障子をあけて出づ。)

五平。

五平。歸りましたか。上野の模様はどうでしたな。

五平。

五八めは歸つてまゐりませんか。

おのぶ。

息子はまだ歸らないやうです。

五平。

左様でござりますか。どこの家でも戸をしめ切つてをりますので、くはしいことは判りませんが、上野や根岸の方から逃げて来る人たちの噂をきゝますと、お山の方はどうも模様

がよろしくないやうでござります。(下のかたを指す。)あれ、あれを御覽なされませ。おゝ、火の手が大層あがつて來ました。(門口に出てみる。)

おいよ。

おのぶ。

(縁より降りて、おなじく見る。)ほんに上野の森のうへに火の手が高くあがつて見える。敵の大砲で焼かれたか。それとも味方が自分で火をかけたか。いづれにしても、山内があつてに紅くみえるやうでは……。 (ため息をつく。)もう大抵は判つてゐる。なんと云つてもこちらは小人數の上にあつまり勢、敵は大軍で三方から攻めかけてくる。殊にさつきから大砲の音もつゞけてきこえた。あれで隙間もなしに打ちかけられては……。

(雨の音強くなる。火のひかりも益々紅くなる。)

五平。

おゝ、雨がまた強くなつてまゐりました。

おのぶ。

その大砲の音ももう止んだか。(やはり愁はしげに火の手を眺めてゐる。)

五平。

奥さま。おつむりが濡れます。

(五平は自分の竹笠を出せば、おのぶはその笠をかざしながら立つ。)

おのぶ。

五平。

五平。

はい、はい。

おのぶ。

もうなん時でせうな。

五平。

この騒ぎで、今朝からお山の鐘はきこえませんが、さつき淺草の八つが鳴つたやうでござ

りました。

おのぶ。

日の暮れるまでにはまだ二た時ほどある。なんとかしてそれまで持ち堪へさせたいものだ
が……。 (五平に。) おまへ氣の毒ですが、もう一度そこらまで行つて、よく聞き定めて来て
はくれまいか。

五平。

では、すぐに行つてまゐります。

おいよ。

雨の降るなかをたび／＼御苦勞ですね。それ玉にでも中らないやうに、氣をつけて行つて
ください。

五平。

なに、大丈夫でござります。

おのぶ。

これ、笠を……。

五平。

いえ、これで宜しうござります。五八めはどこをうろ付いてゐるのかな。

おのぶ。

(五平は腰にさげたる手拭をとり、頬かむりして下のかたへ走り去る。雨の音。)
年寄をたび／＼氣の毒だが、上野の様子がどうも氣にかゝつてならない。

おいよ。

(小銃の音二三發、遠くきこゆ。)
また鐵砲がきこえたました。

おのぶ。

(すこし安心したやうに。) おゝ、鐵砲の音がまだきこえるやうでは、山内もどうにか持ち堪
へてゐるとみえる。

(小銃の音つゞけてきこゆ。)

おいよ。

(勇んで。) あれ、あれ、又きこえました。

おのぶ。

(これも元氣づく。) 闘ひはまだお仕舞ひにはならない。彰義隊も必死で働いてゐるとみえる。

おいよ。

おかあ様。雨が強くなつてまゐりました。もう内へお這入りなされませ。

おのぶ。

しかしこの雨が味方には天のあたへで、もつと強く降りつゞけてくれた方がよい。

(おのぶは空をみながら引返して縁にあがる。おいよもつゞいて上り、そこにある小桶に菖蒲の花を
よす。)

おのぶ。

(花に眼をつける。) ことしは四月から兎かくに雨勝で、時候がいつもより冷えるせるか、菖
蒲も今が盛りらしい。

おいよ。

六日のあやめと諺にも申しますに、けふはもう十五日、それでもまだ十分に咲き揃はない
のを見ますと、今年はやほど季節がおくれたのでござりませう。

おのぶ。

世が變れば季節も狂ふものか、毎年おちい様の御命日に菖蒲をそなへたことはなかつた

に……。

おいよ。

さうでござります。おぢいさまの御命日は五月十六日、その頃にはこの花も大抵しほんでしまひますのに、今年はめづらしいことでござります。

おのぶ。

今夜はおぢいさまのお逮夜ですから、御佛前へそなへてお置きなさい。

おいよ。

お逮夜でも御命日でも、今の身の上ではどうすることも出来まい。せめては御燈明を断やさないやうに氣をつけてください。

おいよ。

かしこまりました。

(おいよ花鉢にて菖蒲の花を程よく剪りて佛前にそなへる。おのぶは縁に立ちて表の方をながめてゐる。雨の音すこし薄くなりて、蛙の聲みだれてきこゆ。やがておのぶは佛壇のまへに來りて禮拜す。おいよもおなじく拜す。佛壇には燈明の火が薄くみゆ。)

おのぶ。

世にめづらしい長生きと羨まれて、五年まへにおなくなりなされたおぢい様は、まつたく仕合せなお方であつた。もう少し生きてゐて、この世のなかを御覽なされたら……。 (思はず眼をうるませて) あゝ、もうそんなことは云ひますまい。

(小鉢の音又きこゆ。)

おのぶ。(嬉しさに) おゝ、まだ鐵砲の音がきこえる。(起つて空をみる) 早く日が暮れ、ばよいが……。

(おのぶは奥に入る。おいよは縁に落ちたる菖蒲の葉や小桶などを片附けてゐる。下のかたより内藤彌之助、二十一歳、これも二三石の旗本の次男、町人が旅へでも出るやうな風俗にて、手甲、脚絆、草鞋ばき、大小を菰づつみにして背負ひ、すげ笠をかぶりて出づ。)

彌之助。

(木戸の外から窺ふ) 御免ください。

おいよ。

はい。(縁の端に出る) 内藤さんではござりませんか。

彌之助。

彌之助です。(左右を見かへる) すつと這入つても好いのですか。

おいよ。

どうぞお通りください。

(おいよは出迎へる。彌之助は笠をぬいで内に入り、縁に腰をかける。)

おいよ。

早速ですが、上野の方はどうでござりませう。

彌之助。

阿母さんは……。

おいよ。

奥にをります。すぐに呼んでまゐりませう。しばらくお待ちください。(奥に入る。)